
悪魔の勇者

鴉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の勇者

【Nコード】

N6410M

【作者名】

鴉

【あらすじ】

全てを失い、悪魔と化した少年。力で全てを否定する血で血を洗う戦いの果てに、彼はハルケギニアへ召喚された。仲魔を従えて向かった先で、彼は一体何を見るのか。

まだヘタクソな上に初投稿ですんで、受け付けない方はご注意を。

Prologue

世界も、人も、建物も、全てが死んだ。

そして、口ではなく力で言葉が語られる、そんな小さな世界が生まれた。

” 力ある存在による樂園を ”
モノ パラダイス

” 完璧なる統制による世界を ”
システム

” 個の自己完結による孤独を ”
自由

言葉ではなく、爪で牙で拳で武器で語られる理想。

（ふざけるな。）

（家族を、友を、平穏を。俺の全てを奪っておいて。）

一方的に強いられた犠牲。

訳も分からないままに全てを奪われた理不尽。

それでも、生きた。

呟く言葉に答えてくれる友などいない。

笑顔を見せて安心させてくれる家族もいない。

俺から全てを奪いさつた企て。

それに加担した者も利用しようとした者も、全てを俺は許せなかった。

言葉で否定し、力で否定し。

文字通り”スベテ”を否定し尽くして、残ったモノは憎しみと虚しさ。

そして、文字通り悪魔^{シャイタン}の力。

かつての自分であれば怖れの余り自ら命を絶っていたであろう程の力。

振るうことに何の疑問も持たないほど、俺は空虚になっていた。

どうでもよかったんだ。

いつ自分が死ぬか。

自分がこれからどこへ行くのか。

どこへ行こうが何も変わりやしない。

もう、俺は人ならぬ悪魔^{シャイタン}と化したのだから。

それでも僅かに残った人の心が、俺に一步踏み出させたのだろうか。

（タスケテ）

不意に浮かんだ鏡のようなゲートから聞こえてくる声。

俺を罫に掛けて喰らおうという悪魔の声だろうか。

そんな警戒心が頭をよぎる。

だが俺は、それでも一步、踏み出したんだ。

それが俺を変えたのかも知れないと、今になって思う。

第一話 邂逅

side タバサ

もちろん、不安はあった。

これから一生を共にする相手なのだ。
変な使い魔が出てきたりしないだろうか。

自分には、果たさねばならない目的がある。
その力となってくれる使い魔だろうか。

そして自分は、偽名によって召喚し、契約しようとしている。
成功してくれるだろうか。

不安の種には事欠かないが、表に出しても意味がない。
ここまで来たら、やってみるしかないのだから。

…我が名はタバサ…五つの力を司るペンタゴン…我が運命に従いし
使い魔を召喚せよ…

声を張り上げることなく、それでいて誰よりも力を込めて祈るように、呟くように、青髪の少女は詠唱を行った。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか。

不意に、虚空を一筋の光が貫いた。

使い魔が現れるはずの場所に落ちた雷に、思わず息を飲む。

舞い上がった土煙の向こうから、バチバチという耳慣れない音が二、三度。

「じじは...どこだ!？」

土煙の向こうから現れた人の形をした何か。

刺青をした少年と見えなくもないが、何か人とは違うものを感じる。

亜人か何かだろうか。

よく分からないが、強い。

周囲の状況を把握すべく辺りへ視線を配るその様子から、彼が相当場慣れしていることが読み取れた。

「人がいる…馬鹿な…マネカタとは明らかに違うが、かといって悪魔にも見えない…」

おいアンタ、ここは一体どこだ？今までどこに居た？どうやって受胎を乗り切ったんだ！」

少年が何か話しかけてくるが、意味が分からない。

ハルケギニアの言葉ではないようだ。

よく分からないが、怒気や殺気は感じない。

語気は少々強めだが、敵意から来るものではないだろうと判断した。ともあれ、言葉が通じないので話にならない。

契約すれば話せるようになるかも知れないと思い至ったタバサは、さっさと済ませてしまふことにし、彼へと歩み寄った。

s i d e o u t

気がつけば、土煙に覆われていた。

警戒していたが、襲撃時に特有の粘りつくような殺気や視線は感じない。

ただ、周りに多くの何かが居る。その気配だけはあった。

土煙で周りは見えないが、数えるのも馬鹿らしいほど修羅場を潜ってきた自分なら、

気配だけでその程度は理解できるのだ。

そんなことも分らないようでは確実に死んでいる。自分はそんな場所にいたのだから。

土煙は、そよ風で吹き散らされていく。

そこで視界に入ったのは、見知らぬ草原であった。

「……どこだ!？」

澄み切った青空。

風に吹かれて波打つ草原。

ボルテクス界ではありえない光景である。

上を見ればカグツチと、その更に向こうには丸い世界の”反対側”。
周りを見れば緩やかに振り返った荒野と砂漠、そして点在する旧世
界の名残が少々。
自分がいたのはそんな世界なのだ。

何が何だか分からない。

ふと周りを見れば、マントとローブ姿の少年少女たち。
おそらく同じ年くらいだろうか。
近くに立っているのは透き通るように青い髪をした少女であった。

「人がいる…馬鹿な…マネカタとは明らかに違うが、かといって悪
魔にも見えない…」

おいアンタ、ここは一体どこだ？今までどこに居た？どうやって
受胎を乗り切ったんだ！」

もう会うことは無いだろうと思っていた「ニンゲン」。
困惑と驚愕と疑問と僅かな喜悦をミックスしたような感情を、その
まま近くの少女にぶつけた。

…なんの反応もない。

言葉が通じないのか？見れば、日本人ではあり得ないような髪の色をしている。

極上の大理石を彫り抜いたように美しく白い肌をした少女であるが、感情を押し殺しているかのようなその青い目と相まってか、ひどく無機的な印象であった。

何を思ったか、少女は此方へ歩み寄ってくる。

敵意を感じる所作ではなかったが、それでも思わず体を強張らせた。

「お、おいアンタ…何を…むぐっ」

…頭が真っ白になった。

この状況は一体何なのだろう。

気づいたらボルテクス界とは思えない場所に立っていて。

散々探して諦めたはずの人間と出会って。

考えてみれば、自己紹介すらしていない。

なのに、いきなり「キス」。

そんな甘酸っぱい展開を期待できるほどぬるい世界に生きてはいなかったが、

人間だった頃の記憶も感情もまだある。

この行為がどういうものかは知っている。

一体何なんだこれは。

頭の中を困惑の二文字が駆け巡っていたが、それを止めたのは激痛であつた。

「ッ……ぐウッ！」

左右の手の甲に切り裂かれたかのような痛みと灼熱感が走る。

何年も、血で血を洗うような闘争を繰り返してきた。

死にかけたことなど数え切れない。

気が狂うほどの痛みも何度も経験した。

打撲、裂傷、擦過傷、骨折、火傷、凍傷、エトセトラ。

ありとあらゆる怪我の痛みを味わった末に、痛覚の鈍りを感じるまでに至った。

だが、今両手に走る痛みはそのどれとも違う。

回復魔法を使おうにも、痛みが鋭すぎて精神集中ができない。体が動かない。

同時に、脳に何か刷り込まれているような感覚もあつた。

「……………」

目の前の少女が何か言っているが、やはり分からない。

（くっ…状況が分からない今、意識を失っては…！）

必死の抵抗も虚しく、彼の意識は闇へと沈んだ。

s i d e o u t

s i d e タバサ

この使い魔なら、役に立たない事はないだろう。

そんなことを考えつつ、淡々とコントラクト・サーヴァントを済ませた。

初めてのキスだが、そんなものを惜しむような感情はもう無いのだ。彼が、呻き声とも悲鳴ともつかない声を上げる。

「大丈夫、ルーンが刻まれているだけ」

説明するが、聞いていないようだ。
痛みからか顔を歪めているが、そんなに痛いものなのだろうか。
使い魔になったことが無いから分からないが、ともあれ痛みはすぐ
治まるはず。

…

…

…

おかしい。彼の様子からして、痛みがまだ続いているようだ。
もう十数秒は経った。とつくに終わってもいいはずなのだが…

不意に、彼の体が倒れこんだ。

「…ッ！？…大丈夫？」

コントラクト・サーヴァントを行って使い魔が倒れるなど聞いたこと
がない。

僅かな驚きの色を瞳に湛えて、彼女は少年へ歩み寄った。

軽く揺さぶってみるが、反応はない。

死んではいないようだが…

ふと、彼の右手に刻まれたルーン文字が目に入る。

「…イー…ヴァルディ…？」

（まさか、彼が”イーヴァルディの勇者”なの？）

確かにそう書いてある。

思わず呆然としてしまった。

ずっと憧れていた存在。

私を守り、導いてくれる勇者。

私の勇者。私だけの…。

そんなものは物語の中にしかないと分かっているながらも、一縷の望みを捨てられなかった。

私は、僥倖に巡り合ったのかも知れない。

「ミス・タバサ…彼は一体どうしたのかね！？」

コルベール先生の声も耳に入らず、私は彼を見つめた。
驚きと、喜びを込めた目で。

s i d e o u t

第二話 契約

side 人修羅

「…ここは…俺は一体…？」

うつすらと意識が戻り、目を開ける。
見知らぬ天井が見えた。

あの後、一体どうなったのだろう。
どういう経緯があつて、自分はここに寝ているのか。

背中に感じる、清潔なシーツの感触。

悪魔化してからはベッドに寝たことなど無かった。

人間であつた頃は毎日経験していたこの感覚を懐かしく思いつつ、
彼は身を起こした。

いくつかベッドが並んでいるが、自分以外は誰もいない。

戸棚には薬品の瓶らしきものがある。

（まるで学校の保健室そのものだ…）

実際その通りなのだが、それを彼はまだ知らない。

（さて…これからどうしたものかな）

先ほど、青い髪の少女にキスされて激痛を感じたことまでは覚えて

いる。

見れば、両手の甲に見慣れない模様がある。

右手と左手に、それぞれ何か文字らしきものが刻まれている。

右手のそれは読めなかったが、左手の文字は読めた。

アクマ
” S a t a n ”

思わず苦笑してしまう。

悪魔の体となり、悪魔の力を振るって生きること余儀なくされた俺だ。

戦いの果てに漸く人と出会えた今更になって「悪魔」の烙印を刻まれようとは。

運命の女神は、どうやらよほど俺を嫌っているようだ。

以前オベリスクで死闘を演じたモイライ三姉妹の顔が浮かぶ。

いずれまた出会うことがあったら、あの綺麗な顔に至高の魔弾の二三発も見舞ってやるとしようか。

ともあれ、先ほど起こったことは、どうやら夢ではないらしい。

であれば、いずれ人間がここへ来るはずだ。

自分がここで寝ていた以上は彼らに運ばれたわけで、

こんなところで監視もつけずに寝かせている以上、おそらく害意はないのだろう。

さつきは話が通じなかったが、とりあえず情報を手に入れる必要がある。

ただ、それには言葉の壁にぶち当たることになりそうだ。

（さすがに人間相手にジャイヴトークの効果を期待しても、な…）

悪魔には人の言葉を喋れない者がいる。

ジャイヴトークという技術^{スキル}はそういった存在と意思疎通を図るためのものなのだが、

人間同士だと効果はないようだ。

先ほど青髪の少女と話したが、彼女の言葉は理解できなかったし、こちらの言葉も彼女に通じていなかったようだから。

ボディランゲージで会話などどれくらいぶりだろう。

全く厄介なことになった。

そんなコトを考えたつ、彼は人が来るのを待った。

s i d e o u t

s i d e タバサ

倒れた彼を医務室へ運んだ後、私はコルベール先生の話を聞いていた。

曰く、彼の力は強すぎるらしい。

治療に当たった水系統の先生の話では、別段悪い所は無かったそう

だ。
おそらく、ルーンを刻まれたショックで気を失っているだけで、数時間もしないうちに目覚めるだろうと。

「コントラクト・サーヴァントが成功した以上、ミス・タバサや他の者に危害を加えることは無いでしょうが…彼の魔力は強すぎます。できるだけ注意しなさい」

彼の言葉に頷き、私は医務室へと向かいながら考えていた。

あの使い魔が強いというなら、その右手に刻まれたルーンも頷ける。ただ、その左手にあるルーンは読めなかった。

ルーン文字とは明らかに違うし、ハルケギニアで使われている文字とも違っていたのだ。

左右両手にルーンが刻まれるという現象は聞いたこともないが、そんなことはどうでもいい。

（目を覚ましているだろうか、”イーヴァルディの勇者”様…）

珍しく沸き立っている気持ちを抑えつつ、彼女は足を早めた。

s i d e o u t

s i d e 人修羅

どのくらい時間が経っただろうか。
ようやく、部屋に人が入って来た。

「…君は、さっきの…」

先ほどキスされた青髪の少女である。

「…大丈夫？」

「…ああ問題ない…　って、言葉が通じる…？」

「契約したから」

…よく分からない。

分からないが、とりあえず契約とやらのおかげで言葉は通じるようになったらしい。

まあ、懸念が一つ消えてくれたのだから不満はない。

「…まあいい。俺の名はシン、間雑^{まなぎ}シンという。君の名は？」

「タバサ」

「いくつか聞きたいことがあるんだが、構わないかタバサ？」

（コクッ）

「ここはどこで、俺は何故ここにいるんだろうか」

「私が召喚した。ここはトリステイン魔法学院」

…随分と口数の少ない少女のようだが、害意は無さそうだし、質問には答えてくれるようだ。

しかし、トリステイン魔法学院…？聞いたことの無い名前だ。

ポルテクス界はほぼ全て回ったが、そのような名の場所は無かった。受胎前の世界でもそんな地名は聞いたことがない。

それに…召喚？俺がするならまだしも、俺が召喚された側か。
俺はこの少女とあの場で初めて会ったから、当然仲魔の契約など交わしていない。

悪魔召喚の儀式で呼ぶ方法もあるようだが、あの場に召喚の儀式を行った形跡は無かった。
まだ情報が足りないな。

「続けて質問するが…」

そこへ、また一人来訪者があつた。

「おや、目を覚ましましたか、ミスタ。私はここトリスティン魔法学院で教鞭を執っておりますコルベールと申します」

「初めまして、コルベールさん。俺はシンといいます…いきなりで申し訳ないが、いくつか聞きたいことが…」

口数の少ないタバサよりは、分かりやすく説明してもらえそうだ。
そんなことを考えつつ、コルベール相手に情報収集に禿んだ…もとい、励んだ。

…

…

…

「ふむ…にわかには信じられませんが…君はやはり別の世界から来たようだ」

「地名にしても、魔法が当然のように存在している点にしても、とてもじゃないが同じ世界とは思えませんからね…」

ざっと数十分ほど話しただろうか。

話せば話すほど疑問が増えていくが、とりあえず分かった事は…

ここが異世界であるらしく、ボルテクス界でも受胎前の地球でもないらしいこと。

ここハルケギニアでは魔法の存在は常識であり、貴族がそれを行わせること。

ここはトリステイン王国のトリステイン魔法学院という魔法使いの学校であること。

自分がタバサの使い魔として召喚されたこと。

帰る方法はない（別段帰りたくもないが）こと。

何だこのファンタジーは…。

本当にローブを着てマントをつけて杖を振っているこちらの人間に思わず苦笑してしまいそうになったが、まあ異世界というならこんなものなのだろう。

場所が違えば常識だって違うものだから。

（何とも面白い展開になったもんだな）

これからどんなことが待っているのか、興味をそそられずには居られない。

「…使い魔に、なってくれる？」

どこか祈るようなタバサの声。

もちろん、断るつもりは無い。また人に出会えたのだから。

「俺は…魔人シン…今後ともよろしく…」

s
i
d
e

o
u
t

第二話 契約（後書き）

人修羅の名は小説版から頂きました。

間雑の読みつてこれで合ってるのかな…もし違ってたらご指摘頂けると嬉しいです。

<追記>改行などを変更しました。少しは読みやすくなったでしょうか。

<追記その二>SaturnをSatanに修正。意味が全然違うことに今更気づきました。

第三話 独白

side シン

「なるほどな。感覚の共有、秘薬の材料の採取、主人の護衛か…」

「感覚の共有はできていない。秘薬も今は必要ない。護衛してくれればいい」

「わかった」

タバサから使い魔の役割や仕事について説明してもらっていたのだが…

とりあえず、戦うことが俺の本分になりそうだ。

ひたすら戦い続けてきた俺だから、今更誰かと戦うことを拒否したりはしない。

ただ、敵を倒すためではなく主を守るための戦いというのは初めてだった。

今までは仲魔に守られながら敵を殲滅してきたから。

「さて…学院の構造くらいは把握しておいた方がいいかな。

少し出てくるが、構わないか？」

(こくっ)

時刻は既に夕方。暗くなつては分かりづらくなるだろうし、今のうちに大まかなことは把握しておこうと思う。

「…壁や柱がえらく分厚く頑丈に作ってあるな。
貴族の子女を預かる学院だからか？」

むしろ砦か城と言われた方が納得できそうなくらいだな」

まずは外に出て、外壁に沿ってぐるりと回ってみる。

外壁も分厚く、所々に見張り用の望楼がある。

ただ、ほとんどが無人だったからあまり意味はなさそうだ。

門の側の守衛室には常時人が詰めているようだが、それだけである。

「…実際それで充分なのかもな」

まだ見習いとはいえ、この世界で絶対的な力を持っているメイジが
ン百人と集まっているのだ。

まあ好き好んでこんな場所を襲おうという者もいるまいが…警戒し
ておくに越した事はないか。

「あら、貴方…確かタバサの使い魔よね。もう具合はいいのかしら
？」

「ああ、もう大丈夫だが…君は？」

声をかけてきたのは燃えるような赤毛が印象的な少女だった。

抜群のプロポーションが大胆に開かれた胸元からチラチラと見え隠
れしている。

「私はタバサの親友。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・
アンハルツ・ツェルプストー」。

”微熱”のキュルケよ、よろしく」

「俺はシン。間雑シンだ。よろしく、キュルケ」

「ええ。…で、こんなところで何をしてるの？」

「ああ…ちよつとな…」

少しキュルケと話したが、タバサの親友とは思えないほど饒舌かつ快活な人物であった。

無口なタバサと活発なキュルケ、考えてみれば案外いいコンビなのかもしれない…。

「なるほど、学院の構造をね…もう充分見て回ったの？」

「ああ、いい加減暗くなってきたし切り上げてタバサの所へ戻ろうと思う」

「じゃあ私も行くわ」

キュルケと二人連れ立って女子寮へと入る。

夕食にはもう少し時間があるから、皆部屋の中にいるのだろうか。部屋同士を行き来して歓談している声が廊下に漏れている。

「そこが私の部屋よ」

キュルケが指差した隣のドアから、人が出てきた。黒髪の少年である。何だか少し落ち込んだ様子だ。

「あら、貴方って確かルイズの…」

「…え？…ああ、俺はルイズに召喚された平賀才人ですが…」

「…平賀…！？お前、まさか日本人か？」

「…え、そうだけど、何でそれを！？」

「やはり…」

「ちよつとちよつと、一体何の話よ？」

「すまん…後で説明するから、ちよつと彼と話をさせてくれ」

「むう…分かったわよ」

「で、サイト君と言ったな。君は…」

彼から色々話を聞いてみる。

が、訳の分からないことに、彼は東京住まいであつたのに受胎など知らないと言う。

受胎の予兆でもあつたヨヨギ公園での暴動事件も知らないというのだ。

単にニュースを見ていなかったという可能性もあるが、死者すら出たあの暴動はかなり大きく報道されていたから、まさか知らないということもあるまいが…。

細かい地名まである程度ちゃんと伝わった。

にも関わらず受胎に関わる件だけは全く通じなかった。

彼と自分は全くの同郷者という訳でもないのかもしれない。

よく分からないが、考えても分からない以上は考えるだけ無駄だということだろう。

（彼は俺の知る日本とは似て非なる場所から来たのだろうか…平行世界とか）

ただの人間に過ぎなかったはずの俺が東京受胎などという訳の分からん事件に巻き込まれた挙句、御伽噺の中にしか存在しないような人外共と殺しあつてきたのだ。

空想としか思えないことを、それを理由に否定することは俺にはもうできなかった。

あり得ないことなど何もない。全ては大なり小なり実在する可能性を孕んでいるのだ。

俺はボルテクス界でそれを嫌という程学んできたのだ。

「…シン？どうしたんだ？」

「何か顔色悪いわよ？大丈夫？」

キュルケとサイトが俺の顔を覗き込んでいる。

「あ、ああ…何でもない。ちょっと考え事をな。さて、俺はそろそろ行くよ」

とりあえず誤魔化しておいて、さっさと部屋へ戻るとする。

「分かった。またな、シン」

笑顔で手を振ってくれるサイト。強さも聡明さも感じないが、気のいい男のようだ。

俺が悪魔と化したこと、体の紋様については適当に誤魔化しておいたから、深くは追求されなかった。

多分、察して気を利かせてくれたのだろう。

正直に話すには彼のことをまだ何も知らないし、無駄に警戒される結果になってもつまらない。

などと考えているうちに、タバサの部屋まで来ていた。

「タバサ、俺だ。ただいま」

「おかえり」

「お邪魔するわよ」タバサ」

笑顔でタバサにじゃれつくキュルケ。

タバサも別段嫌がっている様子はない。

まあ話の邪魔をするのも悪いだろうと、部屋の隅に腰を下ろして目を閉じる。

色々あって少し疲れた。体ではなく精神的に。

(…明日は、何があるんだろうな…)

そう考えながら意識が闇に沈んでいく感覚に身を任せた。

side out

side タバサ

「さて…そろそろ行くのかしら。じゃ、またねタバサ!」

退室する親友を目線だけで送り出して、私はまた本に視線を落とす。ちらりと使い魔に目を向けると、部屋の隅に座って眠っているようだった。

…獣のような眠り方をしている。

体も頭も休まっているが、感覚だけは起きている。

何があってもすぐさま覚醒して行動に移れるような眠り方をしているのが分かる。

常在戦場の境地。口で言うのは容易いがここまで徹底して実行できる者は少ない。

北花壇騎士として薄汚い戦いを余儀なくされてきた自分でも、眠っている間は無防備になってしまう。

いつ襲撃があるか分からないときなどは、眠らずに警戒するしかないのだ。

（彼は一体どんな生活をしてきたのだろう…）

彼の強さにも興味がある。気まぐれにディテクトマジックをかけてみたのだが…

絶句した。

いや、元々口数が少ないから常時絶句しているようなものなのだが、そんな冗談を言っている場合ではない。

強すぎるのだ、彼の魔力が。

スクウェアメイズであっても比べ物にならない。

しかも、彼自身の魔力とは別に、巨大な魔力の塊をいくつも内包しているのが分かる。

「…ん…タバサ？どうした？」

ディテクトマジックで探査されていることにか、あるいは彼の魔力に驚いた自分の気配か。

どちらに気づいたにせよ、彼は目を覚ました。
やはり、彼は自分とは次元が違う。

「…シン、貴方は一体何者？ 貴方は強すぎる」

「…俺は、”元”人間だ…」

それから彼は、色々話してくれた。

「ジユタイ」とかいう世界を創り変えようとする企みに巻き込まれたこと。

友人も家族も失い、人から悪魔へと変えられたこと。

生き残った数少ない顔見知りも皆、あるいは力に、あるいは絶望に魅入られて心まで悪魔と化してしまったこと。

そして、たった”一人”で戦い抜いてきたこと。

…似ている、と、そう思った。

「この左手を見る… 契約で刻まれたルーンだが、何て書いてあるか分かるか？」

受胎前の世界で使われていた文字だ。『^{シャイタン}悪魔』、つまりアクマ。
人の心も記憶も随分と薄れてしまった。消えたわけではないけどな。

…俺は、人間であることを辞めさせられた人間。
人間にも悪魔にもなり切れない半端者、って訳さ」

自嘲するように笑いながら話す彼を見て、何故か胸が痛んだ。

「…貴方も、一人で戦っていたの」

「”も”、ということはやはり君もか、タバサ。

どこか俺と近しいものを感じていたが。事情を聞かせてくれるか？」

(こくっ)

彼になら全てを話してもいい、と思った。

人にも悪魔にもなり切れない彼。

シャルロットにもタバサにもなり切れない私。

そして、互いに一人で戦い抜いてきた二人。

この奇妙な共通が、共感へと変わったのだろうか。

それに彼は、震えていた。

忌まわしい過去をすら笑みを浮かべて独白しながら、彼の手が僅かに震えていることを知っていたのだ。

怖かったのだろう、自分を曝け出して拒絶されることが。

その気持ちは、良く分かる。

自分も、誰にも曝け出すことが出来なかったから。

それでも全てを明かしてくれた彼に、自分も応えなければと思ったのだ。

独白は、続く。

s i d e o u t

s i d e 人修羅

不意に、独白が止む。一通り話し終えたのだろうか。

…壮絶な過去だった。

父を殺され、母の心を壊され、何も分からないまま殺し合いの世界へ放り込まれる。

彼女が強いことは感じ取っていたが、それらは全て訓練ではなく実戦で磨かれたもの。

自分とも通じるような境遇だけに、それがどれほど辛いことか、苦しいことかは痛いほど理解できた。

しかも、それは今も続いているというのだ。

…力になりたい。

真摯に、そう思えた。

両親を奪われた恨みと、一方で愛する母を救いたいという心。

その二律背反から、感情を表に出さない彼女の奥底に残った「人らしい心」を感じ取らずにはいらなかったのだ。

人修羅などと呼ばれた俺だが、彼女に俺と同じ道を歩ませるわけにはいかない。

彼女は、人間。悪魔や修羅の道は似合わない。

「イーヴァルディの、勇者…」

不意に、彼女が口を開く。

「貴方の右手に刻まれたルーンは『イーヴァルディ』。悪のドラゴンを退治した勇者の名」

啞然として、直後に笑いそうになってしまった。

…俺にはどこまでも二律背反が付きまとうらしい。

「悪魔」と「勇者」。

その二つの刻印が、俺の中に同居している。

力のみに生きる修羅と、人々の希望の象徴たる勇者。

これが何を意味しているのか、俺にはよくわからない。

「お前はどこまでも半端な存在なのだ」と突きつけられた悪意か。

「悪魔の力を以って勇者の所業を為せ」という意思か。

「勇者の心を持つ悪魔として生きよ」という訓示か。

そのどれもであるのかも知れないし、そのどれもないのかも知れない。

ただ、おそらく俺は彼女にとっての希望たりうるのだろう、ということとは分かった。

「イーヴァルディの勇者」

そう口にした彼女の言葉には、万感の想いが込められていたからだ。

ならば、俺は生きよう。

敵にとっての「悪魔」として。彼女にとっての「勇者」として。

そう告げた俺に見せてくれた彼女の笑顔は、ハッとするほど美しいかった。

夜は、深々と更けてゆく

s
i
d
e

o
u
t

第三話 独白（後書き）

酷く厨二臭い人修羅になってしまいました。
でもまあ、こういう人修羅が一人くらい居てもいいでしょう（笑）

第四話 仲間（前書き）

最終話までのプロットは何とか立てました。
面白い話の筋を作るのがどうも苦手ですが、修正もしつつ何とか頑張っていきます。

第四話 仲間

窓から月明かりが差し込んでいる。
部屋の隅で座り込んで目を閉じている少年。
体に入った刺青のような模様が月光に照らされ、ぼんやりと光っているのが分かる。

s i d e 人修羅

不意に目を開けた俺は、ベッドで横になっている主へ目を向ける。
別段うなされるでもなく健康的な寝息を立てている少女に安心感を覚えた。

あれだけの過去を話してくれたのだ。

思い出すのも辛かったろうに、夢の中では辛さを忘れていられるのだろうか。

（そうでないよりはよほどいいな）

自分がボルテクス界へ入った直後は、気が狂いそうなほど毎晩うなされたものだ。

多分、この少女も最初はそうだったのだろう。
もしかしたら、今日は話すだけ話してむしろ楽になったのかもしれない。

さて、少し確かめたいことがある。
学院の外までこっそり足を伸ばすとするか。

…

……

………

軽く深呼吸して目を閉じ、獣のような気合と共に腕を振りぬく。

「ハッ！」

数条の光と共に現れたのは三体の異形。

シンが召喚された時と同様、バチバチと小さな音が二度三度響く。

「御主人様、如何なさいました？このような夜更けに。戦ではないようですが…」

「…お前を呼ぶと夜中とは思えなくなるな…。
あまり目立ちたくない、光を抑えてくれ」

「御意。ですが、私は太陽の象徴。限度はありますよ」

「分かってる、できるだけで構わない」

悪魔たちのリーダー格と思しき白い衣の女がシンと幾度か言葉を交わしている。

ハルケギニアではお目にかかれない白い上質な衣を纏い、黒く美しい髪をこれまたハルケギニアでは見ない形に結っている。

たおやかな雰囲気の中に芯の強さを感じる美女であるが、一番目立

つのは彼女が発する光だ。

簡単に言えば「後光」が差した状態。

彼女は「魔神アマテラス」。シンやサイトの故郷たる日本において、皇室の守護神とされている日本神道の主神である。あまてらすおおみかみ天照大神と言え
ば、日本人なら一度は耳にしたことがあるう。
たかまがはら

高天原で乱暴狼藉を働いた弟、すさのおのみこと須佐之男命の所業に怒って天岩屋戸
に籠ってしまつたために世界が暗くなつてしまつた、というエピソードは余りにも有名である。

ボルテクス界において太陽に相当するカグツチの揺らぎを利用した
イケニエ合体で彼女は生まれた。誕生は数年前、しかし「神代の時
代から今まで生きてきたという歴史」と共に誕生した、本物の「神」
である。

「…お前たちも俺の中から見ていたと思うが、俺は今あの青い髪の
少女、タバサを主とし、使い魔として仕えている」

「見てたけどよお…マスターを従える程の力があんのかい、あの餓
鬼に？とてもそうは見えねえけどなあ」

腑に落ちない表情で呟いたのは幻魔げんまクー・フリーン。

「クランの猛犬」という名を持つ、ケルト神話における半神半人の
英雄。

影の国の女王たる女神スカアハから武術の手ほどきを受け、魔槍ゲ
イ・ボルグの所有者となつたことでも有名な武人である。

白を基調として黒い筋状の模様が入った服を着て、額には小ぶりの
サークレットを鉢金のように身につけて兜代わりとしている。

肩に乗せるようにして担いでいる豪槍の刃が、月光を照り返して鈍
く光つた。

「お前たち悪魔は力に従う。俺たち人間は力にも従うが、心にも従

うんだよ」

「心ねえ…っかマスターも悪魔だろーがよ、フフッ」

「人の体は失くしても、人の心まで失くした覚えは無いさ…。
今後お前たちを召喚して彼女に同行させることもあるだろう。
その時は彼女に従い、守ってやって欲しい」

「…我等ガ主ハウヌー一人ダ」

男とも女ともつかぬ無機的な声で答えたのは、龍神セイリユウである。

蛇のように長い体軀は目が覚めるような青い鱗に覆われている。

四本の足を持ち、緑色の見事なたてがみ、刃物のように鋭く枝分かれた二本の角が特徴の「龍」そのもの。中国や日本で語られる伝承どおりの姿である。

伝説上では「四神」や「四聖獣」の一柱として数えられる。東西南

北それぞれを守る四柱の神の中で、東方の守護を司る龍神。

白虎、青龍、朱雀、玄武といえは聞き覚えはあるだろう。

「お二方とも、そう仰らずに…良いではありませんか、御主人様が主人と認めた方なのですから。」

それも御主人様の御意ですし、ね？」

「…承知」

「ハア、姐さんにや敵わねえな…しょうがねえ。」

ま、長い人生、ただの人間に力貸すことの一度や二度あってもイイか。

三度は多すぎだがなあ、クククッ」

「悪魔が人生語るところ見れるとはね…長生きはするもんだ、全く。
…ともあれ、ありがとな、お前ら。頼りにしてるぜ?」

他の仲魔を宥めて説得するアマテラス、愚痴や冗談を言いながら結局この状況を楽しんでいるクー・フリーン、寡黙ながら従ってくれるセイリユウ。

皆、共にボルテクス界を戦い抜いてきた戦友達である。

三人（人という単位が正しいかは分からないが）とも、ハルケギニアでは単独で一軍を殲滅できるほどの力を持っている。

それを全て従える人修羅の力は、当然彼らを上回る。

それがいかほどのものかは、推して知るべし、といったところか。

「…で、いい加減出てきたらどうよ?覗き見は趣味悪いぜえ?」

「…!?!?」

s i d e o u t

s i d e タバサ

ボタン、と静かに閉まるドアの音に、不意に意識を呼び戻された。

「…シン?」

軽く首を持ち上げて眼鏡をかけて部屋を見渡す。

月明かりに青白く照らされている室内に、使い魔の姿は無かった。壁にもたれて座るように眠っていたはずだが…。

耳を澄ますと、コツコツと部屋から遠ざかっていく微かな足音が聞こえた。

（こんな夜中に、どうしたの…？）

力になると言ってくれた私の勇者、イーヴァルディ。

こんな夜中に部屋を抜け出すということは、何か隠し事でもあるのだろうか。

「…」

悪いと思いつつ興味が抑えられなくなる。

これほど人に興味を抱いたのはいつ以来か、もう覚えていない。もしかしたら、初めてかもしれない。

経験が無いほど新鮮な感情に軽く戸惑いながらも、手早く着替えて杖を取り、使い魔の後を追った。

…

…

…

（どこへ行つたのだろう…）

彼が学院の敷地を出て、すぐ側の森へ入っていくのは見た。
こちらには気づいていない様子で、すたすたと無造作に足を進めていたのだが…

森に入ってから、見失ってしまった。

辺りを見回しながら、気配を探り進んでいく。

「…？」

微かに何かが弾けるような音がして、その後何かがキラリと光った。
光はすぐに収まったが、まだぼんやりと光っているのが見える。

「…シン…？」

気配を殺しながら、近寄った。

…

…

…

少し距離を取り、木陰に身を隠しながら耳を澄ます。
風のトライアングルであるタバサは、実戦経験も相まって耳はいいのだ。

そつと様子を伺うと、三体の異形が使い魔と話している。

白い服の光る女、槍を携えた男、角のある青い蛇。

女と男は一見人間に見えるが、普通人間は光らない。

女は浮いているが、杖を持っていないからレビティションを使っているわけでもないはずだ。

男は一見人間に見えるが、軽薄そうなその所作に隙らしい隙などなかった。

あの蛇も浮いているから幻獣かと思ったが、あんな幻獣は書物の中ですら見たことが無い。

（あれは一体…？）

何が何だかよく分からないが、風に乗って僅かに聞こえてくる話し声から、三体がシンを御主人様とかマスターとか呼んでいるのが聞き取れた。

剣呑な雰囲気は全く無く、むしろ友人同士が歓談しているような雰囲気ですらある。

多分、敵ではないのだろう。

…

「…で、いい加減出てきたらどうよ？覗き見は趣味悪いぜえ？」

「…ッ!？」

あっさり見つけた。

気配の消し方には多少自信があったし、気づかれていないと思っていたのだけど。

（…スッ）

仕方なく立ち上がり、使い魔へと歩み寄る。

「…タバサ…」

「…いつから気づいていたの？」

私に声をかけた男に問いかける。

「マスターに召喚された直後に気づいたさ、森ん中に人が潜んでるってな。」

コイツはべらばーに強いクセして気配探るのは下手クソだから気づかねえのも無理はねえ。

ま、それでもそんじょそこらの悪魔じゃ届かねえほど鋭いんだが…。

要するに今日の俺はビンビンだったってだけよ。

嬢ちゃんの気配の消し方は完璧だったさ、落ち込むこたあねえぜ？フフ…」

「…悪かったな、下手クソで…で、タバサ、何でここに…？」

軽口を叩いて笑いながら主人をこき下ろす男を軽く睨むように一瞥しながら、シンは私に問う。

「…貴方が部屋を出て行く気配がした。気になったからついてきた。ごめん」

「いや、いいさ。こっちこそ隠してて悪かった。近いうち紹介するつもりだったんだが…いい機会かな。」

こいつらが俺の”仲魔”、ボルテクス界と一緒に戦い抜いた戦友達さ」

「初めまして、タバサ様。私は魔神アマテラス^{わたくし}。御主人様と共に在るもの。」

貴方のことは御主人様の中から見ておりました。信頼に足るお方とお見受け致します。」

御主人様共々、宜しくお願い致しますね」

「俺あクー・フリーン。槍一本で時代を駆け抜ける生粋の伊達男よ！…なんつってな。」

マスターがアンタを主と呼ぶんなら、俺が嬢ちゃんを守ってやらあ。

ま、宜しく頼むぜえ？」

「…我が名ハセイリュウ」

口々に自己紹介するシンの仲間たち。

微笑みながら丁寧に挨拶するアマテラス。

冗談を挟んで何々と大笑するクー・フリーン。

寡黙で何を考えているかよく分からないセイリュウ。

三人（？）の性格が何となく掴めた。

「ハルケギニアでもボルテクス界と同じくこいつらを召喚できるか、試してなかったんでな…。」

とりあえず森に入って試してみたわけだ。他の人間に見られても面倒になりそうだったし。

ともあれ、これから何かあったらこいつらにも助けてもらうことになるだろう。

よろしくしてやってくれ、タバサ」

シンが自分を任せてもいいと思うほど信頼している仲間なら、何の

問題もない。

そう思えるくらい、私はこの使い魔を信じてるから。

彼らを仲間と呼べる日が、また彼らが私を仲間と呼んでくれる日が来るのは遠くない、そう思えた。

「…タバサ。よろしく」

s i d e o u t

第四話 仲間（後書き）

アマテラスはメガテン3では男性口調の悪魔として登場しますが、日本神話では女神とされていますので、そっちに沿った設定を採用しています。

クー・フリーンが中々いい味出して書いて楽しかった。

お気づきと思いますが、セイリユウにはシルフィードの代わりに足になってもらおうと企んでいます。

第五話 授業（前書き）

今回は平凡な日常の二コマですんで、いいサブタイが思い浮かびませんでした。

二字熟語好きなのですが、変に縛るんじゃないかな。

第五話 授業

side 人修羅

主人の後に続いて教室へと踏み入る。

雑談していた生徒達の視線が集まるのを感じた。

多分、見たこともない亜人ないし蛮族に対する好奇の視線。

あるいは、風のトライアングルという実力派メイジであるタバサがそんな亜人or蛮族を使い魔にしたことへの嘲笑の視線だろうか。

もちろん、そんなものを気にする俺やタバサではない。

二つ続いて空いている席を見つけてタバサが座る。

わざわざ奥へ座ったことを見ると、俺を横に座らせようというのか。

「俺はここに座ってもいいものなのか？メイジの席だろうに」

「構わない」

タバサがそういうならいいか。

深く気にしないことにして席につく。

教室の構造は高校のそれではなく、大学の講堂か何かのように見えた。

前方真ん中の教壇を中心に扇状に教室が広がっており、同心円状に中心へ向かう形で席が並んでいる。

後ろの席でもよく見えるよう、後ろへ行くほど席が高い。

俺は高校生だったから大学の講堂へ行ったことはないが、進路指導

のためなどで大学のパンフレットはいくつか読んでいた。

大学というのはこんな感じなのだろうか、と、もう経験する機会はないであろう大学生活をふと思い浮かべた。

「さあ皆さん、授業を始めますよ。静粛に」

中年女性の教師らしきメイジが入ってくる。

教壇に立った彼女は、教室をぐるりと見渡す。

「皆さん、春の使い魔召喚は無事に成功したようですね。

このシュヴルーズ、毎年生徒達の使い魔を見るのを楽しみにしているのですよ」

微笑みを浮かべながら語る彼女の言葉には、生徒に対する愛情や慈しみの感情が見て取れた。

貴族特有の選民思想や高すぎる誇りから来る嫌味さは感じられない。彼女自身にそういう性質が無いのか、あるいは教職員としての立場を弁えて人格者たろうと努めているのか。

いずれにせよ、良い教師ではあるのだろう。

「…おや、ミス・ヴァリエールにミス・タバサは随分と変わった使い魔を召喚したようですね」

彼女の言葉に答えるように、野次や嘲笑の声が生徒達から飛んだ。

…前言撤回、この教師はダメだな。

確かに、彼女の言葉それ自体は事実である。別段悪意も感じられない。

だが、その言葉は特定の生徒に対する侮蔑の切欠となりうる種類のものだ。

生徒達の規範となるべき教師が、率先して特定の生徒への侮蔑の先

駆けとなった。

意図したものでなくても、これはいけない。

見れば、野次を飛ばされたルイズが顔を真っ赤にして言い返している。

そのうちに、野次はタバサにまで及んだ。

「タバサ！お前もゼロのルイズと同じ平民を連れてきたのか！
みっともないなあ、トライアングルのくせに！」

タバサはこれを完全無視。まあ彼女らしい対応だが、主を馬鹿にされて黙っていられるほど俺は人間ができていないのだ。

何せ、悪魔だからな。

「浅いね、お前。公然とクラスメイトを馬鹿にするのか？底が知れるな」

「なっ…！平民の分際で！」

「貴族であることを盾に取るなら、人の上に立つ者として相應しい行いをすべきだろう。」

公然とクラスメイトを馬鹿にするのが貴族らしい行動だというなら何も言えないが」

「貴さ…（ギロツ） うっ！？」

一睨みして黙らせてやった。

ただし、視線に魔力は込めておいたけどな。

「クロスアイ」、敵を強制的に沈黙させる悪魔の一瞥である。

本来は敵の魔法を封じるためのものだから、今は弱めにかけておいた。

まあ授業が終わる頃には解けているだろう。

授業は黙って聞くものだ。不自由はあるまい。

「ミスタ・マリコルヌ、お友達の侮辱はいけませんよ。以後気を付けなさい。

では、授業を始めましょう。今日は土系統のおさらいと錬金の魔法の授業です…」

マリコルヌの異常にも気づかずにシュヴルーズは授業を進める。さっきの不用意な発言といい、案外抜けているのかもしれない。まあ根は善人なのだろうが…。

「…何をしたの？」

不意に、タバサが話しかけてくる。

さっきのクロスアイのことだろう。

あの僅かな魔力に気づくとは、さすがだ。

「何、ちょっと黙ってもらっただけだよ。あのままでは授業の妨げになるしな。

害は無いし放っておけば治る。心配は要らない」

「そう」

短く返事をして、彼女は手元の本に視線を落とした。

どう見ても授業を聞いているように見えないが、彼女のレベルであれば授業の内容などつまらないものなのだろう。

一方で、俺は中々興味深く授業を聞かせてもらった。

このハルケギニアの魔法をまだ良く知らないのだが、ここまで応用の利くものだとは思わなかったのだ。

建築、工業、農業にまで土系統の魔法は役に立つのだという。

ここまで生活に密着するなら、確かに魔法使いが優遇されるのも分かる。

一方で俺の魔法は基本的に戦闘にしか使わない。

そもそも威力がありすぎて他の用途には使いたくても使えないのだが。

例外があるとすれば回復系魔法くらいか。

ともあれ、これを機に俺の魔法の応用を考えてみるのも面白いかもしれない。

まずは威力と効果範囲を小規模に限定させる必要がある。

そのまま使えそうな回復系魔法も、純粋な人間相手に使ったことが無い。

近いうち効果を確かめておく必要があるかもしれない。

流石に害になることは無いだろうが、万が一だ。

助けようとしてディアをかけたら死んじやいました、なんて…。

冗談にしても笑えないし、ホントに起きたらなお笑えない。

(つんつん)

隣に座っているタバサに腕をつつかれて、俺は考え事を中断する。

「ん、どうした？」

「机の下に伏せた方がいい」

…授業中に一体何を、と思っただが…
周りを見ると、他の生徒達もほとんど同じように机の下に潜っている。

ルイズがシュヴルーズと共に教壇にいた。何か実技でもやろうというのか。

とりあえず真似しておいた方が良さそうだ。何が起きてもある程度対処する自信はあるから。

「わかった」

伏せた直後に『ドカァン！！！！』

…なんだあの爆発は。

机の下に潜って爆風を避けられたから良かったようなものの。

熱はマガタマ「シラヌイ」辺りの火炎無効で、爆風は「ヒフミ」辺りの衝撃無効で防げそうだが、両方同時に来るとどちらにせよダメージを受ける。

まあ、ダメージを受けても微々たるものだっただろう。

しかしあの爆発を至近距離で食らったら俺でもかなり痛そうだ。

正直防ぐ手段が見つからない。せいぜい防御力増強魔法ラクカジャで守りを固めておくくらいか。

もしかしたらあの爆発は万能属性かも知れない。

まあ、俺の主はタバサだ。

級友の魔法に口を出す必要もないだろう。

見れば主人はもう机の下から這い出して読書に戻っている。

マイペースというか何と云うか。

思わず吹き出しそうになった俺をちらりと見やって、軽く首を傾げてみせるタバサであった。

s
i
d
e

o
u
t

第五話 授業（後書き）

今回は人修羅目線のみです。

最初から最後までタバサと人修羅が一緒に行動してる場合は、クライマックスでもない限り人修羅目線のみ描くことになりそうです。

次回、「サイト君大活躍！ハシヨリしかないよ！の巻」です（大体合ってると思う）

第六話 決闘

side 人修羅

踏み込んだその先は、ただっ広い広間だった。
どデカイ長方形の長いテーブルと、その両脇に端から端まで並べられた椅子。
それが何セットか並んでいる。

「ここがアルヴィーズの食堂か…広いな」

「こっち」

タバサは俺を伴って左端のテーブルへと向かう。
適当に空席を見つけて椅子を引いてやった。

「ありがとう」

「気にするな。ここは貴族用の食堂だろう？俺はどこで食事すればいい？」

「ここ」

授業の時と同じく、横の席を示された。

タバサが言うならいいか。デジャヴを感じるがそう納得しておいて座る。

テーブルの上には、白く清潔なテーブルクロス。

そして、そのクロスが見えないほど大量に並べられた皿、皿、皿。朝っぱらからこの量か…明らかに多すぎるだろう。

大量に並べられた椅子と、もっと大量に並べられた料理の数々。

椅子が全て埋まると仮定しても、この大量の料理は半分以上が手付かずで余りそうな気がする。

貴族の食事とは皆こういうものなのだろうか。

スープ。ローストチキン。サラダ。何かの果実を使ったと思しきパイもある。

見たことのない料理も多い。

この体になってからは食事は必ずしも必要ではなかったが、食べば食っただけエネルギーの補給にはなる。

とはいえ、ボルテクス界では碌な食い物が無い。

倒した悪魔の肉を適当に炙って食ってみたこともあったが、正直不味かった。

そもそも食べそうにないものも多いのだ。

土偶にしか見えないアラハバキとか、見るからに毒っぽいプロブなど食いたくないだろう。

ウィルオウイスブやモウリヨウなんか、実体が無いようにしか見えない。

まあ殴れば当たるから実体はあるんだろうけど、やはり食い物としては見づらい。

鳥みたいなスパルナとか、馬肉 or 牛肉っぽいバイコーンとかは食ってみた気もしたが手はつけていない。

さすがに人にしか見えないモムノフやサルタヒコなんかは無理だ。

カニバリズムに浸る趣味は無い。

ちなみにピクシーやリリムみたいな人型女性悪魔は最初から除外している。

これを対象に食うとか言ったら違う意味になってしまう。

まあ余談が続いたが、話を戻して。

大抵は吸血や吸魔といったスキルでエネルギーを直接敵から取り込んで賄ったりしていた。

その方が手軽だし、何より純粋なエネルギーを取り込むのは快感でもあるのだ。

敵悪魔と交鈔する際、力を吸わせると要求されることがある。

痛い思いして吸わせてやっても、感想はかなり違う。

喉越し爽やかと言ってくれれば我慢した甲斐もあるが、しょっぱいとか不味いとか言われた日には一気にテンションが下がったものだ。ともあれ、やはり力を吸うのは悪魔にとっては食事と同じようなものらしく、味そのものを楽しむこともできるのだ。

ちなみに味の好みは同種の悪魔であっても個体差が激しい。この点は人間と同じだ。

味の評価は、不思議なことに全て「俺の力」を吸っているのに色んな評価をされる。

吸うたびに味が変わるのか、などとよく疑問に思ったものだ。

そんなわけで、数年ぶりに人間らしい食事ができるかとも思い、期待を持つシンであった。

…

……

……

旨い。

悪魔の体になって味覚まで変わってやしないか。

最初の一口を食べようとした直前にそう思ったのだが、そんなことは無かった。

スープの深いコク。涎が出そうなほどである。すばらしい。

ローストチキンのパリパリ感、鶏のサラリとした肉汁がたまらない。サラダのシャキシャキとした食感は久しく忘れていた感覚だ。

感涙である。

数年ぶりのまともな食事。

だが、その感動を差し引いても、この食事は本当に旨かった。コックが誰かは知らないが、さすがに貴族の食卓を預かるだけはあるって見事な腕だ。

コースの順番など知らないし、別に順番に出されるわけでもない。タバサも別に気にしていないようだ……しかしよく食う子だ。この細い体のどこにそんなに入るんだと突っ込みたくなるほど食っている。

「……？美味しい？」

ふと此方を見たタバサと目が合う。

微かに首をかしげる動作は、男ならぐつと来るに違いないだろう。本当に絵になる子だ。

「ああ、旨い。どれも絶品だな」

「そう…。食べる？」

差し出してきたサラダの小皿。見慣れぬ葉物野菜が混ざっている。

「このトゲトゲの野菜は見たことがないな。どれ…」

ぱくりと一口。ん、結構苦い。

が、悪魔の肉に比べたら充分美味の範疇だ。深い苦味がドレッシングとよく合っている。

「ちょっと苦いが、それがいい。」

ドレッシングとよく合っているな」

「同感。ハシバミ草は美味しい」

見れば、この皿に手をつけていない生徒が多い。

やはり常人にこれは苦味が強すぎるようだ。

だが、俺とタバサはその美味が理解できる。

ちよっといい気分。

「ハアイ、タバサ。相変わらずよく食べるわねえ。」

あら、シンも一緒ね。どう、ここの食事は？美味しいでしょ」

「やあキュルケ、おはよう。ああ、ここの飯は旨いな。このハシバミ草は初めて食べたが、お気に入りだ」

キュルケが歩み寄ってきた。もう食べ終わっているらしい。見れば、既に席を立っている生徒もちらほら出始めていた。

「あら…これ食べられるなんて凄いわね。タバサ以外は誰も手をつけようとしらないのに…。」

流石にタバサの使い魔だけあるってことかしら」

「美味しいのに。勿体無い」

空いていた俺の隣に座ったキュルケと、三人でしばし歓談。

…

…

…

「決闘だ！」

俺もタバサも食事を終えて、キュルケを交えて歓談していたのだが…
不意に、食堂に高らかに響いた宣言。
食事時の歓談には似つかわしくない単語である。

見れば、テーブルの向こう側に人だかりが出来ている。

その中心には怒りを抑えて無理に笑顔を作っている金髪の少年。何
だか頭が足りてなさそうだ。

その前で彼を睨みつけているのは…

「サイト君…何をしているんだ？まさか彼が決闘を…？」

「何かヤバそうな雰囲気ねえ…」

「騒々しい」

様子を見ているうちに、金髪の少年が食堂を後にする。周りの貴族の子弟に促されて、サイト君も出ていった。

「ねえ、何があつたの？」

キウルケが食堂を出て決闘を見に行こうとしていた男子生徒を捕まえて、事情を聞き出す。

「ギーシュのヤツ、モンモランシーと一年の女子と二股かけてたらしいんだ。」

けど平民のメイドのおかげでそれがバレちゃってギーシュに責められてな。

それをかばいに入つたルイズの使い魔と散々に揉めて、決闘騒ぎになつちやつたんだよ。

ヴェストリの広場でやるらしいぜ」

…

…

…

「ああまた入った…一方的だな…」

「仕方無いわよ、平民と貴族じゃ勝負にならないわ」

話を聞いた俺たちは決闘を見にヴェストリの広場まで来たのだが…その内容は酷いものだ。

強者による、一方的な蹂躪。

はつきりいつて決闘どころじゃない。

ルイズとか言ったか、サイト君の主のピンクブロンドの女の子が声を張り上げ、必死に止めようとしている。

実際それは正しい判断なのだろう。サイト君はもう血だるまにされていた。

「だが…サイト君の目はまだ死んでいない。

あれだけやられてもまだ食らいつくのか…」

散々殴られて体中痣だらけ。

左目が大きく腫れ上がっている。あれではもう左目は見えないだろう。

それでも、まだ開く右目で強烈に相手を睨みつけている。

「君はよくやったよ平民。だがこれ以上やると言うならもう手加減はしない。

まだやるというならその剣を取りたまえ」

金髪の少年が勝ち誇った顔をしながら、足元の土を錬金して一振りの剣を作り出す。

ふらふらになりながらも、サイト君はそれに手を伸ばした。

必死に止めようとするルイズだが、そこにサイト君の声がかぶる。

「下げたくない頭は、絶対に下げねえ！！」

…とうとう剣を抜いてしまった。

「不味いな。これ以上やるとサイト君が殺される。
あのフラフラの状態で今更剣一本持ったところで勝負が変わるわけがない…」

「同感」

「かといって決闘に割り込む真似もできないし…」

「ギリギリまで止めないが、流石に死なせたくは…ッ!？」

戦況が、一気に変わる。

何の変哲もない剣を手に、戦場を縦横無尽に走り回るサイト君。
どこにあれほどの力が残っていたんだ。
青銅の塊にしか見えないギーシュのゴーレムを、バターでも斬るかのように切り裂いている。

紫電一閃。

最後のゴーレムを斬り捨ててギーシュの首に剣を突きつけたサイト君。

ギーシュは困惑と恐怖で青ざめている。

「勝負は決まったようだな」

「ええ…まさかあの平民君が勝っちゃうとはね…」

「剣を持ったらいきなり豹変したな…」

あの速力は相当なものだった。あれを捉えきれる者はそうそう居ないだろうな」

などと話しつつ、サイト君に駆け寄った。

「サイト君、大丈夫か？」

「あ…シン…か…へへ…何とか勝ったけど、もうフラフラだよ…」

「サイト！大丈夫！？ちょっとときなさいよアンタ！」

ルイズが駆け寄ってきて、俺に怒鳴りつけてくる。

介抱しているのに何で怒鳴られなきゃなんのだ…。

とりあえず無視してサイト君の治療を始める。

とはいえ、俺の回復魔法が彼に効くか分からない。効きすぎて副作用が出ることも考えられる。

限界まで力を抑えて魔法を使おう。それでも充分なはずだ。

「…ディア…」

一瞬だけ、彼の体が淡い緑色の光に包まれた。

「あ、アレ…？痛みが引いてる…」

流れた血までは消えないから顔はまだ血まみれだが、傷それ自体は消えたらしい。

「応急処置はしておいたが、念のため治癒魔法の使える先生に診せたほうがいい。

…じゃあな、サイト君。よく頑張った。ゆっくり休んでいろ」

ルイズとサイト君にそう言い残して、俺は主の下へと戻る。

ルイズが何やら俺に驚愕の視線を向けているが、気にしないでおく。

「サイト君は大丈夫そうだ。これから治癒魔法の使える先生に診せにいくらしい」

「そう。良かった」

…

s i d e o u t

s i d e タバサ

あの平民の少年の豹変はただ事ではないが、考えても分からないのだから気にしない。

それ以上に気になるのは、シン。

何をしたかは分からないけど、あの平民の少年に近寄って何かをしたように見えた。

少年が僅かに光ったのを、私は見た。

何事もなかったかのようにシンはこちらへ戻ってきた。

けれど、あの少年はあれだけ殴られたのに自分の足で立ち、ルイズに引つ張られるように医務室へと歩いていった。
その動作に、ダメージは感じられない。

…シンが彼を治療したの…？

もしかしたら、母様も…。

s
i
d
e

o
u
t

第六話 決闘（後書き）

お待たせしました、第六話です。

今回はサイト君決闘編。

外部から見た流れですので、導入部やら決闘の細部やらは省いてます。

でも実は今回の隠しサブタイは「魔人の食事情」。

ぶっちゃけ戦闘描写よりも人修羅の食事情考える方が楽しかった（笑）

アバチュは確か敵を食って強くなってくゲームでしたっけね。俺はやってないんですが、何かそういうのっぽく見えました。

さて、今回は多分フーケ編へ突入。

お楽しみに。

P・S・俺が食べたい悪魔は…リリムかなあ（オイ

第七話 外出

side タバサ

ぺらり、ぺらりとページを繰る音だけが部屋に響く。

窓から差し込む爽やかな陽気が、ともすれば物静かで陰気になりかねない部屋を明るく照らしていた。

外の喧騒は、ここには届かない。

静寂に包まれた、けれど至福の一時。

「…っ…ふう」

ページを勝手に捲ってしまう悪戯好きなそよ風すらも、今は微笑ましく好ましく見える。

虚無の曜日は、好きなだけ本を読んでいられる私の大切な時間。

シンは今の外出している。

こんな陽気の日は外に出るのが好きなのだから。

彼なら何の心配もいらない。

不意に、静寂が破られる。

無粋なほど乱暴なノックによつて。

こんなことをするのは一人しかない。

「…サイレント」

杖を取り取り消音の魔法をかける。

再び取り戻した静寂に満足し、私はまた本へ目を落とした。

またしても不意に、肩を掴まれる。
視線を上げると、予想通り親友。

「……………」

何やら切羽詰った様子で口をパクパクさせている。

「…ふう…」

さすがに放っておくわけにもいかず、また杖を取ってサイレントを
解除する。

「タバサ！付き合って！トリスタニアへ行くわよ！」

…いきなり何を言い出すのだろう、この親友は。

私にとって今日がどれだけ大切か分かっているだろうに。

「…虚無の曜日」

簡潔と呼ぶのもおこがましい程短い返事を返して、私はまた本に目
を落とす…

が、その本まで取り上げられてしまった。

「……………」

感情のない目に「む……」という擬音を込めるつもりで親友を見つ
める。

「分かってるわよ、今日が貴方にとって大事な日だったのもね。
でもこっちも大変なのよ！ダーリンが出かけちゃったの！しかも

ゼロのルイズと二人でね！

これは放っておくわけにいかない、すぐ追わなくちゃいけないの！
だから付き合っ、タバサ！」

…だったら一人で行けばいい、と思うのだが…親友にそれを言うのも酷かもしれない。

少なくともそう思えるくらいには、私はこの親友が好きだったから。

(…こくっ)

頷いて身支度を整え、書置きをテーブルに置いて部屋を出る。

キュルケに付き合っ、トリスタニアへ行く　タバサ

side out

side 人修羅

寮を一步出ると、そこは美しい草原。

麗らかな陽気、そよ風に波打つ草の絨毯。

ボルテクス界では決して見られない光景だ。

肌を差す暴力的なカグツチの熱気とは全く違うその好ましい感覚に、俺はしばし身を委ねた。

適当な場所を見つけ、木の幹にもたれるようにして目を閉じる。

…人だった頃を思い出す感覚。

だが、陽気はともかく静かな草原に身を任す経験はあまり無い。

俺の出身は東京の新宿、都心も都心である。

草地の一つや二つ公園を探せば見つかるが、この時間にこんな静かな草原はそうそう無いのだ。

一しきり楽しんだところで、一端部屋に戻ろうか。

いい加減こっちの字も覚えないと何かと不自由だし、今日は休みらしいからタバサに頼んで教えてもらおうか…。

などと考えていたのだが、部屋はもぬけの殻だった。

「…タバサ…どこ行った？」

ふとテーブルを見ると、書置きらしき手紙。

一文しか書かれていないが、生憎と読めない。

さっそく不自由に当たってしまった。

とりあえず字の読める人を探そうか…。

…

…

…

「じゃあトリスタニアはあっちですね？どうもありがとう」

字の読めるメイドを捕まえて、手紙の内容とトリスタニアの位置を聞いた。

多分そう遠くへは行っていないのだろうが…さすがにこのナリで街道を走りたくはない。

人型であってもこの姿は蛮族か亜人にしか見えない、ということくらいは承知しているのだ。

「…仕方無い、空から行くか」

手近な林を見つけてセイリユウを召喚する。

「悪い、セイリユウ。ちょっと俺を乗せて飛んでくれ」

「…我ハ馬デハナイ…ガ…ヤムヲ得ヌ。乗レ」

地上から見てもさほど目立たないだけの高度を確保してから、トリスタニアへ向かう。

幸い視力はいいから、タバサはすぐに見つけられるだろう。などと考えているうちに見つかった。

本当にすぐだった。

とりあえずセイリユウは上空で待機させておいて、飛び降りる。

「タバサ！」

ズドンッ！という鈍く重い音を響かせて着地。ちよつとHPが減った気がするが、まあいいか。

「…シン…？何で貴方が落ちてくるのよ！？」

「…驚いた。どこから？」

目を丸くする二人（タバサは極僅かな変化しかなかったが）に事情を説明する。

「…へえ…あの空に浮かんでるちっちゃいの、貴方の使い魔なの？
使い魔を持つてる使い魔なんて初めて聞いたけど…ね、私たちも
それに乗せてくれない？」

「…乗りたい」

「二人を乗せたくらいでへばるほどやわな奴じゃないから構わない
が…馬はどうするんだ？」

『…あ』

見事に被った。流石に親友、息が合っている。

…

…

…

「すごい、そこらへんの風竜より速いんじゃない!？」

「…気持ちいい」

あの後、結局「この距離なら学院に戻って馬を返してから改めて飛んだ方が速い」という結論に至った。

セイリユウは實際馬の速度など問題にしないし、三人で乗ったところで何も乗っていないのと同じように飛ぶからだ。

ちなみに、俺とタバサ以外の人間が居るところで喋らないようにと命令はしてある。

文字通りはしゃいでいるキュルケと喜んでいるらしいタバサを微笑ましく見やった。

「コイツなら全力で飛べばトリスタニアまで二十分、ゆったり飛んでも三十分あれば着くかな」

「そうね、これだけ速いならゆっくり飛んでもらった方がこの子も楽だろうし」

(こくっ)

...

.....

.....

「じゃあ俺は向こうの林の中で待ってるから。気をつけて行けよ、二人とも」

「ごめんね、シン。流石にそのカツコで町には入れないからね...タバサ、ついでに彼の服も買ってきてましようよ」

(…こくっ)

「ハハ…悪いな。なるべく地味で動きやすいやつ頼むよ、タバサ。安物で充分だから」

「…分かった」

side out

side タバサ

「…いたわよ！ダーリンとルイズ発見！」

キュルケが随分と楽しそうに見える。

尾行がそんなに面白いのだろうか…正直ここは理解しかねる。

悪戯している子供と同じようなものだろうか。

何だか妙にしつくりくる予想に勝手に納得して、私は前方の二人を見つめる。

「…裏路地」

「あそこに入っていったわね…行くわよ」

杖の感触を確かめるようにぐつと握りこむと、キュルケに続いて裏路地へ。

トリスタニアはトリステインの首都といえども、治安は余り良くな

いのだ。

大通りでさえ当たり前のようにスリがいる。

通りを一本離れた裏路地は全てスラムとっていい。

食うに食えない貧民やごろつきがそこかしこにいる。

腕に覚えのある人間以外が入れば身ぐるみ剥がされ売られてしまう。

人身売買が平気でまかり通っている世だ。

女は体を売ること強要され、男はどこかの農地か鉱山あたりで過労死するまで重労働に従事させられるのがオチ。

もちろん私とキュルケならそんなことはない。

キュルケは杖を腰の後ろに差しているが、私の杖は大きいから常に手に持っている。

一目でメイジと分かる私たちに絡めるほど腕のいい人間は、そもそもごろつきなどしない。

「…あの店に入ってたわね…武器屋みたいね」

「行く？」

「いいえ、出てくるのを待ちましょう…あんまり気乗りしないけどね」

「…分かった」

気乗りしない、というキュルケの言葉はよく分かる。

何せ、大通り以上に臭くて汚いのだ。

流石に大通りは多少マシだが、裏路地ともなると平気でゴミや汚物が転がっている。

この世界には公衆衛生などという概念が存在しない。

貴族は王族と貴族のことしか考えないから、平民しかないこのよくな下町を清潔にするために金を使うなどという発想自体が無いの

だ。

もしサイトかシンが領地を持つ王族や貴族の使い魔として呼び出され、ハルケギニアの都市を見たら、きつと「街を清潔にした方がいい」と進言しただろう。

現代知識を持つ二人なら、公衆衛生が大きな利をもたらすことを知っている。

私はシンの生きていた世界の話聞いていたから、それが理解できる。

街を清潔にすれば、まず流行病が一気に減る。それによって人口の向上が望め、それが生産力に繋がる。

また、街を清潔にすることで治安だって向上するのだ。

一見関係ないように見えるが、それは素人考えである。

簡単な例を出そう。

ゴミ一つ無い清潔な場所と、ゴミ捨て場と勘違いしそうなほどゴミが散乱した場所。

ゴミをポイ捨てするとしたら、どちらの方がやりやすいだろうか。どちらの方が気が咎めないだろうか。

まともな倫理観を持った人間ならば、後者と答えるはずだ。

治安向上には警邏による監視と取り締まりも確かに大事だが、それと同じくらい「犯罪をしにくい街づくり」が大切になるのだ。

人は良くも悪くも周りの人間に左右されることが多い。

皆が犯罪をしている場所にいとそれが犯罪ではなく当然の行動に思えてくるが、逆もまた然りなのだ。

軽犯罪を徹底的に取り締まることで重犯罪の発生率まで抑えられるという手法（「割れ窓理論」とかいったか）をシンから聞いた時は、目から鱗が落ちる思いだった。

「あ、出てきた…行くわよタバサ！」

ルイズとサイトが店を出て大通りへ向かったのを確認してから、私たちも武器屋へ向かう。

二人が何を買っていったのかをキュルケが店主から聞き出す。

「ふーん…古いインテリジェンスソードをね…ねえ、店主サン、この店にそれ以上の剣はあるかしら？」

媚びるような色気ムンムンの口調と仕草で、キュルケが交渉を始めた。

狙いはゲルマニアのシュペー卿とやらが鍛えたという宝剣。

確かに立派ではあるが、正直実戦用とはとも思えない。

岩だって切り裂くと豪語する主人だが、まあ嘘だろう。

材質は確かに鋼だろうが、金のメッキや象嵌された宝石などは無駄なもの。

豪華な剣を持っていればそれだけで敵は自分を警戒する（財力や権力を手に入れるだけの実力の証明になる）し、そもそも宝石という異物が入り込んで十全の耐久性を発揮できるわけがないのだ。

あの装飾にはなんの戦術的優位性も無い。
タクティカル・アドバンテージ

…何だかバンダナを額に巻いた傭兵の姿が脳裏に浮かんだが、きつと気のせいだろう。

「…役立たずの剣」

呟いた言葉は親友にもキュルケにも聞こえていない。

まあいい、親友が何を買おうとそれを止める権利はないし、忠告はした。

勝手に納得して、本を取り出しページを繰る。

「…まいどお…（涙）」

「終わったわタバサ。さ、行きましょ」

泣きべそかいた店主と、満面の笑みを浮かべて宝剣を抱えるキュルケ。

色仕掛けに負けて散々値引きさせられたらしい。

その額が如何ほどか興味が無くもないが、店主の涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった酷い顔を見れば聞く気も失せるというもの。

「…ご愁傷様」

ちらりと店主を見やってそう呟くと、私は親友の後に続いて店を出た。

s i d e o u t

第七話 外出（後書き）

フーケ討伐戦前哨編、と言ったところでしょうか。

戦闘描写がまだほとんど無いのが気にかかりますが、どうせヘタクソだからまあいいか。

後半、戦闘描写がたくさん出てくる辺りへ差し掛かるのが怖いっす。

第八話 怪盜

side 人修羅

「いい、ルイズ？あのロープを魔法で切った方の勝ちよ！」

「上等よ！アンタには負けないんだから！！」

…なんでこんなことになったのか。

月の明かりにぼんやりと照らされた寮の庭。

挑発と敵意をぶつけ合う二人を見やり、俺は一人、溜息をついた。

事の発端は、あの後学院へ戻ってきてからのルイズとキュルケのやり取りである。

そもそもルイズとサイト君は、サイト君が持つ剣を買うためにトリスタニアへ来ていた。

キュルケとタバサがそれを尾行し、俺がその足を提供したわけだ。

二人は街ではルイズとサイト君に接触はせず、サイト君にプレゼントするための剣（と俺が頼んだ服）を購入して戻ってきた。

結果、残ったのはルイズが買った剣とキュルケが買った剣。

当然剣は二本も要らない。

日本の剣術には二刀流というものもある。

かの剣豪、宮本武蔵が開眼した二天一流と呼ばれる流派がそれに当たるが、あれは刀を二本使うのではない。

本来は刀と脇差の二刀なのだ。

脇差を正眼のように前へ、刀を上へ振り上げるような形で構える。間合いの短い脇差を前へ出して相手を誘き寄せ、上に構えた刀で切る、というのが基本の戦術らしい。

だが、刀とは本来見た目よりも重い。

日本刀の速さと鋭さは倭寇によって大陸へ知れ渡り猛威を振るつたとされているが、大陸の剣と日本の刀では構造が違う。

日本の刀は鋭く切り裂くことを、大陸の剣は重さと頑丈さに任せて叩き切るような使い方をする。

そして、ここハルケギニアの剣もやはり日本の刀より大陸の剣に近いのだ。

両手に一本ずつ持つには重過ぎる、というわけである。

さて、そうなると問題はサイト君がどちらの剣を使うのか、という点だ。

ルイズとキュルケは、先祖にまで遡ってすら喧嘩の種に事欠かない関係らしい。

当然二人とも自分の買ってきた剣を使わせようとする。

サイト君に対するアピールがライバルへの敵視に変わり、当事者を無視した口論に発展してしまった。

拳句の果てに、この状況。

縄で簀巻きにされたサイト君が、壁から吊るされている。

彼を吊るしたそのロープを的として魔法で勝負をつけようというわけだ。

「魔法勝負の的にサイト君を使う意味があるんだろうか……」

「言っても無駄」

「…確かにな。というか、下手に口を出してとばっちりを食うのが怖い。」

しかし、サイト君も災難だな…。

さすがに威力は抑えるだろうが、魔法が外れたらサイト君に当たるかも知れないし当たったら当たったでサイト君は簀巻きのまま地面へ落下。

どちらにしる危険すぎるぞ…」

「落ちたら私が助ける」

タバサならうまくやってくれるだろう。

彼女がやると言った以上、できないということはあるまい。

「さあ、貴方から先で良いわよルイズ。これで決まれば私の負けでいいわ」

「くっ…余裕ねツエルプストー。いいわよ、先手を私に譲ったことを後悔なさい！」

いくわよ、”ファイアー・ボール”！」

杖をロープへ向けて詠唱するルイズ。

しかし、呪文名の通り火の玉が飛び出したりはしなかった。

代わりに出たのは、轟音。

ちょうど授業で起こした爆発と同じようなものである。

手元で起こるか、離れた場所で起こるかの差はあったけれど。

「何かが飛んだようには見えなかった。いきなり爆発が起こるのか

…。

あれを使いこなしたらかなりの武器になるな。
しかし…外れか。あーあ、壁が酷く挟れてる…」

そのあまりの威力に思わず感心してしまう。

魔法学院なら建物に魔法によるプロテクトくらいはかけているだろうに、あの惨状である。

「ふふっ、やっぱり外したわねゼロのルイズ。私が手本を見せてあげるわ。」

「ファイアー・ボールはこうやるのよ！」ファイアー・ボール」！」

続いて呪文を唱えるキュルケ。

今度はちゃんと火の玉が飛び出した。

俺の使う魔法に当てはめるなら、おそらくアギ相当といったところ。中々密度の高い魔力が詰まっているのが分かるし、狙いも正確。いい攻撃だ。

サイト君の頭上に正確に飛来してロープを焼き切る火球。

「…」レビテーション」

すかさず杖を向け、落下したサイト君を支えるタバサ。

その素早く静かな詠唱だけでも彼女の實力が分かるというものだ。勝負は決まったな。さて、ロープを解いてやらないと。

「サイト君、お疲れさん。待ってる、今外してやるから…」

その時、俺は異常に気づいた。
月の明かりが翳ったのである。

サイト君の縄を解こうと月を背に屈んだのだが、不意に周辺の暗さが増す。

ちようど、太陽に雲がかかった時と同じように。

直後に感じた地響き。

何だろうと振り返った直後、俺は声を張り上げて駆け出していた。

「タバサ！後ろを見る！」

「っ…！？ゴーレム？」

「敵と見ていいんだな？攻撃を仕掛けるが」

「構わない。けど建物は壊さないで」

「分かってる。…ジャッ！」

身長30メートルはあろうかという土製の人型ゴーレム。

動きは鈍いが、耐久力もパワーもありそうだ。

こういう巨体は、足から崩すのがセオリ。

そう判断した俺は、ゴーレムの足を狙って右手を下から上へと振り上げた。

腕の振りだけで斬撃のような衝撃波を発生させて敵を抉り裂く技。

「アイアンクロウ」と、そう呼んでいる。

巨大なドラゴンの爪痕のように地面を抉り、その延長線上にあったゴーレムの足を切り崩す破壊の風。

だが、一撃でその足をへし折るまでには至らなかった。

「っ…成功してよね…」エア・ハンマー」！」

「爆発はしてるけどダメージは無さそうね…これはどうかしら？」
フレイム・ボール”！」

「…ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラス…”ジャベリン”」

アイアंक로우に続き、ルイズが爆発を、キュルケが火球を、タバサが氷の槍を解き放つ。

どれも当たってはいるものの、ゴーレムには大した被害は見られない。

見れば、俺のアイアंक로우で崩した足が修復されている。

「…再生能力があるのか…チマチマ削ってたんじゃキリがない…！」

件のゴーレムは緩慢な動きで学院の建物へと歩み寄っている。

俺たちの存在など無視するかのように。

一体何をするつもりだ？俺がそう思った所で、ゴーレムは拳を振り上げた。

狙いは、先ほどルイズが爆発で決った学院の壁。

腹の底に響く鈍い轟音の直後に降り注いできた瓦礫を避けつつ、壁を見上げる。

…黒い服を来た者が、ゴーレムの開けた壁へと入っていく。

「…学院への侵入が目的か…タバサ！あの穴へ入っていった者を追ってくれ！俺はこのゴーレムを何とかする！」

(こくっ)

頷いたタバサは、フライを唱えて舞い上がり、キュルケがそれに続く。

飛べないルイズは後ろで慌てているばかり。

助けにはなっていないが、期待はしていない。足手まといにならなければそれでいい。

「物理攻撃でダメなら魔法を食らえ…ハッ！」

振りぬいた腕から、膨大な魔力を発散する。

空気中の水蒸気が瞬時に氷結し小さな氷塊の群れを成す。

同時に生み出した風によって、氷塊は対象物へと冷気を撒き散らしながら飛ぶ。

簡単に言えば、フリザード吹雪である。

万物を瞬時に凍結させるこの魔法を、“絶対零度”と呼んでいる。俺の最も得意とする氷結魔法。

周辺の気温が一気に下がり、吐く息まで白くなる。

頃合を見計らって、俺は再度腕を下から上へと振りぬいた。

「ジャッ！」

破壊の風の再来。地面ごと抉り裂くアイアンクロウは、このゴールムには無力だった。

だが、先ほどとは状況が違う。

“絶対零度”によって“氷結”させた敵に、“アイアンクロウ”という“物理攻撃”を撃ち込む。

それが導く結果は、文字通りの粉碎である。

再生能力のある敵なら、再生できないよう一撃で倒せばいい。

それほど威力のある一撃を放てない状況なら、手持ちのカードの威

力を引き上げる下準備をすればいい。

敵の守りを崩しておくとか、敵の動きを止めて衝撃を受け流せないようにするとか、方法は色々ある。

「芯まで凍らせ、打ち砕く」

単純なだけに強力なこの戦法を、俺は好んで使っている。

無駄に破壊を撒き散らすような派手な攻撃が余り好きではないのだ。

ガラスを叩き割った時のように澄んだ、それでいて甲高い耳障りな音を残し、ゴーレムは文字通り粉々になった。

これが生物的な悪魔であつたら凍った血肉の真つ赤な粉雪が見られるのに、茶色ではどうも味気ないな。

残酷な、それでいて幻想的なその光景を思い浮かべながら、四散するゴーレムを見つめていた。

「な、何て威力なの…アンタ一体…？」

「一体って言われてもな。俺はタバサの使い魔のシン、それ以上でも以下でもない」

驚愕の視線を向けてくるルイズに当然過ぎる答えを返し、俺はタバサ達が飛び込んだ穴を見やる。

不意にそこから飛び出してくる黒い影。

「ん…？タバサ…いや敵か！」

黒いローブを来た人物は、そのまま文字通り「飛び去る」。

胸に何かを抱えているのがチラリと見えた。

生憎、空を飛ばれたら追う手段はセイリユウしかないが、あまり学院内で呼びたくはない。

一度乗せたキュルケにも口止めしてあるのだ。

しかし、アイツだけが出てくるということは…タバサは!?

「おいタバサ! キュルケ!! 無事か!？」

「…平気…取り逃がした」

「アタタ…全くやってくれるわねアイツ。かなり実戦慣れしてたわ」

呼びかけに応えて穴から顔を覗かせる二人を見やり、俺はほっと息をついた。

s i d e o u t

第八話 怪盗（後書き）

最近面白いクロス物のSSを見つけたんですが、それが実は盗作だったことが判明してちよつと凹んでる今日この頃。

焼き直しして最初からやり直してくれんなあ。読むのに。

第九話 思惑

side 人修羅

喧々譁々。この状況を表すには、この四字熟語が相応しいだろう。

昨晚に起こった襲撃事件であるが、あれは”土くれのフーケ”と呼ばれるメイジの盗賊の仕業であることが判明した。

根拠は簡単、現場に犯行声明が残されていたからである。

”破壊の杖と幻惑の羽、確かに拝領致しました 土くれのフーケ”
と。

昨晚あのゴーレムが空けた穴の奥には、宝物庫があったのだ。

そこに保管されていた宝二つが、今回盗まれた品。

フーケはどうやら貴族の持つマジックアイテムだけを狙う盗賊らしいから、この二つもマジックアイテムなのだろう。

俺はどんなものかは知らないが。

さて、あの事件の後。

あの時フーケを追って宝物庫へ突入したタバサとキュルケに大した怪我は無かった。

その後俺たちは教師を捕まえて事情を説明。

とりあえずその教師は学院長へ報告の後、現場の保存のために見張りに立つ。

俺たちは下がって休むよう言われ、中々寝付けないままに一夜を明かした。

そして朝一番に学院長室へ教師たち共々呼び出されて事情聴取を行

い、今に至る…というわけだ。

さて、件の「喧々諤々」についてだが…

要するにフーケの盗みを許してしまったこの失態の責任を誰が取るかという話である。

「昨日の当直はミス・シュヴルーズ、貴方であつたはずだ！盗まれたのは貴重な宝が二つ、どう責任を取るのです！」

責任追求を真つ先に行い、当直であつたシュヴルーズをここぞとばかりに責め立てているのは同じく教師の立場にあるギトー。

痩せぎすの体に血色の悪い顔で、不気味かつ神経質そうな雰囲気を漂わせている男である。

幾度かこの男の授業を聞いたが酷いものだった。

自分の系統である風の魔法こそ最強とのたまひ、その証明のために反論した生徒を吹き飛ばしてみせる。

どう考えても子供に物を教える態度ではなく、まず間違いなく教師失格な男である。

ギトーではなくバトーかゲドーとでも改名すべきだろう。

槍玉に挙げられたシュヴルーズは顔を蒼白にしておろおろするばかり。

正直見るに耐えないが、まあどうでもいいことだ。

「やめんか、ミスタ・ギトー。」

彼女の責任だと君は言うが、そもそもこの中にまともに当直をしたことのある者がどれほど居るといふのじゃ。

今回の件はわしも含めた教職員全員の責任じゃよ。

メイジの学校に侵入しようとする者などおるまいと油断した、わしら全員の責任じゃ」

学院長が何やら人格者めいたことを言っているが、その右手はしっかりとシュヴルーズの尻に伸びている。

「ありがとうございますオールド・オスマン！私のお尻でよかったらもういくらでも！！」

今にも泣き出さんばかりの面持ちでオスマンのセクハラを受け入れるシュヴルーズ。

まあセクハラを受け入れるのは本人の勝手だが、オスマンの言っていることは要は責任の所在を誤魔化す方便。

下の者が犯した失態を償うのが上に立つ者の責任である以上、今回の一件で腹を切るべきはオスマンなのだ。

サボった当直にも責任は当然あるが、当直がサボらないよう管理するのも学院長の義務。

さっきの一言から、皆が皆サボっていたことが明白である以上、オスマンが管理を怠っていたことも事実なのだ。

「今わしらがやるべきはフーケの討伐、そののみじゃ。この失態はなんとしても取り返さねばならぬ」

「そうですね！ではすぐに王室に討伐隊の要請を…」

「たわけっ！そんな事をしとる間にフーケに逃げられてしまっわい！わしらで討伐隊を編成してフーケを捕らえに行くんじゃ！」

王都へ連絡を入れようとするコルベールを叱り飛ばしたオスマンは、フーケの討伐を決定。

正直俺から見れば、失態の上塗りでしかない。

失態の責任を上知られる前に取り戻そうとor誤魔化そうとして

足掻く。

結果、すぐさま大々的に動くべきところ、初動が決定的に遅れて取り返しがつかなくなるということが良くあるのだ。

このままではオスマンは良くて学院長辞任、悪くすれば投獄 or 処刑も有り得る。

ここトリステイン魔法学院は国中の貴族の子女を預かる場所なのだ。今回は生徒達に被害は無かったが、そこに賊の侵入を許した以上、父兄である貴族達の怒りを買うのは必定。

しかも、ここにはキュルケのように他国から留学してきた者もいる。である以上、外交問題に発展することすらありうるのだ。

今の段階で王室や貴族達に事の子細が知れば、オスマンの首は確実に飛ぶ。

下手をすれば他の教職員に累が及ぶこともありうる。

それで済めばまだ軽い方か。

流石にこれが戦争に繋がるとは思わないが、外交問題に発展したとして、トリステイン側が相手国にどう対応するかによっては、戦争の火種になることは充分考えられる。

事は、皆が考えているほど浅いものではないのだ。オスマンもそれを理解しているはず。

フーケを捕らえた上で報告すれば何とか保身は図れるだろうと、オスマンはそう考えたわけだ。

「これよりフーケ討伐隊の編成を行う。我こそはと思わん者は杖を掲げよ！」

しかし、杖を挙げる者はいない。

「何じゃ、この腑抜け共め！フーケを捕らえて名を揚げようという者はおらんのか！」

己の保身に走ったオスマンに他人を腑抜け呼ばわりする資格はないと思うのだが、それはさておき。

ここで名乗りを上げれば、フーケ討伐の全責任を負うことになる。誰も名乗りを上げないのも当然と言えば当然だろう。

討伐に成功すれば良いようなものの、失敗すれば討伐隊参加者にまで責任が及ぶことも充分ありうるからだ。

少なくとも、オスマン一人の責任ではなくなる。

皆それを無意識のうちに感じたのか、オスマンの視線が向けられても俯くばかりであった。

しかし、そこに名乗り出る者が現れる。

「私が行きます」

「ミス・ヴァリエール！何を言うのです、生徒である貴方が行く必要などないですよ！私たち教師に任せておきなさい」

「誰も杖を掲げようとしなないじゃないですか。それとも貴方が行ってくれるのですか、ミス・シュヴルーズ？」

「い、いえ…それは…」

勇気ある態度と見えるかもしれない。しかし俺からすればそれは所詮蛮勇だ。

昨日のゴーレムは少々手強かった。その上ルイズはまともに戦えなかったのだ。

とてもではないが、やれるとは思えない。自殺行為だ。

そう止めようとしたのだが…

「ヴァリエールが行くなら私が行かない訳にはいかないわね」

キュルケまでが杖を上げる。

(スッ)

「タバサ、貴方まで…!？」

「心配」

「…ありがとう、タバサ」

なし崩しにタバサが、ついでに俺まで行くことになってしまった。
ま、仕方無い。

「貴方たち…分かっておるのですか、相手はあの土くれですぞ!？
危険すぎる!」

見るに見かねたコルベールも止めようとするのだが、オスマンがそれを許さない。

「まあまあミスタ・コルベール。見上げた度胸ではないかね。
それに、実力的にも彼らならば問題はあるまい？」

ミス・ツエルプストーは火のトライアングル。

ミス・ヴァリエールも努力家じゃし、その使い魔はグラモン家の三男坊と戦い、これを下すほどの剣の使い手。

ミス・タバサは風のトライアングルである上にシュヴァリエの称号すら持つておると聞く。その使い魔は昨晚、フーケのゴーレムを粉碎したというではないか。

この中に、彼女らを相手に勝てるだけの實力を持ったものがあるかの？」

その問いに答えるものはない。

答えれば、自分が討伐に行かねばならないから。

「オールド・オスマン！フーケの潜伏先が判明しました！」

「ミス・ロングビル！今までどこに！？」

「朝起きたらやけに騒がしいので事情を聞きまして、すぐにフーケの足取りを追いに調査に出ていたのです」

「さすがミス・ロングビルじゃの。で、フーケの居場所は？」

「はい、ここから馬で片道四時間ほどの場所にある森の中に小屋がありました、フーケはそこを拠点にしているものと思われます。近隣の農民から、黒いローブ姿の男が出入りしているとの目撃証言を得ました」

「黒いローブの男！？それです、フーケに間違いありません！！」

ロングビルの報告に反応するルイズ。

「決まりじゃの。」

ではミス・ヴァリエール、ミス・ツェルプストー、ミス・タバサの三名を以ってフーケ討伐隊とする。

第一目標は破壊の杖及び幻惑の羽の奪還、第二目標はフーケの身柄確保じゃ。

ただし、己が命を最優先とせよ。任務は果たしたが生きて戻れなんだ、などという結果は許さんからの。良いな？

ミス・ロングビルもフーケ討伐隊に参加し、案内役を務めるよう

に」

『杖にかけて!』

かくて、フーケ討伐隊が結成されたわけだが:

何だろう、この違和感は。

何かがズレている。歯車がどこか噛み合わない。何かを見落としている。

脳内に警報が鳴り響いているを感じる。

これまで戦ってきた経験からすると、この手の違和感を無視するのは危険。

この討伐行、何かあるな。まともに終わるとは思えない。

まだ具体的なことは見えてきていないが、俺は全力で警戒することを決めて、杖を掲げる主を見やるのだった。

s i d e o u t

第九話 思惑（後書き）

中々話を進められずにいます。

長すぎるかなあ。でも会話文ばかりで進めるのは嫌いなのですよ。

セリフ以外の表現があって初めて深みが生まれると思うので。

その分スピード感に乏しい作品になってしまうことが多々あるんですが、どうかお付き合いくださいませ。

第十話 希望

side 人修羅

ゴトゴトと音を立てて揺れる馬車。

窓から見える景色に、俺は思わず見とれていた。

針葉樹林の緑の山、青く抜けるような空、穢れを知らぬ白い雲が、見事なコントラストを演出している。

辛く厳しい冬を乗り越えてようやく訪れた春を言祝ぐような、生命力に満ち溢れた景色であった。

荒廃しきつたボルテクス界でも、コンクリートに覆われた東京でも、到底見られない光景。

これがピクニックか何かだったら最高なのに、と思わずにいられない。

「…どうしたの？」

隣に座るタバサが膝に乗せた本から目を上げて、俺に目を向け、小首を傾げる。

いつも思うが、本当に絵になる。

「いや、いい景色だと思ってな…。俺が前に居た場所では見られない光景なんだ」

「確かに、綺麗」

「ああ。ピクニックか何かだったら最高だなんて思ってたところさ」

軽くおどけて言ってみせる俺を見やるタバサの目に優しい光があったのは、多分俺の気のせいではないはずだ。

「暢気ね、これからフーケを討伐に行こうっていうのに」

「いいじゃない。どうせフーケと対峙すれば緊張せざるを得ないもの、今のうちに気を抜いておくのも悪くないわ」

軽く睨むように言うルイズに、それを宥めるキュルケ。それを聞いたサイト君は溜息をつく。

「はーっ、盗賊退治かぁ…気が滅入るなあ」

「フフッ、気持ちは分かるが、まあこれだけの面子が揃ったんだ、滅多なこと無いだろう。」

自分の役目をキツチリ果たす、それだけを考えるんだな」

「…それもそうだな。」

あのゴーレムを粉碎してみせたシンが居てくれるんだし、死ぬようなことも無いかな」

頼りにされるのは悪い気はしないが、頼りにされすぎるのも困る。とはいえそんなことを言っただけで彼を不安にさせる必要もないので、笑って頷いておいた。

「そういえばアンタ、昨日の夜に魔法使ってゴーレム倒してたわよね。」

アンタってメイジなの？杖らしいものは持ってないようだけど」

「いや、俺はメイジではないよ。魔法は使っただけ、メイジのように杖

は要らない。

まあ先住魔法みたいなものかな…精霊の力を借りるわけではないが…こんな風にな」

そう言つて、ブフを唱えて掌に小さな氷塊を作つて見せ、握りつぶすように消した。

「へえ…氷。昨日のゴーレムも凍らせて碎いてたみたいね。

” ウインディ・アイシクル ” みたいなものかしら…風と水系統の魔法を使つてこと？」

「いや、系統魔法みたいに複数の属性を重ねたりはせず…」

俺の魔法に興味を持ったようで、質問してくる二人。

タバサやサイト君も口は開かないが、興味深そうにしていた。むつつり黙っているよりはよほど有意義な時間だろう。

そんなことを考えつつ、俺は到着を待った。

…

…

…

「あそこです。あの小屋がフーケの拠点と思しき場所です」

ロングビルが指差したのは古く小さな山小屋である。

左右に広がる森を貫く細長い草地、その森に寄り添うようにその小

屋はぽつんと立っていた。

「さて、どうする？」

提示した質問にいくつか意見が重なり、サイト君が偵察役として小屋の様子を見に来ることになった。

中にフーケがいるかどうかの確認である。

他の者はここで小屋の周囲を見張りながら、サイト君の合図を待つ。

「サイト君、大丈夫だろうとは思うが、小屋周辺に罠などが無いか警戒を怠るな。いいね？」

「ああ、分かった。行ってくる」

俺の言葉に軽く頷き、剣の柄に手を置いて進むサイト君。

一端脇の森へ入り、木の幹を遮蔽物として利用しながら小屋へ近づいていく。

馬鹿正直に小屋へ直進するような真似はしなかったか。正解だ。

満足そうに頷いて、俺は小屋を眺めた。

サイト君はというと、小屋の側まで到達して、まずは小屋の周りをぐるりと回った。

周辺にフーケがいないか、見て回ったのだろう。

一回りして小屋の壁にそつと耳を当て、中に人の気配が無いかも探る。

何も聞こえなかったようで、手で丸を作って手招きしている。

「大丈夫そうね…行きましょう」

ルイズの言葉に頷き、俺たちは小屋へと近づいた。

「小屋の周りにも中にも人の気配は無いぜ」

サイト君の報告に頷き、ルイズたちは軽く言葉を交わして各担当を決めた。

「…じゃあ、ミス・ロングビルとキュルケは周辺を警戒しつつフリーケが居ないか探索。

私とサイトで小屋の外で見張り。タバサとシンが小屋の中を探る…ってことでいいわね？」

『了解』

声を揃えて了承した皆は、それぞれ持ち場に向かう。

「よし、俺が先に行く。何かあったらフォローしてくれ、タバサ」

「任せて」

頷きあうと、俺は小屋のドアに手をかける。

軽く開いた後、足を踏み込むことなく数瞬ほど様子を見た。

ドアを開いた直後、あるいは踏み込んだ直後が奇襲を受けやすいことを知っているからだ。

何が起きてもすぐ対応できるよう身構えながら、静かに足を踏み入れる。

それに続いてタバサも杖を構えながら入って来た。

「…フリーケはいないな。では破壊の杖と幻惑の羽の探索に移ろう」

(こくっ)

またも頷きあつて、思い思いに小屋の中を探っていく。
小屋の中は乱雑に工具やら木材やらが散乱している。
どれも古いが、人がいた痕跡は確かにあつた。

埃の積もり方が均一ではないのだ。
どころか、埃が払われたような痕も残っている。

「最近になつて使われた、そんな痕跡は確かにあるな…」

そう呟いた俺の声に、緊迫感漂うタバサの声が重なつた。

「シン、これ」

「見つけたか？ …これは！」

「知つてるの？」

俺は、そこで見たものをにわかには信じられなかつた。

片方は俺が人間であつた頃に存在した品、もう片方は俺が悪魔になつた後に使つていた品だつたからだ。

「ああ…これは…」

答えようとしたところに、ルイズの悲鳴が重なる。

『キヤアツ！…！…昨日のゴーレム！？』

「むっ？…タバサ、出るぞ！先に行け！」

「分かつた」

小屋の外へ駆け出るタバサに続いて、破壊の杖と幻惑の羽を持った俺も駆け出した。

直後、小屋がゴーレムに踏み潰された。すぐに出ておいて正解だったようだ。

「サイト君！これを！合図したら撃つてくれ！」

「こ、こいつは…！？これが破壊の杖なのかっ！？」

「話は後だ！タバサ、ルイズを連れて下がって！サイト君もそれ持つて少し離れてろ！」

俺が指示を出すことにルイズが不満を言いたげな目を向けてくるが、状況が状況である。

腕を掴んで引き摺っていくタバサと、近寄ってくるゴーレムの足音に反論を飲み込んだ。

それを見て軽く安心した俺は、改めてゴーレムに向き直った。

緩慢な動きで拳を足を繰り出してくるのを軽く避けつつ、俺はゴーレムの気を引くことに専念した。

状況は、余り良くない。

まずは味方と合流する必要があるのだ。

何故なら、ここでゴーレムが現れたということはそう遠くない位置にフーケがいるということの意味するからだ。

周りの探索に出たロングビルやキュルケがフーケと遭遇してしまうと、一対一で対峙するハメになる。

少し時間を稼げば、この異常事態を察してこちらへ合流してくれるはず。

ゴーレムの破壊はそれからでも遅くない。

今ゴーレムを壊してしまうと、フーケの手が空いて更なる行動を許すことにもなるのだ。

「何してるのよシン！早くそいつ倒してよ、昨日みたいに！！」

「今は時間を稼ぐ！まずはキュルケやミス・ロングビルと合流する必要がある！

タバサ、二人を探してきてくれ！ルイズ、サイト君、それまでは下手に動くな！！」

「分かった」

キュルケが向かったであろう森のほうへ駆けていくタバサ。それを横目に見やった俺は、サイト君に声をかける。

「サイト君！破壊の杖の使い方は分かるか？発射準備をしておいてくれ！」

「ああ、何でか知らないけど分かるぞ！任せろ！」

その返答に一安心して、俺は更にゴーレムの気を引くべく、軽く攻撃を仕掛ける。

効果がないことは分かっているが、俺を無視してルイズやサイト君のほうへ向かわれても困るのだ。

「シン！」

珍しく声を張り上げるタバサが、キュルケと二人で走ってきた。随分早かったが、多分異常を察したキュルケが此方へ向かっていたのだろう。

「キュルケが来たか！タバサ！ミス・ロングビルはいたか！？」

(フルフル)

「チッ…いい加減時間稼ぎも限界だな。そろそろ決めるぞ！サイト君、準備はいいな！」

「おう！」

サイト君が破壊の杖を構え、前方にいる俺を巻き込まずにゴーレムを狙える位置へ走り出る。
それに合わせて、俺は腕を振りぬいた。

「ハッ！！」

絶対零度。

昨夜は学院の敷地内だったから力を抑えておいたが、今度は全力である。

発動速度も冷気の濃さも規模も桁違いだ。
ビキビキバキバキと音を立てて、見る見るうちにゴーレムが凍り付いていく。

「…今だサイト君！撃て！！！」

「食らえっ！！！」

飛びのいた俺と入れ違いになるように、破壊の杖から一閃の煙が凄まじい速度でゴーレムへ向かう。

その正体を知っているのは俺とサイト君だけだろう。

「耳を塞げっ！！！」

後ろの三人はその声にすぐさま応じ、直後に爆音と爆風が俺たちを襲った。

後に残るは、バラバラになったゴーレム。
うまうまいったようだ。

「ふう……やったな！」

「凄いじゃないサイト！何で破壊の杖が使えたの！？」

「凄い威力」

「シンの氷の魔法も昨日とは比べ物にならなかったわねえ」

口々に喜ぶ4人だが、俺は言うほど樂觀していなかった。
そろそろ、フーケが現れるはず…。

「皆さん、遅れてすみません！ご無事ですか！？」

息を切らせて走ってくるロングビル。

まさか、こいつが。

そう思ったが、警戒心を隠して応じておく。

「大丈夫、ゴーレムは破壊しました。

肝心のフーケはまだ見つかっていませんが、そっちには居ません
でしたか？」

「ええ、見つかりませんでした。ゴーレムの音を聞いて慌てて戻って
きましたの」

それにしても随分と遅いご登場だと思ったが、そんなことはおくびにも出さない。

「へえ、それが破壊の杖と幻惑の羽ですか…ちょっと見せていただけませんか？」

…確定だな。

「サイト君、タバサ、渡すな!!」

「…チイツ!!」

俺の声に一気に形相を変えたロングビルが、破壊の杖と幻惑の羽を奪い取ってルイズを盾に取る。

「…チツ、間に合わなかったか。やっぱりアンタがフーケだったんだな、ロングビル」

事態の激変に、皆は驚きを隠せず対応できずにいた。

「…まさかバレてたとはね。いつ気づいたんだい？」

「学院長室でアンタが報告した時から違和感を感じてたよ。」

第一に黒いローブ姿っただけで男とは断定できないはずなのにアンタは男と報告した。

ストレートな嘘は裏返せば真実になるもんだ。

第二に、馬で四時間かかるここへ朝から調査に出たにしては、アンタの帰りが早すぎた。

時間的に無理がありすぎるな。

第三に、こんだけ派手にゴーレムが暴れているのにアンタが戻っ

てくるのは遅すぎた。

しかも戻った直後に財宝を手にとろうとする。ここで俺の疑いが確定した。

名を馳せた怪盗にしては、随分無理な行動を取ったもんだな、フーケ？」

「なるほどね…アンタみたいな餓鬼に見抜かれるなんてアタシもヤキが回ったかねえ。

しかし、こうなった以上アタシが有利さ」

「そうみたいだな。

大方、盗んだ方がいいがあとの二つの使い方が分からなかったんだろ？これで破壊の杖の使い方は分かったわけだ？もう一つ、幻惑の羽はどうすんだ？」

ニヤリと笑いながら言っているとフーケの目が一気に鋭くなる。

「アンタ…こいつの使い方を知ってるね？教えてくれないかい？」

チラリとタバサに目を向けると、こくんと頷く。教えろ、と言って
いるらしい。

「主人の了解も得たんだろ？さあ言いな！」

「いいとも。そいつは幻惑の羽ではなく、正しくは”セキレイの羽”というアイテムだ。

対象に羽を向け、相手が自分の虜になる様をイメージしながら念じれば効果が現れる」

「そうかい…ありがとよ。じゃあ早速試させてもらおうか！」

羽をキュルケに向けて念じるフーケ。

『私ハフーケ様ノ御意ノママニ』

開いた瞳孔で人形のような硬質的な声を発し、俺たちに杖を向けるキュルケ。

セキレイの羽は確実に効果が出るものではないが、どうやら外れ（当たり？）を引いたらしい。

「っ…！？よくも…！！」

親友の変わり果てた様に驚いたタバサは、フーケをにらみつけた。

「怖いねえ、そう睨まないでくれよ。心配ない、すぐに仲良く地獄に送ってやるさ」

そう言つて今度は破壊の杖を俺たちに向けるフーケ。
背後のタバサが身を強張らせるのが分かった。

「さあ、死になっ…！！」

サイト君がやったように引き金に指をかけて引くフーケ。
だが、何も起こらない。

「何でだ、何で魔法が出ないんだいっ…！？」

「残念だったな、あれは杖じゃない、本当の名前は”ロケットランチャー”。単発の武器さ」

サイト君の声に、フーケは動揺した。

「単発……？使い捨てってことかい！？

何てこった、せっかく盗んだのにもうゴミじゃないか！

……だったらもう一回あの羽を……って、どこ行っただっ、何で無いんだい！？」

「残念だったな、あれはマジックアイテムじゃない。セキレイの羽は消耗品、一度使えば消える」

「こつちもかクソツ！！

……ええい、覚えといでっ！キュルケツ、こいつらを殺しなっ！！」

『御意』

キュルケにそう命じて、フーケは恐怖に震えていたルイズを突き飛ばして背を向け、駆け出した。

こちらに杖を向けていたキュルケは、魔法の詠唱を開始する。

「チツ、タバサ！キュルケの相手を！俺はフーケを捕らえる！」

「……ッ！？分かった」

駆け出したフーケの後を追ひ、俺は全力で駆け出す。

数秒で目標距離まで近づいた俺は、フーケに向かって腕を振りぬく。

「ハッ！！」

腕から発散された魔力が糸のように縊りよ合わされ、フーケへと飛ん

で絡みつく。

外部から魔力による干渉で四肢の動きを完全に奪う魔法、”シバプ
ー”。

麻痺などとも違うこの状態を、俺は”バインド B I N D”状態と呼んでいる。
その一番の違いは、鈍くても動けるか否か。

”マヒ P A L Y Z E”状態であれば、非常に鈍いにしても動くことは可
能だし、当たりやしないが魔法も使える。

一方、B I N D状態は一切の行動が不能になる。マヒと違って自然
回復はするのだが。

「ぐっ…！？体が動かない…何だいこれはっ！？何をしたああっ！
…！」

棒立ちになつて喚くフーケを放置し、俺はUターンしてキュルケの
元へ向かう。

ポケットから紋章が刻まれた石のような結晶体”ディスプレイム”
を取り出して、キュルケへ投げつけた。

石は砕け、光が生まれる。

光は収束して、キュルケの体へと吸い込まれた。

「っ…あ…私、一体…？タバサ、何で私に杖向けてるの？」

「ッ…キュルケ…！」

元に戻ったキュルケに安心したのだろう。思わずキュルケに抱きつ
くタバサ。

多分、変わり果てた親友に、同じく変わり果ててしまった母を重ね
て見てしまったのだろう。

もっと早くに”ディスプレイム”を使ってやるべきだったかもしれ
ない。

「すまんタバサ。もつと早くあの石を使っておくべきだった…嫌なものを見せてしまったな」

「いい…その代わり、後であの石のことを教えて」

軽く首を振って許してくれるタバサ。

そのくらいならお安い御用だと笑いかけて、俺は皆に呼びかけた。

「さあ、フーケを連れて学院へ帰ろうか」

s i d e o u t

s i d e タバサ

帰り道。

往路と同じように窓から外を眺めるシンを、私は見ていた。

…シンなら、お母様を助ける手段があるのかも知れない。

サイトがギーシュと決闘した後、シンは魔法らしきものを使ってサイトの傷を治したように見えた。

今回、キュルケが幻惑の羽でフーケに操られてしまった時も、何かのアイテムらしき石を使ってそれを治した。

あの石は使ってしまったから消えてしまったようだけど、シンなら他にお母様を治す手段を持っているかも知れない。

心を壊され、人形に心奪われてしまったあのお母様を元に戻す。
私の悲願を叶えてくれるかも知れない。

（イーヴァルディの勇者：私だけの勇者：力を貸して）

帰ったら、シンに頼もう。

お母様を助けてと、頼もう。

彼なら、きっと応えてくれる。

私はそう信じている。

s i d e o u t

第十話 希望（後書き）

第十話、如何だったでしょうか。

セキレイの羽は只の消耗品、宝にするにはショボいアイテムですが、相手を魅了するという効果はタバサの母の状態にも通じるのでストリーに絡め易いのです。

幻惑の羽の正体、皆さん見抜けましたでしょうかw

では次回、楽しみに。

第十一話（第一部最終話）

『月の一夜に約束を』

Side 人修羅

居並ぶ教師陣の顔は、皆一様に明るいのだった。

「流石は我がトリステイン魔法学院の生徒だ！」

「教師として私たちも鼻が高いですよ！」

「貴方たちは我々の誇りです！」

口々に装飾過多な美辞麗句を並べ立てている。

正直、俺としては虫唾が走るのだ。

先入観の上に胡坐をかいた油断を突かれ。

保身を第一とした対応をし。

ツケを自ら払いにいく気概もなく。

あまつさえそれを守るべき生徒に押し付ける。

ツケを払えなければ生徒に責任を押し付ける気で居た上に。

払ったことが分かれればそれが自分の功績であるかの如く過剰に誇る。

人の醜さの一端が、ここには確かにあったのだ。

お前らが言っていていいセリフじゃないだろう、と俺などと思うのだが…

「…ま、黙つといてやるか…」

「…？」

「ああ、いや何でもなし。気にするな」

吐き捨てるような呟きが聞こえたのか、タバサが此方に目を向けてくる。

そんなタバサを見ると、嫌悪感も薄れてくるのだ。

この子が、また俺の友人たちが無事だった。

俺としてはそれで充分であり、第三者による賛辞など雑音に過ぎない。

この子達を見ていると、人間もまだ捨てたモンじゃないと思えてくるのだ。

「さて…ミス・ヴァリエール、ミス・ツエルプストー、ミス・タバサ。

本当に良くやってくれた。

お主ら三人には、王宮からシュヴァリエの称号が授与されることが検討されておる。

ミス・タバサは既にシュヴァリエ号を持っておるから、オンディーヌ水精靈勲章が授与されることとなるうがの」

「あの…サイトには、何も無いんですか？」

「（こくつ） 一番貢献したのは、シン」

ルイズがサイト君の、タバサが俺の功績をそれぞれ挙げてくれる。が、無情にもオールドオスマンは首を振った。

「二人は貴族ではないからの」

「タバサ、俺のことは気にするな。皆無事だった、それで充分だ。

大体、貴族号や勲章なんぞ貰っても俺では持て余すだけだから」

「そうそう、ルイズも俺のことは気にするなよ。」

「ところでオールドオスマン、褒美をくれとは言いませんが、一つだけ後で質問に答えて欲しいんですが……いいでしょうか？」

謝絶する俺とサイト君だったが……サイト君は何かオスマンに用事がある様子。

俺も少し気になるな。

「俺もサイト君と同じく聞きたいことがある。多分内容はサイト君と同じだろうが、同席させてもらっても構わないか？」

「いいじやろう、では二人は残りなさい。」

……さて、今日は佳き日じゃ。

フーケを無事に捕らえた日じゃが、お誂え向きというべきか、今夜はフリッグの舞踏会じゃからの。

三人とも、身支度をするがよかろう。今から急げば夜には間に合うじやろうからの」

「ああっ、忘れてた……早くしないと間に合わない……失礼しますっ！」

「私も急がないと！失礼します！」

オスマンの言葉に血相変えて部屋を飛び出すルイズにキュルケ。タバサはじつとこちらを見ている。

「タバサも先に戻っていてくれ。話が済んだら俺もすぐにいくから」

(コクッ)

頷くと、学院長に無言で一礼して彼女は部屋を出て行く。
さらに学院長はその場に居合わせる教職員達にも退室を促し、部屋には俺たち三人だけとなった。

「さて…これでようやく話ができるの。」

サイト君、シン君、どんな質問じゃな？」

「あの破壊の杖に關してです。アレは俺やシンが元々居た世界にあった武器です。」

一体どこで手に入れたんです？」

「幻惑の羽も同じくだ。アレは俺が元いた世界…といってもサイト君の居た所とはまた別だが…にあった品。同じものを今俺も一つ持っているが、これを一体どこで？」

話を聞いたオールドオスマンは目を剥いた。
そして、昔を思い出すように遠い目をして、語り始める。

…

…

…

「…遭遇した二頭のワイバーンのうち一頭を破壊の杖で、もう一頭を幻惑の羽で無力化した者がいたと…」

「そいつはもう死んでいる上にどこから来たかも分からないとなる

と、帰る手がかりにはなりそうもないな。…気を落とすな、サイト君」

「ああ…チツ、せっかく帰る手がかりを見つけたと思ったのに…！」

「すまんのう、あまり役に立てんで。時に、良い機会じゃ。二人のことも教えてもらえんかの？」

申し訳無さそうな顔をしたオスマンは、ついで好奇心を湛えた目を向けてくる。

多分、サイト君の剣の腕や俺の力に関してなのだろう…。

…

…

…

「…俺が伝説の使い魔ねえ…正直実感沸かないよ」

「ハハッ、だろうなあ。しかし、そうすると君がギーシュに勝った時のあの動きには説明がつく」

学院長室を辞した俺たちは、二人連れ立って女子寮へ向かっていた。さっきの話が、やはり話題となる。

後で思えば、秘密の話をごんな風に話すのは無用心極まりないのだが…

そんな警戒心も忘れるくらい、驚いていたのだろうか。

「…そうなんだよなあ…しかし、シンのことも驚いた。まさか悪魔にされた人間なんて…」

「心は一応人間だ、気にするな。ああ、言っまでもないが、他言はしてくれるなよ？」

俺も君の事は誰にも言わないから」

秘密の共有。

戦いに生きていた頃の俺には考えられないほどの甘い行動。
なのに、何故だろう。

これほど胸が温かいのは。
心許せる友が居ることを喜ぶ気持ちを、俺は久しぶりに味わっていた。

s i d e o u t

s i d e タバサ

二人で会場へと向かう道。

舞踏会になど興味は無かったのだが、何故か今年は参加しようと思えた。

着る事などあるまいとクローゼットの奥に仕舞い込んでいた黒いドレスを身にまとい。

大急ぎで調達した男性用の正装をシンに着させ。

私たちは連れ立って会場へと向かっている。

言葉は、無い。

何だろう、この気持ちは。

何故私はこうも自分のことを気にしているのだろう。

ドレスは似合っているか。

凹凸の乏しい子供のようなこの体を嫌ったことはないけれど、今は少し恨めしい。

つらつらと考え事をしてふと目を前へ向けると、見えるのは使い魔の背中。

シンの背中はこんなに広かっただろうか。

シンの背中はこのように頼もしかっただろうか。

私は少し足を早め、シンの隣に歩み出る。

会場のドアを前にして。

私の心は、確かに躍っていた。

s i d e o u t

s i d e 人修羅

二人で会場へと向かう道。

舞踏会になど出たことはなかった。

普段は居心地が悪そうで出たいなどと思わないはずだが、何故か出

てみてもいいと思った。

タバサに渡された正装を手間取りながら身につけて。
俺たちは会場へと向かっている。

言葉は、無い。

何だろうこの気持ちは。

何故俺はこうもタバサのことを気にしているのだろう。

ドレスを身につけた、俺の御主人様。

黒いドレスによって強調された白い肌は眩しく、恥らうように頬を
赤らめた彼女は本当に可愛く。

俺は顔が赤くなるのを感じ、彼女の姿を見られなかった。

タバサはこんなに綺麗だっただろうか。

タバサはこんなに可愛かっただろうか。

後ろからついて来る足音が少し早まり、タバサが俺の横へ歩み出て
くる。

会場の扉を前にして。

俺は高鳴る心を抑えながら、不器用に左腕を差し出した。

s i d e o u t

s i d e タバサ

シンが私に腕を差し出してくる。

不器用な、それでいて優しいエスコート。

恥ずかしさを抑えながら、私はそつとその腕を取った。
歩幅を合わせてゆつくりと会場へ踏み込んでいく。

彼がこちらを見ようとしなのが少しだけ不安だった。

けれど、彼が私を気遣ってくれているのは確かに感じる。

不器用に歩幅を合わせたり。

不器用に肘の高さを合わせたり。

決して巧くはない、しかし優しいその所作は、たしかにこう言ってくれている。

（歩きづらくないか、タバサ？腕は疲れていないか、タバサ？）

大丈夫、と応えるように、私はシンの腕を少し強く抱え込む。

普段は邪魔にしか思えない明るい照明が、今日はとても嬉しく感じた。

s i d e o u t

s i d e 人修羅

不慣れで下手と分かっているが、それでもタバサをエスコートし、俺たちは会場へ入る。

余りに綺麗なタバサを直視できないままに、俺は足を進めた。

声をかけてくる友人たちはみな一様に笑顔であり、リラックスした様子だ。

それに解されるように、俺の硬さもすこしは取れたようだった。

「旨いか、タバサ？」

（こくっ）

「そうか」

料理に手をつける。

何と言っていいかも分からないまま、普段の食事時と同じような言葉をかける。

未だに、タバサを直視できない。

舞踏会は、気づけば大詰め。

そろそろ舞踏曲の演奏も終わる。

俺は少し、後悔していた。

こんなに綺麗なタバサを相手にダンスの一つも踊れない。
結局こんなに綺麗なタバサを、俺はろくに見てもいない。
大して話もできなかった。

そんな俺に、声がかかる。聞きなれた、しかし俺が誰より好きな声で。

「…踊って、くれる？」

その時俺は初めて彼女を真正面から見る事ができた。
そして、なけなしの勇気を振り絞って、こう答えたんだ。

「喜んで」

s i d e o u t

s i d e タバサ

不器用に私の腰に回された手。
不器用で不慣れなステップ。

けれどその全てに、私は喜びを感じていた。

言葉は、無い。

けれど彼と見つめあうその視線だけで、全てが通じ合う気がした。

人並みの幸せなどとうに奪い去られていたけれど。

私にも、勝ち取れた。

大切な人とダンスを踊る。そんなささやかな、けれど大切な幸せ。
私は今たしかに、それを噛み締めている。

今だけは、全てを忘れていたい。

(私の勇者…イーヴァルディ…)

始祖ブリミルよ。

この世に生まれて初めて願います。

どうかこの幸福を、一秒でも長く

side out

不器用な、しかし幸せに溢れたダンスを終えて。
酌み交わしたアルコールを覚まそうと、主人と使い魔は屋上から夜
風に当たって月を見る。

「終わってしまうと、寂しいもんだ」

「…そう、でも楽しかった」

「ああ、俺もだ…」

「…私のドレス、似合っている？」

「…ああ、とつてもよく似合っている…あまりに綺麗すぎて、直視
できなかったくらい」

「…ありがとう」

しずかに、しかし万感の想いを込めて交わす言葉に、嘘偽りは何一
つ無い。

少女の瞳は潤み、そして頬は赤らんでいる。

少年は、吸い込まれるように顔を寄せて…

月は今、重なった。

…

…

…

「ねえ、シン…」

「うん？」

「私のお母様のこと、覚えてる？」

「ああ、前に聞いたな、覚えているよ」

「お母様のこと…助けてくれる？シンなら、できるかもしれない」

優しく、それでいて力強い抱擁の中で、少女は少年に懇願する。
祈るように、願うように。

『ああ、任せておけ』

答える少年の目には確かな意志と決意の光が。

聞いた少女の瞳には確かな喜びと感謝の光が。

少し火照った二人の頬。

夜風は、優しく撫でるように

第十一話（第一部最終話）

『月の一夜に約束を』（後書き）

舞踏会のシーンはちよつとした挑戦でした。

普段の理屈っぽさや状況描写をなくし、心理描写を可能な限り盛り込んで印象的に仕上げようと頑張ってみました。

私が描くタバサで萌え死んでくれる人がいれば本望です。ちなみに私も書いてて萌え死にました。

最後はあえてどちらの視点とも明示せず。

第三者視点のように見えて、実は二人で共有してる視点……って風にしたり。

そして、今日が二人の本当のファーストキス。情動的にね。

ちなみに俺の嫁を非処女にはしてませんよ（ぶち壊し）

縁が無いからこそこういう恋が描けるのかなぁなんてボーンッと思いつつ後書き書いてます。

以上を以って、第一部終了とさせて頂きます。
もちろんまだまだ続きます。また次回。

第十二話(第二部 Prologue) 陰謀(前書き)

第一部が終了し、10万PV&ユニークアクセス1万を達成。
感謝、感謝でございます。ありがとうございます！

第十二話（第二部 Prologue） 陰謀

とある国の王宮。

白を基調とした内装で統一された玉座の間。

入り口と玉座を結ぶ直線を中心に左右対称に設計されたその間は、清潔感にも溢れた明るい雰囲気でありながら、奇妙なほどに冷たく無機的でもあった。

一段も二段も高くなった床に据えつけられた玉座。

それは本来、座るものではなく背負うもの。

血の海に浮かび、血によって購われるそれは、しかし汚れの一つすら見当たらない。

少なくとも表面的には、だ。

しかして、そこに身を置く彼がそれを理解しているかどうかは定かではない。

side ???

この主に召喚されて暫くが経った。

最初に来た時は随分と面食らったものである。

時代遅れな”神授王権”^{システム}によって統治される国。

それは聞いたこともない開闢伝説に端を発するものであった。

始祖ブリミルから生まれし四王家。

まさか私とその四王家の一つを束ねる王の使い魔にされるとは。使役する側には立っても、使役される側に立ったことはない。

とはいえ、伝も常識も欠けた私がこの世界で生きるには、庇護を受ける以外に道は無かったのだ。

幸いにも主を名乗る男は王。

快樂主義を絵に描いたようなその振る舞いは到底王たる資格が無いようにも見えるが、その実、一種のマキャヴェリズムを体現する統治を行っている。

清には乏しく濁に塗れた王。

しかしそれを否定する気も無い。

私がここですべきこと。

それは、まだ分からない。

それを見極めるべく、今しばらくはこの男に従おう。

「何を考えている？ミューズ」

「…その呼び方をどうすれば止めさせられるかを考えていたのだ、ジョゼフ」

「ククツ、気に入らぬか？」

「私はギリシャ神話に語られる詩や音楽の女神とは違う。

そのようなものに興味を持たぬ私にその名が相応しいとは思えん」

Muse。ギリシャ神話における知的活動を司る女神たちの総称。

後に詩歌を司る女神として信仰された存在である。

当然、ハルケギニアにそんなものは無いが。

「ギリシャ神話…聞いたことの無い言葉だな。お前の居た世界の伝承か。

いずれ機会があれば聞かせて貰うでしょう」

異世界から来たと言う私に酷く興味を持っているらしいこの男。
”無能王” ジョゼフ。ハルケギニアの大国を統べる王。

始祖の血を引くこの男が無能と称される所以が、魔法を使えぬことにある。

しかし、それは二つの意味で間違っている。

第一に、王に必要な資質は魔法ではなく政治能力及び対外折衝力、そして国を統べる統率力である。

第二に、この王は魔法を使える。ただし、ハルケギニアにおいて酷く異質な形においてであるが。

それでも無能の名に甘んじるこの男を、私はどうも理解しかねていた。

何を望んでいるのか、何がしたいのか。

それが未だに分からぬのだ。

「それはそれとしてな、ミューズ。

お前にはしばらくアルビオンへ向かってもらっ

「アルビオン……確か空に浮いているとかいう巫山戯た島国だったな。そこへ出向けというのか。何のためにだ？」

「レコン・キスタという組織が、今アルビオンで暗躍している。

聖地奪回及び貴族による共和制を旗印に掲げた宮廷革命運動を推進する組織だ。

遠からずアルビオン王家に反旗を翻す。内乱状態になるだろう」

レコン・キスタ（言葉の意味からすればレ・コンキスタと切るのが正しいが）。

地球においてもその名は存在する。

8世紀にイスラム教徒によって征服されたイベリア半島を奪回すべ

くキリスト教徒が起こした運動。

「奪回」という点で奇妙に共通したこの名に、思わず内心で苦笑してしまう。

だが、そんなことはおくびにも出さない。

「破壊工作でもしてこいと？あるいは潜りこんで内偵か？」

「まさか。手伝って来いと言うのだ」

「…理解できんな。お前は始祖の血を引く王であろう。」

であればアルビオン王家はお前の親戚に当たるはず。むしろ王家側を助けるのが筋ではないのか」

「王家もレコン・キスタもどうでも良い。せいぜい楽しませて欲しいと思うだけだ。

面白いではないか？理想を掲げる両者が名誉と誇りと悲願の名の下に殺しあう喜劇。

それを踏みにじるのはどれほど痛快であろうなあ？クククッ…」

…やはり、この男は壊れている。

だが、私に言えたセリフでもあるまい。

「…いいだろう。」

アルビオン王家もレコン・キスタも、お前の掌の上でせいぜい躍らせてやるうではないか」

今は、この男に従っておく。

それにガリアだけではなくアルビオンを見ておくのも悪くはない。

この世界が本当にこのままで良いのか、この世界が破滅へ向かっていないか。

…場合によっては、ハルケギニアの胎動を見ることになるう。

ガリアの、受胎。

この男にはまだ話していないその陰謀は、もしかしたら彼の眼鏡にかなうかもしれない。

創世など趣味ではないだろうが、面白ければ何でもいいという男だ。いずれ、話してみるか。

ただし逆らうならばすぐにでも殺せるよう準備を整えた上で、だ。

世は押しなべて陰謀が渦巻く地獄。

ミヨズニトニルンたることを強制された男、氷川。

その目には、ただ冷たい光だけがあった。

s i d e o u t

第十二話（第二部 Prologue） 陰謀（後書き）

ジョゼフ及びミヨズニルン登場。

今回は第二部プロローグなので少々短めです。

さて、ミヨズニトニルンに氷川を置いてみました。

ガイア教幹部にして宗教学や史学に精通する彼を表現すべく、今回は Wikipedia や広辞苑に少々活躍してもらいました。それにしても薄い気がしますけど。

さて、今後彼らがどうなるのか。

いよいよアルビオン編へと突入します。

では、また次回。

第十三話 行幸

side 人修羅

「四大系統にはそれぞれ違った特色があるわけだが…」

欠伸をかみ殺しながらつまらない授業を聞く。

いや、これを授業と称するのは授業という言葉に対する冒涇ではないかと思う。

何故なら…

「ミス・ツエルプストー。最強の系統は何だと思うかね？」

「もちろん火ですわ。全てを破壊し、焼き尽くす火の系統こそ戦闘における最強だと思いますわね」

ギトーの脂ぎったような視線と口調（別にギトギトなどと寒いギャグを言うつもりはない）。

さらに受け流して持論を展開してみせるキュルケ。

血色の悪い顔で上目遣いにニヤリと笑みを浮かべつつ見ていたギトーの唇がめくれ上がった。

「違うな。最強の系統は風だ。風は全てを吹き飛ばす。火すらもな」

これが、授業ではないという所以。

授業や講義などではなく、単なる自系統の自慢に過ぎないのだ。

もちろん他の教師にも自分の系統に対する臍原は多少なり見受けられるのだが、それでもここまであからさまではなく、少なくとも表

面上は四系統を平等に扱っている。
が、ギトーにそれは一切無い。

「風の最強たる所以を証明してみせようではないか。
ミス・ツエルプストー、君の自慢の火で私を攻撃してみたまえ」

「こんな教室の中で、よろしいんですの？やるからには全力でいきますけど？」

「かまわんよ。思い切り来るがいい」

キウルケの指摘は正しい。戦闘行為に属する実技を教室内でやるなど正気の沙汰ではないのだ。

それでもなお強行しようとするギトーの気が知れない。
風のスクウェアなどと言っている。

確かに魔力は高い方なのだが、とても戦いなれているとは思えない。
あの目、あの所作、あの言動。

命をいたぶったことはあっても、命のやり取りをしたことは無い人間だ。

「行きますわよ……」 フレイム・ボール”！！”

「……」 タル・ンダ 攻撃力低下魔法”……”

「来い！……」 ウインド・ブレイク”！！”

衝突した炎と風は、互いに互いを打ち消しあった。
教室内にかかるいどよめきが起こる。

「……相打ち、ですかしら」

「そ、そのようだな…中々やるではないか。だが私は本気を出してはいなかった」

「本気を出したらさぞお強いのでしょうか？どうせならフーケ討伐で示して欲しかったですけど」

「うぐっ…」

こっそりタル・ンダでギトーの魔力を削ぎ落としておいたから相打ちで済んだが、実際打ち合えばキュルケは吹き飛ばされていただろう。

ギトーは気づいていないようだが、キュルケはちらりと俺の方を見やった。

俺の介入に気づいている。

この時点で、二人の実力差は知れる。単純な魔力の差が実力の差ではないのだ。

しかし、こうして魔法勝負ではなく口での勝負になると、ギトーにはご愁傷様としか言えない。

口での勝負でキュルケに勝てる者を俺は知らない。それほどキュルケは口が上手いのだ。

「…ありがとう」

「ああ。怪我はさせたくないからな」

こちらを見て言うタバサに、そう返しておく。

俺の介入に気づいたのは、このクラスではキュルケとタバサだけらしい。

他に俺の方を見たもの、気づいた素振りを見せた者はいなかった。

「いいか、風の系統とは…！」

ギトーが必死に風最強論を展開している。
キュルケは興味を無くしたようだ。

「失礼しますぞ！」

不意に、教室に響く声。

見ればコルベールが入り口に立っていた。

…何故か、金髪のカツラを頭に乗せて。
生徒もギトーも、絶句している。

「…コホン。ミスタ・コルベール、授業中ですよ？」

「本日の授業は全て中止と相成りました。
今日は佳き日であります。

我がトリステイン王国がハルケギニアに誇る一輪の可憐なる花、
アンリエッタ姫殿下が、本日当学院に行幸なさいます。

皆さん、日頃の研鑽の成果を姫殿下にご覧頂くまたとない機会ですぞ！

すぐに準備をしますのです。身なりを整え、杖をよく磨いておくように！

なんたる僥倖！行幸だけに！」

（…寒い…）

それは、コルベール以外全員の共通した感想だっただろう。可哀想に皆揃って固まっている。

まさか言葉だけでクラスを凍りつかせるとは…！

氷結魔法を得意とする俺にもできない芸当。コルベール、恐るべし。当の最強氷結魔法の術者は、渾身の自信作が冷たい反応で迎えられたのをショックに感じたのか、かるく身じろぎした。静まり返った教室に響く、カツラの落下音。

「…滑りやすい」

タバサがボソツと言った一言に、教室内が爆笑した。ギトーすら後ろを向いて肩を震わせている。キュルケなど腹を抱えて机を叩いて大笑いしている。

「ええい黙りなさいこの小童共！！さっさと自室へ戻って準備しなさいっ！！！」

「で、では…クククッ、本日の授業は…ぷぷっ、こ、これまで…フフッ…ゲホッゲホッ」

顔を真っ赤にして怒鳴るコルベールと、真っ赤な顔で必死に笑いを堪えて律儀にも授業終了を宣言するギトー。

生徒達はそれを見て、口を押さえたり肩を震わせたりしながらぞろぞろと教室を去っていく。

一人だけ列を離れたキュルケが此方へ歩み寄ってきた。

「…シン？」

「ああ、キュルケか。どうした？」

「どうしたじゃないわよ。何で手出したりしたの？」

「放っておいたらキュルケが負けていただろうからな。怪我をさせたくなかった」

「うぐっ…ハッキリ言わないでよね…」。

シンの加勢を受けても相打ちだったの、ちょっとショックだったのに…」

ちよつとムツとした顔で声をかけてきたから、怒られるかと思ったのだが…

やはりキュルケは冷静な判断力を持っているようだ。実際大して怒ってはいないようだった。

「まあ、とりあえず礼言つとくわ。ありがとね」

「いいさ、別に頼まれたわけでもないしな」

フツと笑って背を向けるキュルケを見送って、俺もタバサと共に寮へと戻った。

………

………

…

「アレがアンリエッタ姫か…」

ニコーン

一角馬二頭立ての豪華な馬車を降りた白いドレス姿の女性。

確かに可憐な花と称されるだけはあつて、相当な美人である。
容姿端麗、スタイル抜群。

濃いすみれ色のボブヘアと、白い肌やドレスの対比が眩しい。
表情や所作の一つ一つから高貴さ、優雅さが滲み出ている。
性格など知りようもないが、「深窓の姫君」を地で行くおしとやかな人にしか見えなかった。

だが、今後一国を背負っていかねばならない人物として見ると、世間知らずのお嬢様の域を出るものではないと感じた。
純粹無垢で穢れを知らぬその目には、物事の暗部を見てきた者には決して出せない光があつたのだ。

「…気になる？」

姫を見ようとせず、横で本を開いていたタバサが問ってくる。
心なしか、不安げな光を湛えた目で。

「俺が気にするのはどうやってタバサを守るか、それだけさ」

軽くおどけるように言ってやる。

「…そう」

短い返答を返してまた本に目を落としたタバサの顔に照れたような色が浮かんでいたのを、俺は見逃してはいない。

「しかし…さすがに一国の姫の行幸ともなると、護衛の腕は大したものだな」

「…あの帽子を被った髭の人、強い」

「やはりタバサもあの男に目をつけたか…ああ、あの男は相当に実戦慣れしている」

「…シンの方が強い」

此方を見ないで言うタバサの顔には、やはり照れた様子が見て取れる。

俺を信じてくれるタバサの言葉について嬉しくて笑いそうになるが、そんな様子は出さずさらりと答えてみせた。

「ああ、俺は誰が相手でも負けんさ」

そう答え、件の男に目を向けた刹那…

俺たちは、確かに互いを見ていた。

s i d e
o u t

第十三話 行幸（後書き）

第一部を終えて、心おきなくデレタバサを描くことができます。

今回はちよつと抑え気味かなあ。

タバサのキャラを壊すことなく存分にデレさせるのは難しいですね。
でも嫁だから頑張れます。

ではまた次回。

第十四話 追跡（前書き）

ちよつと短かったかも知れません。

第十四話 追跡

side 人修羅

姫の行幸から一夜。

VIPが来るということで厳戒態勢にあった魔法学院は、大きな問題も無いままに朝を迎えていた。

昨夜はこそそ動いていた人物がいたりして女子寮が少々騒がしかったのだが、別段敵意など感じず危険とも思えなかったので放置しておいたのだ。

それに、姫の護衛には魔法衛士隊の人間がいる。

昨日見たあの帽子の男はその魔法衛士隊の一つ、グリフォン隊の隊長なのだそうだ。

実際、大した腕だった。あの男がついているなら滅多なこともないだろう。

大体姫を守るのは俺の仕事ではないのだし…。

そう思つて、タバサには何も言わなかった。

少々騒がしいことくらいはタバサも気づいていただろうけれど、彼女は何も言わなかった。

そう、問題は無かったのだ。姫の護衛という一点に関して「だけ」だが。

(…結局一睡もできなかった…)

俺の睡魔を完全に叩き潰してくれた原因が、今俺の左腕を抱き込むようにして寝息を立てている。

『…今日からここで寝て』

『……でって…ベッドでか？タバサはどこで？』

『……』

『…一緒に寝ると…？』

俺も半人半魔の存在とはいえ、まだ心は人間のつもりだ。女性に対する興味は残っているし、何よりタバサは可愛い。付き合ってもいない女性と寝床を共にするなど…。そんなようなことを言ってみたのだが…

『…私と一緒に寝るのは…嫌？』

…断れるワケが無いだろう。

目を潤ませて不安げな顔で上目遣いに懇願されたのだ。

『分かった、一緒に寝よう』としか言えないではないか。

左腕に感じる女性の体温、ふわりと香る女性特有の甘い香り。慣れれば落ち着くのだろうが、生憎俺はそういう経験が無いのだ。まあ、ピクシーやネコマタに頬にキスされたことがあるくらいか。サキュバスも夜な夜な迫ってきたものだが、手は出していない。悪魔化する前だって別段女性にモテていたわけでもないのだ。経験の浅い俺に、この状況は刺激が強すぎた。

とはいえ、悪いことではない。

部屋の床で浅い睡眠を繰り返していた俺は、知っていたのだ。タバサには、定期的に悪夢に魘^{うな}される夜が来ることを。

父母を奪われ戦いに放り込まれた少女だ、悪夢を見ない方がおかしい。

しかし、今夜は俺が横にいて安心できたのか、魔された様子はなかった。

（…まあ、俺も一晩眠れないくらいならどうということもないし、な）

そう納得することにして、タバサを起こさないようそっとベッドから出る。

パジャマ姿の主人は、今も健康的な寝息を立てている。
そっと肩まで布団をかけなおし、俺は洗顔用の水を汲みに部屋を出た。

……

……

…

部屋に戻ると、気配を感じたのかタバサが起き出していた。

「おや、起きたか。おはよう、タバサ」

「…ん…おはよう、シン…ふわ…」

可愛い欠伸を一つくれて、寝ぼけまなこで此方を見る。

こんな姿を見たことがあるのは俺かキュルケくらいだろうか。
微笑ましい姿に、ついつい俺も笑顔になってしまふ。

「よく眠れたか？」

「…うん…お父様とお母様の夢を見た…」

「そうか、いい夢だったみたいだな。…さ、水だ。顔を洗って着替えるといい」

「…ありがとう」

顔を洗い始めたタバサをちらりと見やって、クローゼットから着替えを取り出し、隣に置いてやる。

そこまで済ませ、俺はそつと部屋の外へ出た。

さすがに女の子の着替えを凝視する趣味はないのだ。

……………

「シン、おはよう！タバサは！？」

「おはようキュルケ。」

タバサは中で着替えてるが、どうしたんだそんなに慌てて？」

廊下でタバサを待っていたのだが、キュルケが慌てた様子で此方へ走ってくる。

その表情に危機感は見られず、どちらかというと好奇心に輝いているようだった。

別段危険なことではないのだろうと判断し、こちらも軽く返す。

「実はタバサとシンにお願いがあつてね…」

「お願い、ねえ。タバサがもうじき着替え終わるから、そうしたら中で聞こうか」

「ええ、悪いわね」

…

（がちゃっ）

「…シン、終わった…キュルケ？おはよう」

「ああタバサ、おはよう。着替え終わったみたいね。ちょっとお願いがあつて来たのよ…入ってもいい？」

（こくっ）

三人連れ立って部屋へ入る。

「実はね…」

………

………

…

「ルイズたちがギーシュと魔法衛士隊隊長と連れ立って学院を出て

行ったと。

面白そうだからそれを追いかケたいと、そういうことか？」

「そう！そうなのよ！

ルイズとダーリンとギーシュだけならまだしも、魔法衛士隊隊長までついていくなんてただ事じゃないわ！

それに、ルイズとあの隊長さん、なんかありそうなのよねえ…
ツエルプストーの血が疼くのよお」

「…程ほどにな。…で、タバサ、どうする？」

「…構わない」

「さすがタバサッ！ありがとぅー！！」

破顔して抱きついてくるキュルケに、くすぐったそうな、しかしどこか嬉しそうな表情を僅かに見せるタバサ。

多分この表情の変化に気づく者はそう多くないだろう。

「じゃあ俺のセイリユウで追うことになるな。

馬とグリフォンだろう？

グリフォンのスピードは知らないが、馬を置いていたりはしないだろうし、馬の速度は超えないな。

朝食を取って支度を整えてから出ても充分追いつけるだろう」

「そうね、今回はちゃんと方角は確認してるし。ラ・ロシエール方面へ向かってたわ」

そう確認しあった俺たちは、食堂へと向かった。

……

……

…

前と同じく、正門を出て近場の林へ踏み入って、セイリユウを召喚する。

「…マタ馬ノ代ワリヲセヨト言ウノカ、主…」

「すまんな、セイリユウ。頼むよ」

「ごめんねえ、今度美味しい肉やお酒買ったげるから、勘弁して頂戴」

「…承知」

儼然とした様子のセイリユウを宥めすかす俺とキユルケ。肉と酒に釣られたのか、案外簡単に了承してくれた。

…

「相変わらず速いわねえ」

「…気持ちいい。読書に最適」

セイリユウは速い上に魔力で風をある程度遮断してくれている。
多分上に乗っている俺たちを気遣ってくれているのだろう。

おかげで、強風に煽られて振り落とされたりする心配はない。
羽ばたいて飛んでいるわけでもないから、揺れもほとんど無いのだ。

「…デ、何処へ飛べバ良イノダ、主？」

「ああ、あっちよあっち。南ね」

「だそうだ、頼むよセイリユウ」

「…承知」

吹き抜けるそよ風に身を任せ、俺は少し眠った。

s i d e o u t

第十四話 追跡（後書き）

今回もデレタバサ織り込みました。

一緒に寝るのはまあゼロ魔SSじゃありがちなシチュですが、やっぱり王道は入れとかないとね。

相変わらず進行遅いですが、お付き合いください。

<追記>

ラ・ロシエールの方角を北東と書きましたが、原作設定によるとトリスティンの南側だそうです。
修正しました。

では、また次回。

第十五話 暗躍（前書き）

お気に入り登録数200件突破。
感謝、感謝でございます！

第十五話 暗躍

side 人修羅

速度を落とし気味にして飛んで行く仲魔。

俺はその背に跨り、ぼーっと前を向いていた。

流れ行く雲、青い空。

地平線とのコントラストを目で楽しむ。

緩やかに曲線を描いていた地平線はしかし、今は大きく隆起した姿に変わっていた。

「シン、前に見えるあの山、あそこがラ・ロシエールよ」

「…港町だよな？何で山なんだ？普通海沿いだと思うんだが…」

キュルケの言葉に疑問を呈す。

その言葉に、キュルケは表情を変える。

効果音をつけるなら「きよとんっ」が望ましい。

「え？何言ってるのよ、海より山に港を置く方が効率いいじゃない」

「…根本的な認識や常識からして大きな齟齬があるようだ…」

言葉は通じるのに話が全く通じない。

こついう場合は会話の前提となる基礎知識、基礎認識の部分に大きなズレが含まれているものだ。

そこをまず修正しないとどうにもならない。

「…まあ、行ってみれば分かるかな」

「そうね、こっちの港や船のこと良く知らないみたいだし。
もしかしたらシンのビックリした顔見れるかも 説明しないでお
くわ」

「…悪趣味」

ボソツとつぶやくタバサ。しかし…

「何よー、シンの驚いた顔見てみたくないの？」

「…見たい」

少し俯き加減に、しかしちよつと顔を赤らめて言うタバサを見て、
キュルケは破顔した。

「でしょ！」

「…じゃあせいぜい大袈裟に驚くとするかな」

そんな二人の様子に思わず俺も苦笑してしまった。

…何気ない時間、しかし何よりも楽しい。

非日常に身を置くことを余儀なくされた者が望むのは幸福などでは
ない、平穏なのだ。

俺はそれを再認識していた。

……

「…主、アレデハナイカ？」

不意に、セイリユウがこちらに声をかけてくる。
ルイズ達を見つけたようだ。

「ん？どれだ？」

「右前方、見慣レヌ鷲頭ノ獣ノ後カラ馬ガ全速力デ駆ケテイル」

「…ああ、あれね。確かにルイズ達だわ」

グリフオンの上に帽子の男とルイズが、後ろで走っている馬の上には黒髪の少年と金髪の少年が見えた。

「よしセイリユウ、あそこへ向かって…ん！？」

三頭の前に、数人の男たちが飛び出してきているのが見える。
手に武器を持った男達。

「…奇襲を受けているのか！？」

「…盗賊」

「まずいわね。すぐ援護するわよ！急いで！」

「セイリユウ！行け！」

「承知」

セイリユウがスピードを上げて急降下していく。

眼下に見えるルイズ達と盗賊共の姿がどんどん大きくなってきた。

「俺が飛び降りて蹴散らす。タバサとキュルケはセイリユウに乗ったまま魔法で援護を頼む」

「オーケー、任せて！」

「…分かった」

「セイリユウ、二人を頼む。…よっ！」

セイリユウの背を蹴って盗賊たちのだ真ん中へ着地する。

いきなり降ってきた見たことも無い亜人らしき者に、盗賊たちは混乱する。

「な、なんだコイツは！？」

ルイズの前に立つ帽子の男は怪訝な様子で此方を見ている。

魔法学院で目が合った時に俺を見たのを覚えているのか、敵意を向けてきてはいないようだ。

盗賊共の誰何の声には答えず、俺は片っ端から盗賊共を殴り倒した。

「い、いきなり何しやがんだこの亜人がっ！おい、こいつ諸共殺っちまえっ！！」

俺に向かって振り下ろされる剣。

しかしあえて避けたりせず、無造作に前へと踏み込んだ。

肩に軽い衝撃。しかし痛みは無い。

達人クラスならまだしも、賊程度が振るうなまくら剣に傷つけられ

るほどこの体はやわではないのだ。

まして、あえて前へと踏み込んで相手の間合いを外してある。間合いを少し外してやれば、その一撃には速度が乗らないし力も入らない。

たったこれだけの動作でも敵の攻撃力のほとんどを奪うことができるのだ。

「なっ！？斬れねえだ！？どんな体してやガフツ！？」

皆まで言わせず殴り倒す。

もちろん、気絶程度で済むよう手加減はしている。後で尋問しておく必要があるからだ。

上からはタバサとキュルケが放つ氷の矢や炎の玉が降ってくる。

ルイズ達も状況を理解したのか、それぞれに盗賊共を攻撃していた。地力が違いすぎる。盗賊共との戦いはすぐに終結した。

…

「…シン、無事？」

「ルイズ！アンタ達大丈夫？」

セイリユウから飛び降りてきたタバサとキュルケが声をかけてくる。背に乗せていた二人を下ろしたセイリユウは、後ろでふわふわ浮いて此方を伺っている。

「キュルケ、タバサ…シンまで…アンタ達なんでここにいるのよ！？」

「ルイズ、この三人は？」

「え、ええ…ワルド様、この三人は…」

怒鳴るように疑問をぶつけてきたルイズが、帽子の男の声に一気にしおらしくなる。

二人は何か特別な関係なのだろうか、と感じた。まあどうでもいいことなのだが。

…

…

…

「なるほどね…ルイズの級友とその使い魔君か」

「…タバサ」

「”微熱”のキュルケよ。…いい男ねえ…ねえアナタ、情熱を知りたくはないかしらあ？」

タバサは普段どおりに。

しかしキュルケは自己紹介と同時にワルドと呼ばれた男を誘惑にかか

「悪いがキュルケ君、僕にはルイズという婚約者がいるのだよ」

冷たくあしらうワルドの言葉。しかし婚約者とは…。

ワルドの年齢は知らないが、おそらく20代後半。ルイズとは10以上違うはず。

つまりは…ロリコン！？

…タバサに手を出したら…消え。

ワルドに対する警戒心を募らせつつ、しかしそれを表に出さないよう気をつけながら俺も自己紹介する。

「タバサの使い魔、シンだ。

ちなみに向こうの竜はセイリユウ、俺の仲魔…まあ使い魔みたいなもんだ」

「使い魔が使い魔を持つのかい…？変わっているねえ」

「私は魔法衛士隊グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ。

シン君、君はかなり強いな。先ほどの戦いぶりを見せてもらったよ」

ギーシュはセイリユウの存在に驚き、ワルドは俺の戦いぶりを褒める。

まあどちらもどうでもいいことだ。

…

「なるほど…アルビオンへ、ねえ。危ないわよ？

あの国が今どうなってるか知らないワケじゃないでしょ？何しに行くのよ」

「危険は百も承知よ。目的は極秘任務だから言うわけにいかないの」

「まあそういうことだ。任務内容は聞かないでくれたまえ」

俺たちが来る原因となったキュルケが、ルイズ達から話を聞いている。

俺たち三人の中では一番弁が立つし、こういう場合は適任だ。

ギーシュは、俺が気絶させておいた盗賊を尋問している。

俺はそちらの様子を見に行くことにした。

「ギーシュ、何か吐いたか？」

「ああ、シンか。うむ、どうもただの物盗りのようなのだが、どうも要領を得なくてね…」

おい、何か隠しているだろう。さっさと吐けっ！！」

「な、何も隠してねえよ！俺たちはただの盗賊だ！

お前らしい身なりしてやがるから身ぐるみ剥いでやろうとしただけで…！」

…嘘だな。

少なくともワルドはグリフォンに乗っている。

あの乗騎と身なりを見ればメイジであることはすぐに分かる。

しかも、グリフォンを乗りこなすほどのメイジなのだから凄腕であることも読み取れるはず。

身なりに目が眩んだとしても、狙う相手として自然とは言えない。

大体、今はアルビオンが内乱中だから、アルビオンへ行くための港へ続くこの街道を通る商人は多い。

いつの時代もどこの世界も、戦争が生む特需は大きいのだ。

大きな利益を狙ってあちこちからやって来る商隊を狙うほうが、貴

族を狙うよりよほど楽で儲けも大きい。

さて、どうやって本当の目的を吐かせてやろうか。

…俺の意識は、尋問…いや拷問方法の検討へと入っていく。

「ギーシュ君、シン君、何か分かったかね？」

しかし、俺の思考はワルドの声に途切れた。

「ええ、どうもただの物盗りのようなのですが、まだ何か隠しているようにも感じます」

「ふむ…詳しく聞いている時間も惜しい。捨て置くでしょう」

どうやら急ぎの任務のようだ。

「キュルケ、俺たちはこの後どうするんだ？アルビオンまでついていくのか？」

「面白そうだし、手伝うことにしたわ」

戦地へ乗り込むことになるか。

まあ、タバサを守ることに注力すれば問題はない。

その気になれば一軍まとめて蹴散らすことすら造作も無いのだから。

「分かった…ワルド子爵、先にラ・ロシエールへ向かってください。」

俺たちは後から行きます」

「何？…急ぎの任務なのだが…」

「大丈夫、あいつに乗ればすぐ追いつけます。時間はかけませんから、お先に」

後ろに控えるセイリユウを指して軽い様子でそう言うと、自信があるのだらうと納得したワルドは頷く。

ワルド、ルイズ、サイト君、ギーシュを見送ったあと、俺は盗賊に向き直った。

「ねえシン、一体どうしたのよ？こいつらに何かあるの？」

「ちょっと気になることがあってな…聞き出しておきたい。

すぐ行くから、二人はセイリユウに乗って待っていて欲しい」

…二人に拷問を見せたくはない。

そんな俺の微妙な表情を見抜かれたのか、タバサがそつと俺の腕を取る。

「…シン…」

心配そうな顔で俺を見上げてくるタバサ。

主に心配されるようではまだまだだと思いつつ、俺は笑顔を見せてやる。

「大丈夫だ、無理はしない。ほら、キュルケと二人で待っていてくれ。すぐ終わるから」

(…こくっ)

一瞬ためらいを見せるものの、ちゃんと頷いてくれる。

二人がセイリユウに乗ってちよつと離れるのを見て、改めて俺は盗

賊たちに向き直った。

「な、何だよ…話せることはもう全部話したぞ？」

「そ、そうだよ…いい加減逃がしてくれよお…」

随分都合のいい要求だ。

「お前らはまだ隠していることがあるだろう？」

狙いは金品ではなく、あの四人の命だろう…さつさと吐いた方が身のためだ」

「なっ！？いや、違うつてホン…ぐああっ！？」

指で摘むようにして放り捨てたのは、血まみれの爪。

「…さつさと吐け。でないと爪が一枚ずつ剥がれていくぞ？」

手の爪を全部剥がしたら…今度は指を一本ずつへし折っていくか。それでもだめなら両の耳を千切り取る。次は目だ。

そのうち、いっそ殺してくれと思うようになるさ。

さあ、お前はどんな声で啼くんだ？…聞かせてくれよ」

冷たい目で見下ろすようにニヤリと笑ってみせる。

「ひいっ！！わ、分かった！話すよ！話すからやめてくれ！！」

「フン、さつさとそう言えばいいんだ。…で？」

「…俺たちは、仮面をつけた妙な男に頼まれたんだ。

今日、この道をメイジを含む四人組が通るから襲え…って。

ガキを含む一行で目立つからすぐ分かるはずだ……ってよ。

襲えとは言われたが殺せとは言われなかったのがちょっと妙だとは思ってたんだが……

何せ、報酬が良かったもんでよ……」

怯えたように告白する男を見下ろしながら、さらに言葉を継ぐ。

「……その仮面をつけた男というのは何者だ？名は？」

「そいつの情報は全く分からねえ……」。

が、襲撃が済んだらラ・ロシエールで落ち合って報酬を貰う手はずになってた」

……その仮面の男、おそらくこいつらに報酬を渡す気など無いな。

ラ・ロシエールへ来たらそこで殺して口封じ……まあそんなところだろう。

仮面をつけて自分の情報は一切渡さない。

そんな真似をする以上、自分と少しでも接触したこの男たちを見逃すわけではない。

黒幕がラ・ロシエールへ来る以上、そこでも何か一騒動起きると見ておくべきだろう。

「……良いだろう。情報に免じて殺さずにおいてやる。」

死にたくなければラ・ロシエールへは近づくな。さっさと失せろ」

そう言い捨て、喜色を浮かべる盗賊たちには目もくれず、俺はセイリュウの元へ向かった。

……

「…どうだった？」

セイリユウに乗り込み、ラ・ロシエールへ飛ぶ。

俺が何も言わないのを怪訝に思ったのか、タバサが心配そうな表情で俺に話しかけてくる。

「…奴等、やはり金で雇われたようだ。

物盗りというのは間違いなく嘘だ。あの四人を襲撃するよう依頼されたらしい。

それに、連中の話から察するに、ラ・ロシエールでもう一波乱あるかも知れん。

ルイズ達の目的が何かは分からんが…この一件はかなり根が深いぞ。

首を突っ込むならそれ相応の覚悟が要る。」

トリステイン王国魔法衛士隊で隊長職にあるワルドすら動いているのだ。

魔法衛士隊は女王直属らしいから、まず間違いなく女王が政府首脳部の命令で動いている。

彼らの口ぶりからすると、それは極秘命令の類。

である以上、今回の一件には国家間の陰謀が関わっている可能性が高い。

そこで、この襲撃の黒幕は誰かという話になるが…

この時期にラ・ロシエールへ向かう貴族がいれば、アルビオンへ向かっていると考えるのは当然。

その目的は多々あれど、レコン・キスタかアルビオン政府のいずれかに属する、ないしは接触しようとしている者であることは間違い

ないのだ。

両勢力ともに、ラ・ロシエールへ向かう貴族がいれば「敵に通じている者ではないか」と疑うことはごく自然なことだ。

ただし、レコン・キスタと違って今のアルビオン政府はかなりの劣勢。

トリステイン王国領であるラ・ロシエールにまで敵を探り出すための諜報員を置く程、人的資源に余裕があるとは思えない。であれば、今回の黒幕はレコン・キスタである可能性が高いのだ。

俺の説明に、二人は目を伏せるようにして考え込む。

「…なるほどね…ちょっと推理に飛躍があるような気もしないでもないけど…」

「…筋は通る」

「確かに…ね」

「まあ所詮推測は推測だ。今後の推移によって状況はどうにでも変わるだろう。」

首を突っ込む以上、常に警戒は解かないでくれ」

「分かってるわ」

（こくっ）

警告に頷く二人に俺も頷き返し、セイリユウを駆る。

さあ、行こうか、ラ・ロシエールへ。

そして、陰謀渦巻くアルビオンへ。

(…何があるうと、タバサは守る)

そう決意を固めて、だんだんと大きく見えてくるラ・ロシエールを
俺は睨み付けた。

s i d e o u t

第十五話 暗躍（後書き）

終盤の人修羅の推測の辺りなんか、ノリノリで書きました。
楽しいね、陰謀。大好きだ策謀。

まあ一番好きなのはそれを力づくで踏み潰す様なんですけど（オイ

第十六話 奇襲

side 人修羅

「ふむ…なるほどな。確かに筋は通る」

グラスの中に揺れる緋色ワインの雫をぐつと煽って呟くワルド。

セイリユウの上でタバサとキュルケに語った推理を、ワルドにも話しておくべきと考えたのだ。

「ええ…多少飛躍はありますけどね」

「うむ、仮定の上に仮定を重ねた推測ではあるが…しかしいい所を突いた推理ではあると思う。」

過信は禁物だが、覚えておいて損は無いらうな」

「連中が言うには、報酬はここ、ラ・ロシエールで受け取る手はずだったそうです。」

黒幕はおそらくそこで仕事を終えた盗賊たちの口封じをしようとしていたのだらうと思います。

つまり、あの襲撃の黒幕は今この町にいる可能性が高い…。

一応タバサたち二人には襲撃に注意するよう警告はしておきました」

そこまで話し、俺もグラスを煽る。

未成年ではあるが、悪魔に法律も何もないのだ。

第一ここには日本のように未成年の飲酒を禁じる法は無い。

キュルケもギーシュも平気で飲むのだから。タバサも付き合い程度

には。

「そうか…確かに警戒しておくに越した事はないが…

君の推理からすると、黒幕はレコン・キスタ側、その目的は『トリスティンのメイジと思しき連中がアルビオン政府へ接触を取ろうとしているのを阻止する』ことのはず。

余り町を混乱させると私たちに逃げられる可能性を高めてしまうことにもなる。

ここで仕掛けてくる可能性は余り高くないだろうと私は考えている」

ワルドは事態を少々楽観視しているようだ。

もちろん、俺も自分の推測が絶対的に正しいとは思っていない。だがこういう場合、警戒しておくに越したことはないのだ。

万一に対する備えは無駄になればこそ幸いであり、取り越し苦労はしておいた方がいい。

考えが足りないことが死に繋がることをを思えば、考えすぎに得はあっても損は無い。

長く戦ってきた自分だから分かる、それが生きる秘訣なのだ。

「その推測が当たっていることを期待しましょう。

油断を突かれて死ぬくらいなら、心配性だ臆病だと笑われる方が余程マシというものですから」

軽くおどけてそう言う俺に、ワルドもニヤリと笑って酒を注いでくれた。

「フフ、全くその通りだな。

にしても、先の奇襲の際に君の戦いぶりを見せてもらったが、君は相当に場慣れしているな。

それだけでなく、君の身体それ自体も実に頑丈に出来ているようだった…。

間合いを外しただけで敵の剣を無傷で受け止めた際など、本当に見事だったよ。

見たところ亜人のようではあるが、人間に負けず劣らずの知性を持った存在…初めて見る。

君は、一体…？」

怪訝な顔で疑問を呈するワルド。

しかし、真っ正直に答えるのは憚られる。

悪魔などと、聞こえの良いものではないのだ。

「…今の俺はタバサの使い魔。それ以上でも以下でもありませんよ」

けろりとした顔で答えてやる。

話すつもりは無いというこちらの意図を察したワルドも、それ以上追求しようとはしなかった。

「フツ…そうか。何にせよ、君は頼りになりそうだ。

君が敵でなくて良かったよ。さ、もう一杯」

「ハハッ、頂きます。

…まさか貴族に酌をしてもらうことになるとは思いませんでした。人生何があるか分からないものですね…」

「ああ…全くだ…」

静かに、しかし万感の想いが籠っているであろうその一言が、後から思い返すたびに心に残った。

…

…

…

俺たちが宿泊している宿、女神の杵亭。

中の上程度の、貴族が泊まるにはそこそこの宿である。

資金はどこでどれだけ必要になるか分からないから下手に散財するわけにはいかない。

かといってその日暮らしの傭兵やごろつきの平民達が泊まるような安宿に貴族が泊まれば目立ちすぎるし危なくもある。

このくらいの宿であれば、宿側も泊まる客をある程度選ぶ。

最低限宿代は払えて、かつ問題を起こさない程度の分別を備えた相手でなければ泊めないのだ。

宿代を踏み倒しかねないような者を泊めねばならないほど宿側も困窮していないし、何より問題など起こされては宿の評判に関わる。

この世界では効率的な情報伝達手段が無い以上、客の口コミや噂が最も有効な宣伝手段なのだ。

ゴシップや悪い噂が好きな人間などどこにでも居るから、評判を傷つける類の情報が流れるのは早い。

そこを熟知している宿側も、その辺りは充分に注意を払うのだ。

とはいえ、酒が入れば気が大きくなり陽気になるのは人の性。

夕食時を少し過ぎて程よく酒が入った客たちは、笑い声を上げて乾杯を繰り返し、ぐいぐい酒を煽っていた。

「船、あるかしらねえ…」

「どうだろうね。『スヴェルの夜』は確か明後日じゃなかったか？
よほど急ぎの便でもなければそれまで待つのではないかな」

頼杖ついて呟くキュルケに、グラス片手に答えるギーシュ。

何かを考えるように俯くルイズと、どこかぶすつとした様子のサイトは二人揃って黙っている。

「子爵が出航予定を聞きに、少し前に港へ向かったはずだな。

彼が戻るのを待とう。…ほらシン、一杯どうだ？」

「さつき子爵と何杯か飲んだからな…これ以上飲むといざという時に酔って対応できなくなりそうだ。

やめておくよ、ありがとう」

こつちの世界の連中は若い頃から飲んでいるだけあって、大酒呑みうわはみが多い。

地球で同年代の少年少女に飲ませたらひっくり返ってしまうであろう量を、みんな平気で飲む。

悪魔になった体でどれだけ酔いが回るか試したことはない。

が、羽目を外して大酒飲んでゲーゲー吐いて苦しむ友人を昔（悪魔化する前に）何度か見たことがある。

あんな姿になるのは真つ平御免だ。

そう思い、ギーシュの誘いを謝絶した俺は料理を突つつく。

「そうか…君は常に戦う用意を欠かさないのだな。

常在戦場、立派な心がけだと思うよ」

単に酔いつぶれた間抜けな姿を晒したくないだけだからそんなに感心されることでもないのだが…。

などと思いつつ、好意的な賛辞は素直に受け取っておいた。

そこへ、子爵が戻ってくる。

「あ、子爵…どうでした、船はありそうですか？」

「いいや、ダメだった。やはり『スヴェルの夜』まで船を出す予定はないそうだ」

眉間にしわを寄せた子爵の表情からしておそらくいい結果は出なかっただろうと思っていたが、予想通りか。

「…なあタバサ、『スヴェルの夜』って何だ？」

「アルビオン大陸が最モラ・ロシエールに近づく夜のこと。動力源である風石の消費を最低限にするために、この日を狙って運行する船が多い」

「…ふむ…」

アルビオン大陸が近づく…動力源のフウセキ…良く分からない言葉がいくつかある。

浮遊大陸らしいが、どうやらふわふわと動いているようだ。フウセキというのは…風の石と書くのだろうか。

思うに、魔力を秘めた石か何かなのだろうか。魔石やマハラギの石みたいな。

そんなことを考えて…

しかし、その思考は途切れることを余儀なくされた。

外から向けられる多くの気配と、そして粘りつくような敵意に。

「…子爵」

「ああ、気づいたか…ッ！？伏せる！！」

目配せした直後に、宿の中に矢が撃ち込まれる。

幸い誰にもあたらず床に刺さっただけであったが、酒場をパニックに陥れるには充分であった。

「何だ、敵襲か！？」

「テーブルを倒して！盾にするのよ、早く！！」

慌てるサイトとギーシュに、素早くキュルケが指示を出す。

料理や酒が食器ごとダメになるのも構わず、テーブルを二、三倒して即席の盾を作って隠れる。

「…宿の前面に敵部隊、数はここからでは良く見えないが、50人は居そうだな…」

…裏口に敵の手が回っている可能性もあるが、正面突破よりはマシか…

諸君、この手の任務は、半数が目的地へ辿り着ければ成功とされるものだ」

「…（こくっ）…囃」

ワルドの状況説明に頷いたタバサが、キュルケと俺と自分を指差してそう言う。

それで皆理解したようだ。

ワルドを先頭にルイズ、サイト、ギーシュと続いて裏口から港へ向かって走り出す。

それを確認した俺は、タバサとキュルケに向き直った。

「本来なら時間稼ぎが常套手段だろうが、あまり時間をかけすぎるとこちらにも消耗しそうだ。」

俺が前へ出て纏めて蹴散らして来よう。

タバサは援護を、キュルケは俺の攻撃を掻い潜って店内へ踏み込もうとして来る者を狙って欲しい。

ただし、二人とも酒場からは出ないように」

「それは良いけど、一人で前へ出るなんて危険じゃない？」

「…シンなら大丈夫。私が援護する」

タバサが決意を込めた目で静かに言い放つ。

その目と言葉に俺への確かな信頼が見て取れる。

それだけで、不思議と力が湧いてくるような気がした。

「ああ、任せておけ。…いくぞ！」

破顔して言い放ち、そして入り口へ向かって駈ける。

待ち受けるは、完全武装の傭兵数十人。

「覚悟しろ…俺たちに剣を向けたことを後悔させてやろう!!」

ニヤリと笑い、俺は全身に力を込めた。

s i d e o u t

第十六話 奇襲（後書き）

話せば分かるもんだ、ふふふ。

第十七話 恐怖（前書き）

更新にちよつと間が空きました、申し訳ない。

第十七話 恐怖

side 人修羅

テーブルの陰から飛び出し、酒場の入り口横まで走る。

壁に身を隠して、散発的に窓から飛び込んでくる敵の矢を避けた。

(…数に任せているだけ、統率が取れていると言い難いな)

矢を放つなら合図して同時に放つのが常道。

バラバラに撃って効果が上がるのは圧倒的に射手の数が多い場合だけだ。

数に任せているだけ、魔法が飛び込んでこない所を見るとメイジは含まれていないらしい。

矢が途切れるタイミングを見計って入り口から外へ飛び出し、間髪入れずに攻撃を加える。

「ジャッ!!」

水平に振りぬいた腕から不可視の斬撃が乱れ散るように飛び出す。一種のかまいたちのようなその攻撃を見切れる者はおらず、数人が斬り倒された。

「ッ!?ぐああッ!!」

「な、何だ!?何が起こった!?!」

一対多の戦いにおいて真価を発揮するこの手の広範囲攻撃のうちでも特に威力の高い技、”デスバウンド”。

一種の散弾のようなもので、正確な狙いをつけなくてもある程度の命中率を期待できる技である。

その分、攻撃の精密さには欠けるのだが、このような状況では気にする必要が無い。

そして小さな不可視の斬撃は、一発でも常人相手なら致命傷に至るに充分。

町を破壊するわけにいかないから、今のはかなり力と範囲を絞ったが、全力でやればこの一回で全滅させて余りある。

「アイツはやべえ！殺せ、囲い込んで討ち取れっ！！」

真っ直ぐ突っ込んでくる者、側面に回り込もうとする者、後ろへ回ろうとする者、矢を撃ち込んでくる者。

散開して俺を攻撃しにかかるようだ。

多勢の利を活かして多面攻撃に出たその判断は褒めてもいい。

相手が俺でなければ討ち取れただろう。

ニヤリと笑って、前へ出る。

「馬鹿がつ！死ね…ゴフツ！！」

勝利の笑みを浮かべて油断した馬鹿を間髪入れずに殴り倒し、俺は更に前へ出る。

俺が下がるか、さらに側面へ回り込もうとするだろうと予測していたであろう敵は、俺の動きに驚き、一瞬だけ動きが止まった。

「エア・ハンマー」

敵の動揺した瞬間を的確に狙い、タバサの魔法が敵数人を纏めて薙

ぎ倒す。

見れば、タバサとキュルケも入り口近くまで押し出してきたようだ。窓から顔を覗かせるようにして魔法を放っている。

店内へ乗り込もうと突撃する兵も居たが、キュルケの炎に焼かれて一人残らず消し炭だ。

敵も統率の乱れを把握したらしい。

リーダーらしき男が俺を囲むよう指示を出す。

槍袈を敷いて俺を取り囲もうとしているようだ。

包囲が完了したその瞬間、俺の二撃目が発動した。

「ジャッー!!」

空へ向けて放った魔力の塊が、弾けて地上へ降り注ぐ。

さながら、槍の雨のように。

この”ジャベリンレイン”は”デスバウンド”と同じく広範囲攻撃である。

効果範囲の差、攻撃の角度や速度の差から、状況に応じて使い分けられている。

俺を囲んでいた哀れな傭兵30名のうち、無傷で済んだ者はいない。ざっと死者23〜6名、残りが重傷と言ったところか。致命傷も何名が含まれている。

たった二撃で敵の戦力の大半を削り取ってしまった。

リーダーらしき男は呆然自失。

射手たちはほとんど無事だが、恐慌状態が半分、逃亡者が半分といったところ。

狂ったような声を上げて浴びせられる散発的な矢は全て無視して、俺はリーダーらしき男へ向けて走った。

「う、うわああああッ!？」

恐怖から逃れようと剣をデタラメに振り回すその隙を狙って、俺は拳を叩き込む。

一撃で首の骨が折れたのだろうその男は、遺言すら残せぬままに命を失った。

「…運が無かったな…」

……

「こっちはこんなもんか。タバサ、キュルケ、そっちは？」

「終わった」

「こっちももう残ってないわ」

まだ少し残っていた敵の抵抗は、これで完全に排除した。損害はほとんど無い。

これだけの数を3人で相手にしたにしては早く済んだが、ルイズ達を追うには遅い。

おそらく彼らは既に港へたどり着いている頃だ。

「よし、じゃあ子爵達を追うか…むッ!？」

タバサとキュルケも異変に気づいたらしい。杖を構えて俺の方へ駆け寄ってくる。

闇に包まれた大通り。

起こった騒ぎに関わるまいとどの店も家も堅く扉を閉ざして息を潜めている。

だが、誰も居ないはずのそこには、確かに黒い人影があつた。

それだけならまだいいのだが…気のせいだろうか。

その人影は、だんだんと大きくなっているのだ。

「大きくなっていく…一体…ッ!？」

「下がれ！ゴーレムだ!!」

「…」エア・ハンマー」

俺の声に慌てて飛び退るキュルケ。

タバサも牽制に一発撃った後、すぐに下がる。

「…なあタバサ、このゴーレムの造形と動き…どこかで見た覚え無いか？」

「…フーケ」

やはりタバサもその可能性に思い至つたようだ。

このゴーレムは、フーケが作ったものに酷似していたのだ。

「嘘でしょ!？フーケは今頃監獄の中にいるはずよ!？」

焦つたように言うキュルケに答えたのは、俺でもタバサでもなかった。

「…脱獄したんだよ」

「フーケか…しつこいなアンタも。
そんなにマジックアイテムが欲しいんなら、俺の幻惑の羽をくれ
てやるからとつと消えろ」

暗い路地から歩き出てきたフーケはしかし、俺の軽口に乗ろうとは
しなかった。

「生憎、今は盗賊は休業中。アンタたちを倒すことが目的だよ。
それに幻惑の羽貰ったってどうせまた使い捨てだろ？」

二束三文どころか買い取ってすらもらえないさ」

「全くしつこいわねえこのオバサンも。

こないだシンに叩きのめされたの忘れたのかしら？」

呆れたように呟くキュルケの一言が、どうやらフーケの逆鱗に触れ
たらしい。

「オバ…ッ！？アタシはまだ23だよ！

それに、アタシに簡単に操られちゃったバカに言われたかあない
ね！

乳にばかり栄養取られて脳みそ育ってないアンタにや分からな
いかも知れないけど？

…アッハッハ…！」

「…バカ…？」

乳にばかり栄養取られてる…？

脳みそ育ってない…？」

げに恐ろしき女の戦い。

二人が放つ殺気を帯びた怒気は、百戦錬磨の俺をすら萎縮させるに充分だった。

「…シン…？」

この年増、アタシがやらせてもらっわ…アンタはこのゴーレム何とかなさい…。

嫌だなんて…言わないわよねえ？」

NOという返答は即座に俺の死に繋がる。

実力的には俺の方が圧倒しているはずなのに、それを忘れさせるほど今のキュルケは怖い。

俺に肯定する以外の選択肢など残されてはいなかったのだ。

「…分かった…フーケは頼んだ、キュルケ。

この際、徹底的に懲らしめてやればいい。

…タバサ、キュルケを頼むぞ…（ボソッ）」

タバサがこくりと頷くのを見やって、俺はゴーレムへと向かう。

…

既に二度も破壊されたゴーレムが俺に通用すると思うほどフーケが馬鹿なら俺としても苦労は無い。

が、数々の貴族を出し抜いてきたフーケが馬鹿であるはずがないのだ。

フーケはキュルケと戦闘中。

あちらでも魔法を使っているところを見ると、目の前の^{デカブツ}ゴーレムはどうやら自動操作らしい。

フーケが俺たちの前に姿を現したことからして、自動操作に加え、そう簡単に潰されないような細工をしてあるのかもしれない。

…まずは、小手調べだ。

「ジャッ！！」

ゴーレムの足へと飛んだ”アイアンクロウ”は、しかし甲高い音を残して弾かれる。

その音からして、おそらく鋼鉄製ゴーレムなのだろう。

これほど大量に鋼鉄を作り、それを人型に成形し、自律行動するよう魔力を込める。

おそらく膨大な魔力を必要とするはず。

スクウェアクラスでもない限り、今のフーケに余力は少ないはずだ。ならば、キュルケの事を気にかける必要はない。

「さて…どうやって潰してやろうか」

ニヤリと笑って、俺は次の攻撃に移った。

s i d e o u t

第十七話 恐怖（後書き）

今回は延々と戦闘描写。
ついでに少しのギャグ。

どっちも苦手な描写です。

誰か俺にセンスを分けてください…。

あとサブタイ考えるのに苦労してます。

ホント、漢字二文字に限定しようとか考えた馬鹿な俺を殴ってやりたい。

第十八話 友情

side 人修羅

「少々時間がかかったな…」

「そうねえ、でもこのスピードなら途中で追いつけるんじゃないかしら？」

俺たちは今、セイリユウに乗ってアルビオンへと飛んでいる。
あの後フーケとゴーレムを無事撃退したのだが、ゴーレムが鋼鉄製だったこともあって破壊に少々手間取ったのだ。

その後、街の外まで移動してセイリユウを召喚して、騎乗。

さすがに夜とはいえ街の中で召喚するわけにもいかなかった。
それだけでなくも大立ち回りを演じてかなり目立ったのだから、これ以上は…というわけだ。

「この時期に飛んでいる船は多くないはず…すぐ見つかる」

タバサの言葉に、俺たちも頷き、月明かりに照らされた雲を見やった。

…

…

…

「ん…？あそこに船が飛んでるな、アレか…？
セイリユウ、ちよつと寄せてくれ」

向こうがルイズ達の乗り込んだ船ではない場合、見つかった時に攻撃しようとしていると勘違いされては面倒だ。

まずは気づかれないように、しかし向こうの船の様子が確認できるように、そして攻撃と取られないような態勢で、セイリユウは目標の船へと近づいていく。

「…旗を掲げていない。空賊」

「関わらないのが賢明か…セイリユウ、甲板にいる人間、見えるか？
見覚えのある人間はいるか？」

タバサの言葉に舌打ちしたくなるのを押し殺して、セイリユウに問うた。

「…酒場デ別レタ者達ガ甲板二居ル。拘束サレテハイナイ」

「よし…俺がまず甲板へ飛び降りて様子を見る。
合図したら、セイリユウも甲板へ降りて来い。」

もし不味い状況だったら、そのまま甲板の制圧に移る。
戦闘の様子が見て取れた場合の判断はタバサに任せる」

「…分かった」

「大丈夫だと思うけど、気をつけなさいね、シン」

了承する二人に頷き返して、セイリユウを促す。
船の真上を横切るように高速で飛ぶセイリユウの背を蹴り、俺は甲板へ飛び降りた。

：

すたんっ、と軽い音を立てて降り立った甲板。
いきなり空から降って沸いた不審者に、水夫たちが怒鳴るような誰何の声を上げる。
俺はその声に構わず、大声で呼ばわった。

「ルイズ！ワルド子爵！サイト君！ギーシュ！居ないか！？」

「な、何なんだ貴様は！この船に何の用だッ！？」

「この船に貴族の四人組は乗っていないか？女の子一人に男三人のグループだが。」

乗っていないならすぐに立ち去るし、乗っているなら会わせ……」

しかして、その言葉は途中で途切れた。

知り合いの声が上がったからだ。

「シン！？シンじゃないか！来ていたのか？タバサたちはどうしたんだ！？」

ギーシュが駆け寄ってきて声をかけてくる。
その様子に、水夫たちがぼかんとした顔で問うた。

「あの…この男は貴方がたのお連れで…？」

「あ、ああ。彼は私たちの仲間だ。一端離れたんだが今合流した。大丈夫、敵ではないから…」

その言葉に釈然としないものを抱えたような顔で、水夫たちは持ち場へ戻っていく。

その様子を見て、俺はセイリユウへ合図を送った。

「タバサ、キュルケ、シン！来ていたの！？」

甲板へ降り立ったセイリユウから二人が降りたところで、サイト君とワルド子爵を伴ったルイズが甲板へ出てくる。

「あの後、傭兵達は蹴散らした。こちらに被害は無い。それからセイリユウに乗って追いかけてきて、この船を見つけたんだ」

簡単に経緯を説明し、情報交換を行う。

「そう、お疲れ様。
私たちはあの後…」

…

…

…

「やあ、君たちがワルド子爵達のお連れか。

初めまして、私がアルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダ
ーだ。

アルビオン王国艦隊旗艦”イーグル号”へようこそ。

大した持て成しもできないが、我等は君たちを歓迎しよう！」

まさか、こんなことになっているとは思ひもなかった。

いや、予測できる方が異常といえる、そういう類の事態かも知れない。

あの後ルイズ達は、伏兵の奇襲を撃退しながら港へ到達。

そこで商船に乗り込み、船長に威圧じみた説得を行って強引に出航
したらしい。

順調にアルビオンへ向けて航行していたのだが…。

そこで何の因果か、空賊の襲撃を受けてしまったのだそうだ。

奇襲の撃退によって消耗し、さらに準備の出来ない船を飛ばす
ためにワルド子爵の魔法で航行補助をしたのが災いして、空賊たち
と戦う余力が残っていなかった。

やむなく恭順を示して捕らわれたのだが、空賊の頭にいきなり呼び
出されて詰問を受けた所、頭が実はアルビオンの皇太子であること
が判明。

かくて、トリステインからの使者である四人はウェールズ皇太子の
船でアルビオン王室の居城、ニューカッスルへと向かうことになっ
たのだそうだ。

ちなみに、極秘任務についてもある程度の話は聞いた。

とある品を回収することが任務であり、それを持っているのがウェ
ールズ皇太子だ、と…。

「ただの空賊船かと思いましたけど…まさかウェールズ皇太子が乗

っていらつしやるなんて……」

キュルケは額から汗を垂らしつつ、恐縮している。さもあるう。まさか皇太子が空賊をやっているなど、誰が想像するものか。

タバサも彼女の言葉に頷いている。

表情は普段とあまり変わらないように見えるが、驚きで僅かに目が見開かれている。

ごくごく僅かに、ではあるが。

「改めて……ルイズの連れのキュルケと申します」

「タバサ」

「タバサの使い魔、シンと申します。

先ほどは皇太子殿下の乗艦とは知らずに乗り込んでしまい、申し訳ありませんでした。

どうかご容赦ください」

自己紹介と共に、乗り込んだ無礼を詫びておく。

快活かつ開放的な性格らしき皇太子はさして気にしてもいないよう
で、笑って許してくれた。

高圧的なところが全くなく、凜としていながらどこか人懐っこさを
思わせる笑顔である。

俺は、初対面のこの王族の少年に好感を持った。

…

……

……

イーグル号の甲板。

最低限の人員を残して水夫たちが既に就寝しているため、人気は少なく閑散としている。

甲板上を軽やかに吹き抜けていく夜風が、心地よい音を立てて頬を撫でていく。

「……やあ、シン君だったね。眠れないのかな？」

「皇太子殿下……いえ、この光景を見ているとどうも時間を忘れてしまひまして」

月光に照らされて浮かび上がる雲に映し出される、その幻想的な光景。

俺は思わず手を伸ばしそうになっていた。

「ふふ、その気持ちは良く分かるよ……」

空はいい。青空には青空の、夜空には夜空の良さがある。

今日のような月の明るい夜は、特に美しいからな……」

返事が求められていないであろう言葉。

変わらず夜空を見つめる俺の隣に、皇太子が歩み寄ってくる。

どれほど時間が経っただろう。

交わす言葉もなく、俺たちはただ夜空を見つめていた。

「……アルビオンは、白の国と呼ばれている。」

高空に浮かぶ浮遊大陸であるために、手の届く所にいつも雲があ

るのだよ。

この国に生まれ育った者は皆、子供の頃から雲に触れ、雲と戯れて育つ。

そして知るのだ、雲のように、空のように、広く雄大な心と生き様を」

呟くように静かに、しかしそこには確かに慈しむような愛情を込めて、皇太子は独白する。

「…シン君、君は本当に亜人なのか？」

私には君がただの亜人には到底見えない。

主との純粋な信頼関係然り、初めて出会った時の貴族顔負けの礼節然り。

そして今のように夜空と雲を愛でる姿も…。

君の行動は人間としか思えないのに、君からは人ならざる者の力が感じられる。

シン君、君は一体…？」

おそらく興味本位であろうその問い。

敵意も警戒心も感じられず、それどころか好意をすら寄せてくれているように感じる。

俺にとつては、とても新鮮な感覚だった。

「俺は…人であることをやめさせられた存在^{モノ}。

…強いて言うなら”元人間”という所でしょっうか」

「人であることをやめさせられた…！？

そんなことがあるものなのか？一体何故…」

心底驚いているような彼。

俺に好意を寄せてくれた彼を安心させるように、俺は言葉を継いだ。

「さて、詳しい事は俺にも分かりませんが…ともあれ、この体も悪いものではありません。」

大切な主を守る力は、この体に秘められている。

…今の俺はタバサの使い魔、それ以上でも以下でもないのです」

フツと微笑むようにそう言ってやる。安心してくれというメッセージ。

「ふふ、そうか…ミス・タバサは良い使い魔を持ったようだな。」

…さて、私はそろそろ行くよ。

夜風は体に毒だ。早めに戻って休むといい。明朝にはニューカッスルに到着するだろうから」

ニコリと笑って立ち去る皇太子の背を見送り、俺はまた夜空へと視線を戻す。

幾千年も変わらず空を漂い続ける雲。

風に吹かれて姿を変えていくその様は、さながら時代の変化を暗示させるようでもあった。

皇太子の愛した国、アルビオン。

その国は、滅びゆく運命を変化させることができるだろうか。

問いかけるように月へ目をやり、俺は甲板を後にした。

side out

第十八話 友情（後書き）

言葉の要らぬ男の友情。

いっぺん描いてみたかった。

上手く表現できてるかなあ…。

でかいものを背負う男ほど、その笑顔は深い。

そんなウェールズを好きになってくれと嬉しいです。

第十九話 覚悟（前書き）

PV20万超えてました。ありがとうございます^^
感謝、感謝でございます！

第十九話 覚悟

side 人修羅

ハルケギニアへ来てからとんでもない経験は幾度もした。いや、来る前からか。

しかし、空飛ぶ島へ行ったことなどないし、空飛ぶ島の真下へ潜ることだってなかった。

「微速前進」

「微速前進、アイ・サー」

甲板の真ん中に陣取って指揮を執るウェールズ皇太子。

俺はその隣で、浮遊大陸の裏側を見上げている。

ただのゴツゴツした岩の塊が広がるだけ。

しかし、それが鍾乳洞のように下向きの棘が生えたような形になっている。

当然ながらこんなところに植物などないし、生き物だって住めないだろう。

暫く進むと、真上に大きな穴が現れた。

穴はかなり長く続いているようだが、奥にちらりと明るい所が見える。

「微速上昇」

「微速上昇、アイ・サー！」

歯切れ良く応える水夫たちの意思を汲んだかのように、船はゆっくりと上昇しはじめる。

前進も後退もせずに、だ。

何とも器用な操船であるが、そもそも帆船が空を飛んでいる時点で充分非常識なのだ。

今更垂直移動くらいでどうこう言う気は起きない。

「なるほど…大陸の裏側にこんな入り口があったんですね。

これは気づけという方が無理な話だ…」

「ふふふ、そうだろう？伊達にハルケギニア最強の空軍を有してはいないよ。

数や錬度は当然のこと、その運用法にも長け、十全に活かせる設備も有している。

最も、今はイーグル号しか残っていないのだが、な」

誇らしげに、ついで苦笑するように話すウェールズ。

素人目であるが、言うだけのことはあると俺も感じた。

「さあ、父上に会っていつてくれ。他国からの賓客だ、皆も喜ぶだろうっ！」

…

…

…

「ジェームズ陛下、お初にお目にかかります。

トリスティン王国魔法衛士隊が一、グリフォン隊隊長のワルド子爵でございます。

こちらはギーシュ・ド・グラモン、

及びルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールとその使い魔にございます。

我等三人は、アンリエッタ姫殿下よりの密命を帯びてアルビオンへやって参りました。

そちらの三人は、我等が仲間。

使者ではございませんが、この旅程に力を貸してくれた者達でございます」

「よく来たな、諸君。

我が国は内戦中である故、大した持て成しもできぬことを許して欲しい。

して、本日の用向きは？」

髭をたくわえた初老の王に、跪いたワルドが挨拶する。

優しい風貌の好々爺。

しかしその奥には、確かに王たる者の覚悟と強さが見て取れた。

「は…ウェールズ皇太子殿下へ宛てた姫様よりの書状を預かっております。

…ルイズ、あれを」

「はい…皇太子殿下、こちらでございます」

頷いたルイズが、懷から書状を取り出してウェールズに手渡す。

「ほう、可愛い従姉妹からの手紙か…ふむ、これは確かにアンのサインだな」

封に記されたサインに軽くキスをして、手紙を取り出し読み込んでいく。

どんな内容かは知らないが、彼はそれを表情に決して出さない。王族としての正しい教育がされているようだ。

ややあつて、手紙を全て読み終えたウェールズは顔を上げ、口を開いた。

「アンはかつて私に渡した品を返して欲しいと言ってきている。これがその品だ。確かに預けたぞ」

「はっ…必ずや姫様へお届けいたします」

恭しくウェールズが取り出した薄い包みを受け取り、懐へしまүүлイズ。

その様子を見て満足そうに頷いたウェールズは、振り返ってジェームズへ呼びかけた。

「陛下、トリステインよりの使者殿はこれで無事に役目の半分を果たしました。

内戦中のこの国へ入ったその勇氣はまことに見事。

今宵は家臣たちも招いて盛大に持て成しの宴を開きましょうぞ！」

「うむ！皆も喜ぶであろう！

皆のもの、宴じゃ！勇氣ある使者殿たちを盛大に持て成すのじゃ！」

破顔する親子の申し出を、俺たちはありがたく受けることにした。

…

…

…

華やかなパーティの準備に、広間は慌しい雰囲気であったが、そろそろ終わる。

料理や酒が所狭しと並べられたテーブル。

ドレス姿の女性達や正装姿の男性が集まり始めている。

ベランダから沈み行く夕日をタバサと二人で眺めつつ、俺は考え込んでいた。

「シン、タバサ。何してるの、こんなところで？」

「…ルイズか。」

いや…アルビオンの夕日をよく見ておこうと思って、な。

ここは、ウェールズ皇太子の愛した国だから…」

「綺麗」

「そう」

短く軽い声で返すルイズの顔は、しかし決して明るいものではなかった。

その様子にタバサも気づいたようで、二人とも心配そうな顔になる。

「ルイズ、元気が無いじゃないか。どうしたんだ？」

「シン…ちょっとね。」

…ねえ、どうしてこの国の人達はあるに明るい顔をしていられるの？

今にも祖国が滅んでしまうかもしれないのに…。

私、あの人達嫌いよ。皆、自分を待っていてくれる人が居るはずなのに…」

その疑問は、俺も感じてはいたのだ。

だが、俺はその答えをも感じ取っている。

直接聞いたわけではない、だがあの人達の顔を見ていれば何となく分かるのだ。

「…覚悟、ただそれだけだろう。」

命を賭けてでも、全てを捨ててでも、国を守るのだという強い意志があるんだろうな」

そう呟いた俺をキツと睨みつけるようにルイズが食ってかかる。

「覚悟があるのは分かるけど、だからって命捨てることないじゃないの！」

大切な人がいなくなるかもしれない。

そう思いながらただ待つ人の気持ちが分からないわけじゃないでしょう、シン！？」

「落ち着け、ルイズ…俺に食ってかかっても仕方無いだろう。」

それに何も、大切なものは人ばかりとは限らない。

彼らにとっては国も大切なんだろう…。

それを失いたくないから、覚悟を決めて戦おうとしている。

…俺は祖国に対する愛着を持たない人間だ。

だから彼らの気持ちは理解できない。

待ってくれている人のためにも生き延びるべきだというルイズの気持ちは分かるさ。

だがそれでも、俺は彼らを笑えないし、止めることもできない」

俺の言葉に、タバサも頷く。

「笑っても止めてもいけない」

「…！？ 笑うなっつてのは分かるけど、止めちゃダメってどういうことよタバサ！」

「彼らの覚悟は本物。それが彼らの誇り。止めるのは誇りを捨てると言っのと同じ」

「…タバサはそれでもいいって言っの？」

あの人達を待つてる人が悲しむかもしれないのよ！？」

そう言い募るルイズに、しかしタバサは戸惑ったように顔を伏せた。

「…私たちに出来ることは、無い」

その言葉になおも反論しようとしたルイズだが、タバサの言葉の正しさに気づいたのだろう。

何も言えずに、悲しげな様子に顔を伏せる。

…タバサも決して、このままでいいなどと思ってはいない。

大切な人を失った経験をしたタバサ。

彼女だからこそ、彼らを待っている者の気持ちは誰よりもよく理解

している。

しかし、何もできない。

事は一国家の内戦。俺たちはトリステインからの使者であり、それ以上でも以下でもない。

内戦にまで手を出すのはお門違いだし、内政干渉にも当たるのだ。

そう理解しているからこそ、タバサは感情と理性の二律背反の間で苦しんでいる。

重い沈黙。

しかし、その静寂を破ったのはこの場にいる人間ではなかった。

「おや君達、どうしたのかね？」

そろそろ宴が始まる。中へ入って楽しんでいってくれ」

「ウェールズ皇太子殿下……」

中にいる者達と同様に明るい笑みを浮かべる彼。

その顔に悲壮感など欠片も無く、ただ強い覚悟に裏づけされた余裕だけがあった。

あるいは、押し殺して隠しているだけかもしれないが。

不意に、ルイズが顔を上げて口を開く。

「…殿下、無礼は承知なのですが……」

「構わんよ、何でも言ってみたまえ」

「では…失礼ながら、姫様から回収を命じられた品とは……」

「…気づいていたか。そう、お察しの通りアンから私へ宛てたラブレターだよ。」

かつてラグドリアン湖で水の精霊を前に将来を誓い合った時のもの。

これが表沙汰になれば、最悪トリステインとゲルマニアの同盟は取り消しになってしまう」

「やはり姫様と皇太子殿下は…。

…殿下、どうかトリステインへ亡命なさいませ！

姫様もそうお望みなのではありませんか!？」

ルイズの必死の説得。

止めてはいけないと言った俺も、しかし彼女を止めることができなかった。

ルイズの言葉に、ウェールズは首を振ってみせる。

「…気持ちは嬉しいが、それはできない。

私はウェールズ・テューダー。このアルビオンの皇太子。

私にはこの国と民と家臣たちを命を賭けてでも守り抜く義務があるのだ」

「…守り抜くと仰いますが、しかし勝ち目はあるのですか…?」

突っ込みすぎだと思われるルイズの質問に、しかしウェールズは不快そうな顔はしない。

苦笑しながら答えてみせる。

「いや、無いな。

我が軍が三百、レコン・キスタ軍は五万。

これほど兵力差があると、策を弄しても数でもろとも踏み潰されるのが関の山だ。

もちろん正面からぶつかっても結果は同じ、まあ我等の敗北は決

定しているな」

「守り抜けないことがお分かりなら、せめて待っている人を泣かせるような真似だけは……！」

「……ミス・ヴァリエール、ありがとう。」

君の気持ちは本当に嬉しいよ。私の命と、そしてアンの心を案じてくれてありがとう。

だが、私は戦わねばならない。

守り抜けるかどうかなど、端から関係ないのだよ。

己が手で支え、守ってこそその祖国だろう。

今アルビオンを見捨てて逃げれば、私たちはもうアルビオンを『我が祖国』と呼ぶ資格を失う。

命ではない、かけがえのない『アルビオンの民の誇り』を失ってしまうのだよ。

アルビオン王国が滅び、この国がレコン・キスタの支配下に置かれるても、民は生き延びる。

その民たちにアルビオン人の誇りを忘れて欲しくないからこそ、私は戦うのだ。

皆の先陣を切って戦う私の姿を見て、皆の心に誇りという名の火を灯すためにな」

けぶるような微笑を湛えるウェールズの言葉は、俺たちの心に染みこんでいく。

これが王族、一国を背負う王族の覚悟というものか。

夕日に照らされて少し赤い彼の顔は、もしかしたら照れてもいるのかもしれない。

俺は、彼と出会い、そして言葉を交わしたことを一生誇りに思うだろう。

「さあ、アルビオン最後の宴の始まりだ！
皆、楽しんでいってくれ！」

笑ってそう言い、背を向けるウェールズ。

その背を見つめ、そして俺は覚悟を決めた。

s
i
d
e

o
u
t

第十九話 覚悟（後書き）

ウェールズカッコよすぎます。

描いてて惚れそうです。

俺が女だったら惚れてます。V i v a 自画自賛。

アホなことはさておき、また次回。

第二十話 狂気

side 人修羅

パーティは、佳境に入っていた。

笑顔で料理や酒を勧めてくる貴族達に礼を言いつつ飲み食いしていたが、皆酔ってきたようだ。

部屋の隅で壁に背を預けて眠る者、椅子に座って船を漕いでいる者もいる。

酒に強いまだ元気な者達もあつちこつちで雰囲気に取りつつ言葉を交わし、グラスを傾けている。

そこかしこで乾杯を音頭が上がる当初の賑やかさは鳴りを潜め、穏やかな雰囲気が広間を包んでいた。

「…ふう。随分飲んだが、やはりほろ酔い止まりか。

この体はアルコールにも強いらしい…」

頭がふわりとする心地よい浮遊感に身を任せながら、俺は傍らを見る。

タバサも充分飲み食いして満足したようだ。

酒が効いてきたのか、ほんのり上気したような赤い顔。俺の肩に頭を預け、タバサは静かな寝息を立てている。

「あーあーこんなところで寝ちゃって…」

タバサ…風邪引くぞ…？　　「…」

背中と膝の裏に腕を回し、そのまま華奢な体を持ち上げる。いわゆるお姫様だっこ、という奴だ。

なるべく揺らさないよう気をつけながら、割り当てられた客間へと向かう。

「ほら、寝るならここで寝ろ…」

靴だけ脱がせて、ベッドにタバサを横たえる。

隣のベッドでは、酔い潰れたキュルケも幸せそうに眠っていた。

その様子を満足げに見やると、俺はテーブルの上の紙にメモを書き残し、部屋を後にした。

” 少し出てくる。明日の午前中には戻るから心配するな。 シン ”

…

…

…

夜の城壁。

あちらこちらに歩哨が立って、物々しい雰囲気である。

「貴方は確かトリスティンからの使者殿…このようなところへ、どうなさいました？」

兵士たちのまとめ役と思しき男が声をかけてくる。

「ああ…レコン・キスタ軍が迫っていると聞いて、少し不安になっ

てね…。

敵はいつ来るかと思って、少し様子を見に来たのだが…」

「フフ、大丈夫ですよ。

距離からして、敵がここへ到達するのは明日の夕刻から夜半という所でしょう。

となると、決戦は明後日の早朝からということになりそうです」

にこりと笑って説明してくれる兵士。

もちろん、不安というのは大嘘だ。

決戦時期の推測もおそらく正しい。

重火器の無い白兵戦主体の戦争が行われている世界だと、夜襲は余程のことが無い限り行わないのだ。

真つ暗な闇に覆われた状態で乱戦になれば、最悪同士討ちすら起こるし、兵の統率も非常に取りづらくなる。

少数の精鋭部隊による奇襲を敢行するような場合でなければ、夜襲はリスクばかりが高く実益が伴わない下策なのだ。

だから、先制攻撃で主導権を得るならば早朝、夜が明けかけている時間帯を狙うのがセオリー。

寝ている敵兵が多く、それでいて暗すぎないから同士討ちの危険は大きく減る。

一番効果的な襲撃ができるのだ。

「なるほど…敵は今どの辺にいるんだ？」

「そうですねえ、西北西におよそ4〜50リーグと言ったところでしょうか」

夜は野営して朝から進軍を開始したとして、一日およそ8時間の行軍。

時速4〜5キロの進軍速度と考えれば、休憩時間も考えれば到着時刻もピタリと合う。

正確な情報と見ていいだろう。

「そうか…分かった。

では頑張ってくれ。俺は戦いには参加できないが、武運を祈る」

「ハッ！ありがとうございます！」

破顔して俺に敬礼する兵士たち。

少々面映いが、他国の使者に激励されたと思ったのか、士気向上の役には立っただけらしい。

俺は兵士たちに軽く挨拶し、城壁を後にした。

…

「…行くぞ、西北西だ。セイリュウ」

「…承知」

そして龍は、空を駆ける。

…

…

…

小高い丘の上。

満月が頭上に皓々と輝いている。

見下ろした平原には、軍の野営陣。

周りを簡単な柵で囲い、入り口の前に逆茂木を配置してある。

無数の天幕が張られ、そこかしこで松明の明かりが見える。

不寝番と思しき兵士たちが陣を縦横に歩き回り、見回りをしている
様子が見て取れる。

「…さて、始めるか…」

” 魔神アマテラス ” !」

「御前に。おんまえ 御主人様」

粛々と傳く白衣の女神。

「 ” 幻魔クー・フリーン ” !」

「呼んだか、マスター？」

槍を担いで破顔する戦士。

「 ” 龍神セイリユウ ” !」

「…応」

静かに佇む龍。

「行くぞお前ら。久々の大戦だ。おおいくさ」

存分に暴れる」

ニヤリと笑う、人修羅。

さあ、大地を血に染め上げようか。

…

…

…

丘を駆け下りつつ、命令を下す。

「俺が中央。

左翼はクー・フリーン。

右翼はアマテラス。

セイリユウは上空で竜騎士たちを優先して墜とせ」

『了解』

仲魔たちの返事に頷き返し、俺は肺に溜めた空気を一気に吐き出し、そして喉を震わせた。

（ゴオオオオオオオオウ！！！！！！）

人間の可聴範囲外の轟音が、平原を包む。

”雄叫び”。あらゆる者を竦ませる悪魔の咆哮。

体の動きが鈍り、魔力のコントロールも乱れに乱れるのだ。

（なっ、何だ今のは！？）

（体の震えが止まらんぞ…どうなってる！？）

（敵かつ！？状況を報告しろおっ！！）

”雄叫び”に三半規管を、さらに脳まで揺さぶられ、慌てて天幕を飛び出してくる兵士たち。

震えで動けない兵士を突き飛ばして逃げ出そうとする者もいる。

剣を抜いて陣の外線へ飛び出して敵襲に備えようとする者もいる。

指揮官は状況把握ができず、周りの兵士たちに怒鳴り散らすばかり。

陣は、既に大混乱を来たしていた。

「…チャンスだ。行くぞッ！！」

”デスバウンド”ッ！！」

「久々の戦がたかが人間じゃ齒ごたえに欠けるが、ま…憂さ晴らしにや丁度いいゼッ！

行くぜエ、”ベノン・ザッパ”！！」

「御主人様の敵は私の敵…わたくし容赦は致しません…御覚悟ッ！！

”プロミネンス”！！」

「熱力ロウ…今冷ヤシテヤル…！

”絶対零度”！！」

不可視の斬撃が敵を陣地ごと扇状に切り裂いていく。

疾風のような衝撃波が毒を撒き散らしながら陣を貫いていく。

灼熱の火球が弾けて爆炎が辺りを包む。

全てを拒む吹雪が、人の命を吸い取っていく。

一人一撃。

しかし、一切の手加減が無い。

神話の中にだけ語られる存在の一撃に抗えるほど、人の群れは強くはなかった。

吹き飛ばされて宙を舞う瓦礫。

かつて人だったモノの欠片が飛び散る。

残酷で幻想的なその光景を彩るは、巻き上げられた血飛沫、土煙、黒煙、蒸気。

そのステージで奏でられる音楽は、悲鳴と怨嗟。

戦いと呼ぶもおこがましい殺戮のショーの開幕。

「さあ……いい声で啼いてくれッ！！」

フ…フフフ…ッ…フフハハハハハハハッ！！！！」

月明かりを背に、狂気と歓喜に彩られた男。

残酷な笑みを顔に浮かべ。

悪魔は、哄笑する。

s i d e o u t

s i d e タバサ

夜半、まだ月も高い頃。

私はなぜか背筋に寒気を覚えて、目を覚ました。

血の匂いがする。

人の悲鳴と怨嗟が聞こえる。

大事な何かが…遠ざかっていくような不安を感じる。

「ここは…シン…どこ…？」

それは恐怖か、不安か。

窓から月明かりが差し込んでいるにも関わらず、私は目の前の闇に押しつぶされそうになった。

それらを振り払うように軽く頭を振って、そして部屋を見回す。

隣のベッドに眠るは、親友。

幸せそうな寝顔と健康的な寝息を立てている。

「ん…もう…そんなに…飲めないわよう…むにゃ…」

気の抜けたその様子に思わず笑みが浮かんでしまう。

私の不安を払ってくれた親友に心の中で礼を言いながら、私は更に部屋を見回す。

ふと見たテーブルの上に、紙切れ。何か書いてある。

それを手に取って読んだ時、私は不安の正体を知った。

s i d e o u t

第二十話 狂気（後書き）

徹底的にダークな人修羅を描いてみました。
やっぱ悪魔はこうじゃないと、ね。
ノリノリです。いやぁ楽しかった。

第二十一話（第二部最終話） 終戦

side 人修羅

「ハア…ハア…」

五万の兵力を擁する軍勢。

その野営地は夜でも人の姿が絶えない壮大なものだった。

しかし今、その野営地は見渡す限りの瓦礫と死体の山になっている。もう、悲鳴すら響かない。

死が生に、静寂が賑わいに取って代わった。

血の匂いが充満するその中で、俺はささくれ立った心を鎮めていた。

「…御主人様、見回りが終わりました。

残敵の掃討も終了してございます。

逃げおおせたものは数人にも満たないでしょう」

「…ご苦労、アマテラス」

さすがに五万の軍勢を残らず叩き潰すとなると、かなりの時間がかかる。

始めた頃には高かった月は西の空へ沈みかけており、空と大地の境界は薄っすらと明るみを帯びてきていた。

「マスター、こっちももう誰も居ないぜえ」

「此方モダ」

「クー・フリーン、セイリユウもご苦労だった。
さあ…ニューカッスルへ戻ろうか」

…

…

…

「ただいま…タバサ？」

宛がわれていた寝室へ戻った俺。

時刻は既に陽が登っている頃。

いるかと思つて覗いてみたのだが、誰もいない。

城の中は、近々攻撃してくるであろうレコン・キスタ軍に備える兵士たちで慌しく物々しい雰囲気であつた。

武器や防具の点検、兵糧の備蓄状況の確認、兵士たちの配置、城壁の破損箇所のチェック…。

籠城戦ともなるとやるべきことは多岐に渡る。

もつとも、既にレコン・キスタ軍は潰してきたからその必要もないのだが、説明に困るので俺は何も言っていない。

そのうちアルビオン軍の斥候が情報を得てくるだろう。

ともあれ、忙しく働いている兵士たちの邪魔をする気にもなれないので、ぶらぶらと城内を歩き回ってタバサを探しているのだ。

しかし、居そうな場所は全て探したはずなのだが、どこにも見当たらない。

俺を置いて先に帰ったなどということもあるまいし…。

などと考え込みながら歩いていたのだが、その思考は急に途切れることを余儀なくされた。

遠くから轟音が聞こえてきたのである。

「何だ、今の音は！？」

「敵の襲撃かつ！？」

「うろたえるな！敵がこれほど早く攻めてくるはずがない！戦の準備を続けよ！

人をやって今の音について調べさせる！皆は職務に集中せよ！」

ざわめき立つ兵士を、部隊長が声を張り上げて抑え込んでいる。

俺はそれらに構わず、音のした方向へ向けて走り出した。

……

「音源は…ここか。

礼拝堂のようだが…ッ！？」

思わず息を飲んだのは、中から濃厚な殺気の放射があったからだ。思考を戦闘用に切り替える。

奇襲に対応できるよう身構えながら中へ飛び込んだ俺を待っていたのは、想像したくもない光景。

「…ウェールズ殿下…ッ！

「ワルド子爵…一体何をッ!？」

俺が目にしたのは、ワルド子爵の魔法がウェールズ皇太子の胸を貫く光景だった。

何かの魔法だろうか、ワルド子爵が数人。おそらく分身が何かだろう。

それらと戦うサイト君、キュルケ、タバサ。
ルイズとギーシュは倒れて気絶している。

「…シン君か。見ての通りだよ。

私がルイズを手に入れるのを邪魔してくれた皇太子を、消したのさ」

「シン! ワルドは敵だったのよ! レコン・キスタの間者だったの!」

「シン…話は後。手伝って」

にやりと笑いながら言い放つ子爵。

キュルケとタバサが杖を振るいながら事情を簡潔に説明してくれた。
ワルドは敵。それで充分だ。

俺は、拳を握り締めてワルドへ向かって走った。

椅子がそこかしこにある礼拝堂。

ワルドの横に倒れているウェールズ皇太子とルイズ。

タバサやキュルケも分身体と思しきワルドと交戦中。

乱戦と言っているいい状況だ。大技を使えば皆を巻き込んでしまう。

ならば…。

(ギンッ!)

ワルドと視線を合わせ、魔力を目から叩き込む。

「む…ぐっ!？」

息を飲んだような声を上げて口元に手をやるワルド。

相手を黙らせる悪魔の視線、”クロスアイ”がうまく効いたようだ。これで、魔法は唱えられない。

既に効果が出ている魔法を止めることはできないから、分身体を消すことはできないが。

「ハッ!！」

動揺しているワルドに、踏み込んで拳を繰り出す。

ワルドはすぐさま思考を切り替えて身をかわして距離を取ろうとする。

しかし、俺の拳がそれを許さない。

次から次へと連撃を繰り出してワルドを一気に追い詰める。

避けられないタイミングで放った拳に、ワルドは反射的にレイピア状の杖を出して防御する。

当然、へし折れた。勢いに乗せてそのまま胸部へ拳を叩き込んだ。

「がっ…!」

呻き声を上げて吹き飛び、壁に叩きつけられるワルド。

手応えは充分。おそらく肋骨が折れているはず。

それでなくても衝撃で呼吸困難は確実だ。まともに動けるはずがない。

どうやら気絶したらしいワルドに念のため”シバブー”をかけ、タ

バサたちの様子を伺う。

「偏在”は消えたわ。術者の制御が利かなくなったせいでしょうね」

「こちらも」

二人とも、既に戦闘を終えていた。

俺は、二人に頷き返してウェールズに駆け寄る。

「…ウェールズ殿下！しっかりしてください！」

「…致命傷…」

「こんなに傷が深いと、水のスクウェアでも、もう…」

悲しげに目を伏せる二人を尻目に、俺は精神集中を始める。

魔力が体中から絞り出されて、空气中に舞い上がる。

緑色の無数の光球となった魔力は、弾けて周囲を満たしていく。

「…”メ・ディアラハン”…！」

部屋全体を覆っていた緑色の光は、指向性を伴って収束していく。

俺、タバサ、キュルケ、ルイズ、サイト君、ギーシュ、そしてウェールズ皇太子。

仲間全員の傷と体力を全快させる、最上級回復魔法である。

致命傷であっても、死んでさえいなければ問答無用で回復させるといふ異常な回復力。

その分魔力消費も相当大きい。レコン・キスタ軍相手に大暴れした後でこれは流石にキツかった。

「ハア…ハア…これで皆回復したはず…」

「シン…今のは何よ…？疲れが一気に消えたわよ…？」

「それは後で…ウェールズ皇太子の様子を確認してくれ…治ってるはずだから」

体力は戻っても魔力の使いすぎによる疲労感は癒せない。
息を吐きつつ壁に背を預け、そのまま座り込む。

俺の意識は、そこで途絶えた。

…

…

s i d e o u t

s i d e タバサ

シン。

私の勇者、イーヴァルディ。

私は、彼に僅かな不信感を抱いていた。
理由は、圧倒的なあの力と、血の匂い。

昨夜、置手紙だけを残して出ていったシン。

朝になって戻ってきて、ワルドと戦っていた私たちに加勢し、ワルドを一蹴。

風のスクウェアをあも簡単に倒してみせ、ウェールズの致命傷をすらあっさり治してみせる。

消耗しているようだけど、寝息は健康そのもの。

しかしどうして、こつも濃厚な血の匂いを漂わせているのだろう。

昨夜、私に内緒で一体何をしていたの…？

トリステインへ帰ったら、彼と話す必要がある。

私は、そう決意した。

side out

side ミューズ

…何故、あの男がここにいる？

私が唱えたコトワリ、静寂の世界ごと全てを否定しつつくしたあの男が。

感情の要らない静寂を望む私に恨みや憎しみなどという感情は無い。無いが、あの男が危険因子であることは私が一番良く知っている。

実際、あの男は自分と3体の悪魔とで五万の軍勢を駆逐してみせた。かつて私の配下と戦ったあの男を見た時もその力に驚愕したものだ。が、今度はそれを遥かに凌駕している。

やはり人の力も持っているだけあって、成長速度がただの悪魔とは

段違いだ。

軍の異変を察知して遠見の鏡で監視していたのだが…あの力は、強すぎる。

レコン・キスタ軍はあのたった一戦で全戦力の8割を喪失した。

軍である以上後方支援部隊が存在していたわけだが、実戦部隊は全て壊滅している。

立て直して再起を図るか、後方支援部隊を再編成して実戦投入するか…。

前者はおそらく数年単位で時間がかかる。

後者では城に籠るアルビオン軍を倒すことはできないし、それだけでなく原因不明の大打撃を受けて士気は最低、脱走者が相次いでいる始末だ。

レコン・キスタは、もうダメだな。

傍らで青い顔をして震える男を一瞥して、私はここを去ることを決めた。

…さらばだ、オリヴァー・クロムウェル。

吠えるように私の背に慰留の声を投げかけるその男を無視して、私はその場を歩き去った。

主を気取るあの男にも、警告しておかねばなるまい。

人修羅は、最優先で消せと。

s i d e o u t

第二十一話（第二部最終話） 終戦（後書き）

これにて第二部終了です。

いまいち納得のいかない終わり方になってしまいました…。

次は最終章へ入ります。

もっと上手く書けるようになりたいな。

では次回。

第二十二話（最終章 Prologue） 秘密

レコン・キスタのニューカッスル攻略軍壊滅から一月。

何者かによって引き起こされた大虐殺の跡。

アルビオン王室はレコン・キスタ軍が来ないことを疑問に思い斥候を派遣、二日後にこの事態を把握。

以後、調査が続けられたが、いくら調べても下手人は突き止められなかった。

その余りの惨状から、この事件への印象はとある二文字に収束し、それが正式名称として呼ばれるようになる。

曰く、”ニューカッスルの惨劇”と。

公式にも非公式にも多くの調査が為されている。

しかし、確実な情報は得られず、あくまで状況証拠を元にした推測のみであった。

”ニューカッスルの惨劇に関する調査報告書”

一月前に起こったレコン・キスタのニューカッスル攻略軍壊滅事件。一般に”ニューカッスルの惨劇”と称されるこの事件によって、我が軍は敗北の決定した圧倒的不利な状況下から救われた。しかし、この事件には我がアルビオン政府は一切関与していない。政府や王党派貴族に対する内偵活動でも、容疑者を特定するには至らなかった。この一ヶ月間、全力を挙げて調査したが、事件の全貌は未だ明らかになってはいない。

しかし、状況と判明している経緯を元に仮説を立てることに成功した。その詳細を以下に述べる。

まず、判明した確実な情報は以下の通りである。

- 1・住民から得られたレコン・キスタ軍の目撃情報が、ある夜を境にピタリと絶えていたこと。
- 2・惨劇現場の周辺に、他の軍が行動していた痕跡が一切見当たらなかったこと。
- 3・その場から逃げおおせた者を見つけられなかったこと。

以上の点を総合的に踏まえて浮かび上がるニューカッスルの惨劇の下手人は、以下のような特徴を備えていたと思われる。

まず第一に、その戦闘力である。上記の1から、五万の兵力を擁する軍はたった一夜で壊滅したことが分かる。その速度から考えても、スクウェアすら一蹴できる程の戦闘力及び広範囲に渡る大量破

壊を引き起こす手段を持っていたことが伺える。特に後者に関して
は、完全に破壊されたレコン・キスタ軍陣地を見ても確実であり、
特筆に価する。

第二に、軍ではなく個人ないし少数からなる組織（おそらくは1
0人以内）による犯行であることである。上記の2より、当時、惨
劇の現場の近くに別の軍が居た可能性は除外できる。軍が行動して
いれば必ず足跡が残るし、野営すれば煮炊きの跡も必ず残るからで
ある。また、それらの軍が現場へたどり着くまでに住民の目に一切
触れていない点を踏まえても、軍によって惨劇が引き起こされた可
能性は限りなく低い。痕跡を残さず行動できるほどの小勢によつて
引き起こされたと見るべきであろう。また、この点からも、数的不
利をもつともせず一方的な虐殺を行った下手人の異常な戦闘力が見
て取れる。

第三に、下手人の非合理性である。少数の手勢で大軍を壊滅せし
めたその戦闘力も常軌を逸しているが、状況を鑑みるに下手人の行
動には非合理的な点が見受けられる。つまり、レコン・キスタ軍兵
士の逃走すら許さず殺しつくしたことである。通常、少数の兵力で
多数の敵と戦うならば、その兵力差を多少なりとも補う工夫は必ず
する。これ無くして兵力差を覆すことは有り得ない。罠を用いて罠
に嵌める、陽動によつて兵力を分散させ各個撃破する、補給を絶つ
て兵力差を逆手に取るなど、いくつかの手法が考えられるが、これ
までに述べた下手人の特徴からすれば、「圧倒的实力差を見せ付け
て敵を恐怖に陥れて脱走を誘う」のが最も効率的な手法と言える。
しかし、この下手人はそれを行わず、文字通り「皆殺し」にした。
これにより、下手人にとってはただ勝利を得るためだけの戦闘では
なかった、という可能性が浮かび上がる。

以上の点は、いずれも謎に満ちたものであり、解明には更なる調
査活動と時間を必要とする。次に、これらの点を踏まえ、下手人の
動機や目的、正体についての仮説を述べる。

下手人が何者であるかは未だ不明であるが、その目的が地位や名誉ではないことは明白である。敵の逃走を許さず皆殺しにした点、事が済んだ後も名乗り出ない点から、この下手人は自分がやったと知れることを忌避していることが見て取れる。

また、軍が持っていた物資や殺された貴族の身につけていた金品が手付かずで放置されていた点から、金銭目的だったという線もあり得ない。第一、金銭を奪う対象としては、軍は最も不適当である。それならば隊商などを襲う方が遥かに効率が良く、安全でもある。

現状、レコン・キスタに対する怨恨、あるいはアルビオン政府ないし王党派関係者への協力という仮説が最も少ない矛盾で説明できるが、一方で「ならばなぜあの局面に至るまで手を出さなかったか」という疑問が残る。手を出したくなかったのか、あるいは出せない状況にあったのか。いずれにせよ、推測の域は出ない。

次に下手人の正体及び背後関係であるが、これに関しては更に情報が少ない。

アルビオン政府が関わっていない以上、もし我等の陣営に属する者の犯行であった場合は独断専行ということになるが、それほどの戦力を有していたのにこれまで手を出さなかったことは不可解の一言に尽きる。あれほどの戦力があれば名声は欲しいままにでき、謀反を企てても成功した可能性が高い。

他国の間者であったという可能性も検討したが、これも可能性は低い。我がアルビオン政府に対する支援行動を取りうる国として最も可能性が高いのは、トリステイン王国である。この点は、外交関係から言っても地理的要件から見ても異論を挟む余地はない。しかし、もしトリステイン王国であるならば、支援行動を行うことをアルビオン政府へ通達しなかった点が不可解である。非公式にであっても通達はしておいた方がアルビオン政府へ恩を売ることにもなるし、軍事力的に他国を威圧することも可能となり、隠匿するよりも

遙かにメリットが大きい。この点は、ガリア・ゲルマニア・ロマリ
ア・クルデンホルフなどの各国に関しても同様のことが言える。特
に、ガリアやゲルマニアは、我がアルビオンとの外交関係の向上を
図れる点からしても、他国に比してメリットは大きいと言える。総
じて、「国家の意向で動いたにしてはそれらしい動きが無さ過ぎる」
のである。

最後に残るのは、組織としてではなく一個人として動いたという
可能性である。しかしこのケースに関して有効な推測を行うことは
不可能と言わざるを得ない。下手人の正体（特に立場や思想）が判
明しない限り、その意図は推測することすらできない。合理性に照
らし合わせて行動の意図を読み取るにも下手人の正体に関する情報
を基盤とする必要がある上、上述した「下手人の非合理性」を無視
した推論にならざるを得ず、有力な仮説とはなり得ないのである。

この「ニューカッスルの惨劇」以降、当時レコン・キスタ軍と最
も激しく戦っていた我が軍がその下手人だと安易に考える者達によ
って、我がアルビオン王国には「虐殺」の暗い噂が付きまとうよう
になっている。

また、この件は公表していないにしても、各国政府がこの情報を
掴んでいることは確実であり、事実各国から公式非公式に事情の説
明を求める声も上がっている。当然、情報を掴んでいないアルビオ
ン政府としては「正体不明、目的も不明」としか答えられず、それ
が各国政府の不信を更に煽る結果となる悪循環を生んでいる。外部
の人間からすればアルビオン政府関係者の仕業と考えるのが最も合
理的である以上、アルビオン政府が意図したわけではないにせよ、
各国が我が国を軍事的脅威と見なすことに何ら矛盾は生じず、事実
そうなりつつある。

惨劇との関与を徹底的に否定し続けるか、あるいはこの事態を奇
貨として各国に対するアルビオンの発言力・影響力を強める方向で
動くか。どちらにしても一長一短があるが、いずれの方針を採るに

せよ、「下手人の正体及びその意図」が今後の推移の鍵を握ることは明白であり、最も重要なファクターである。何故なら、「五万の軍勢を小勢で殲滅せしめる存在がアルビオン国内に存在した」ことは確実であり、その牙がアルビオン政府に向くことが無いという保証は存在しないからである。この点に比べればこれまで述べてきた疑問や矛盾は取るに足らぬ些事であると断言する。

よって、「下手人の正体及び意図」を把握することが目下最大の課題であることを重ねて進言し、報告を締め括ることとする。

なお、事は国家の重大事である。下手人の正体は不明だが、スクウェアクラスすら足元にも及ばぬ戦力を有する点から、未確認のペインタゴンメイジないしヘキサゴンメイジである可能性、あるいは何者かに操られた幻獣の可能性、エルフである可能性も考えられる。いずれにせよこの件が露見すれば「始祖の教えに外れた悪魔を擁する国」としてアルビオン王国そのものが異端認定を受けてしまうという最悪の事態も想定しうる。

よって、この報告書を最上級機密文書に指定。

国王及び宰相以外の閲覧を禁じ、先500年間は地下書庫に封印するものとする。

第二十二話（最終章 Prologue） 秘密（後書き）

事件後の経緯の説明に報告書という形式を用いる。

いくつかのフィクションで見られる手法ですが、謎めいた雰囲気を出すにはうってつけです。

感情に訴える文より論文みたいな理性に訴える文の方が書きやすいしじっくり来ます。

その割に文がちょっとくどいかもしれないけれど。

第二十三話 悪夢

side 人修羅

闇。

見渡す限りの闇があつた。

まるで原始の時代の夜のような
ねつとりと絡みつくような。

質量を持つような、重厚な闇が。

ポタリ、ポタリと水滴の音だけが、まるで洞窟の中にいるかのよう
に響く。

俺は、ただそこに立っていた。

ここはどこだ。

俺は何故ここにいる。

頭の中で呼びかけてくるお前は誰だ。

（よくも…）

（何故殺した…）

（お前も死ね…）

体に力が入らなくなる。

悪魔共から恐れられ、常に怨嗟の声を向けられていた俺。
何故今更怨嗟の声などに惑わされるのだ。

不意に、闇がうねるように形を変えて、俺の体へと伸びてくる。罵か何かのように絡みついてくるそれ。

(…よくも…！)

(…何故殺した…ア…！)

(…お前も…死ね…ッ…！)

怨嗟の聲が、だんだんと濃く、強くなっていく。心を奥まで抉り取っていくようなその声に、俺は顔を歪める。

「…よせ…やめろ…ッ…！」

絡みついてくる闇はまたも形を変え、それは人の腕のようなものになる。

千切れた腕。折れて骨が飛び出した腕。

それらが胴から切り離されたままに、俺の体を掴み、締め上げている。

不意に目を前へ向けると、見覚えのある顔。今まで俺が殺した人間たちの顔。

顔が半分決れて脳がむき出しになった顔。

目玉が飛び出てぶら下がっている顔。

口が切り裂かれて血を流している顔。

口々に、怨嗟の声を上げている。

(…よくも…)

(…何故殺した…)

(…お前も…死ねエアアアアアアアアアッ!…)

…

「ッ…うああっ!!」

…?

…夢…だったのか…」

じつとりと汗をかいた顔と首筋。

どこか痺れたような感覚の体を探るように、俺は軽く腕を動かしてみ。

繋がれた左手をそつと右手で離れた。

肩で息をしながら俺はベッドを出て、窓から外を眺める。

「…どうしたの?」

不意に後ろからかけられた声に、俺は振り向いた。

「…起こしてしまったか…?」

「魔されてた…大丈夫?」

ベッドからこちらへ目を向けているタバサ。

その目には、こちらを気遣うような色が見て取れる。

「…ちよつと悪夢を見ただけだ…」

「悪夢は、辛いことがあった時か罪悪感を抱えている時に見るもの」

「罪悪感……？そんなものは無い。

俺は何も間違ったことなどしてないんだからな」

夢の内容を振り払おうと、つい語気を強めてしまう。

言った後に、しまったと思った。

タバサはそれに動じることなく、全てを見透かすような澄んだ目で俺を見つめている。

「……」 ニューカッスルの惨劇「……」

「ッ！？」

呟くように言うタバサの言葉について反応してしまい、俺はまた後悔した。

そう、俺は罪悪感に苛まれていたのだ。

人の心はとうに薄れていたと思っていたのに、俺は人を殺したことを後悔している。

ボルテクス界では悪魔を掃いて捨てるほど殺してきた。

その中には悪魔と化した友人も居たが、あれは悪魔だった。

俺は、ハルケギニアへ来て初めて「人を殺した」のだ。

最初は、ラ・ロシエールだったろうか。

酒場を襲ってきた傭兵達を蹴散らし、数十人を殺した。

次にニューカッスル。

仲魔と共に五万の軍勢を残らず殺し尽くした。

戦っている最中は罪悪感など感じる暇は無かったし、その後もやることは色々あったから、考えている暇など無かったのだ。

だが、こうして曲がりなりにも状況が落ち着いてくると、思い出したくもない「人を殺す感触」が手に蘇ってくるのだ。

毎晩、だんだんと悪夢は酷くなってくる。

このことは、タバサには言っていない。

気づかれてはいるが、言うわけにはいかない。

あの事件はもう魔法学院内でも噂になっている。

下手人はどれほど酷い奴だろうと散々に言われているのだ。

俺がやったなどと言えば、俺の主であるタバサまで…。

余人に知られるかどうかなどこの関係が無い。

俺は、否定していなければならないのだ。

「…やはり、貴方が…」

「ッ…違っッ!!」

「嘘。何故隠すの」

「隠してなどいない。俺はやっていない」

重ねて否定する俺の言葉にもう無駄だと悟ったようだ。

目に微かな落胆の色を浮かべてこちらを一瞥した後、顔を俯けてベツドに横になった。

…俺は、何も言えないままそれを見つめるしかなかった…。

s i d e o u t

s i d e タバサ

シンが毎晩魘されていることは知っていた。
その度に、私は彼の手を握った。

（大丈夫、貴方は一人じゃない。私が側にいるから）

そう、言い聞かせるように。

彼が魘される理由は、私には察しがついていた。

さっきの反応を見ても、”惨劇”は彼の仕業であるように思える。
彼がそれほどの力を持っているとは思わなかったけれど、あり得ないことではない。

（彼は、何故話してくれないのだろう）

初めて感じる寂しさ。

”惨劇”の下手人と知られれば私にまで嫌われるとでも思ったのか。
事が知れば私に危害が及ぶと思ったのか。

そんな心配をすることは、私を信じないと言つと同じ。

（シンは、私を信じてくれない）

溢れそうになる涙を隠すように、私はシンに背を向け、ベッドに丸
くなった。

s i d e o u t

s i d e ジョゼフ

「…よくもまあこんな機密文書を写してこれたものだな」

王の私室。

余人が入ることを堅く禁じた、俺の部屋。

俺はそこで使い魔と二人きりで密談していた。

「全く苦勞したぞ。ありとあらゆるマジックアイテムを駆使してようやくだ。」

まあ投資分の価値はあるだろうがな」

俺はミューズが手に入れてきたアルビオン王国諜報部の報告書を読みつつ、呆れたように呟く。

「しかし…アルビオンも下手人が誰かは把握していないようだな。様々な可能性が検討されているようだが、どれも根拠は無い」

「そうだろうな。奴にこれほどの力があることを知っているのは私だけだろう」

「奴…？ミューズよ、貴様下手人が誰か知っているのか！？」

使い魔の言葉に、俺は目を剥いた。

これほどの力の持ち主と、接触できるかも知れない。

この者と対峙したとき、俺は心動かされずにいられるだろうか。

奴の殺気と圧倒的な力を前に、俺は恐怖せずにいられるだろうか。命惜しんで、涙を流せるかも知れない。

そんな俺の心を知ってか知らずか、ミューズは平然と答える。

「ああ、知っている。遠見の鏡で見ていたからな。
奴の名は『間雑シン』、悪魔の力を宿した人間……」ひとしゅう「人修羅」だ」

「……その者について詳しく調べよ、ミューズ。
金も人も好きなだけ使え！一刻も早くこの者の素性を調べ上げるのだ！」

俺は笑い出しそうなほどの歓喜を抑えられずにいた。

早く会いたい。

会ってその殺気を体中に浴びてみたい。

俺はどのようにしてお前を殺そう。

お前はどのようにして俺を殺してくれるのだ？

何度も、何度でも、俺はお前を殺したい。

何度も、何度でも、俺はお前に殺されたい。

お前はきつと、殺気を込めた一撃で俺を傷つけてくれるだろう。

死ぬほどの痛みを味わわせてくれるだろう。

お前はきつと、首を刎ねられてもなお殺気を込めた視線で俺を睨みつけてくれるだろう。

震え上がるほどの恐怖を味わわせてくれるだろう。

お前はきつと、目を抉られてもなお殺気を込めた念で俺を呪ってくれるだろう。

そんなお前であれば。

俺を泣かせてくれるのだろうか？間雑シンよ……！

「フツ……フツフツ……フフハハハハハハハハ……！」

退出していく使い魔の背に、俺は期待を抑えられなかった。

s
i
d
e

o
u
t

第二十三話 悪夢（後書き）

今回はダークな描写に終始しました。

どこか自分を狂わせないとこんな描いてられない。
が、堕ちるとここまで堕ちたら戻ってこれなくなりそう。

その辺のさじ加減も描いてて面白いトコなんですけどね。
そんなわけで、また次回。

第二十四話 離間

side タバサ

穏やかな朝。

私は早くに目覚め、特にすることもなく窓から外を眺めていた。

朝日が差し込み、心地よい風が頬を撫でる。

歌うように響く鳥の声が、朝日を言祝いでいるようにすら思える。

爽やかな朝。

しかし、私の心はそれを素直に喜べなかった。

昨夜のことが、まだ心の奥に棘のように引っかかっているから。

起きた時にはシンは部屋に居なかった。

どこへ行ったのだろうかとは思ったが、あんなことがあったためか、探す気にはなれなかった。

シンとの関係がギスギスし始めている。

けれど、主人と使い魔という関係だけは生涯変わらない。

この不安定な関係をいつまで抱え込むことになるのだろうか。

それを考えると、心が重くなった。

それを振り払うように、着替えようと踵を返しかけたその時、空の向こうに黒い点が見えた。

(…あれは…梟?)

こちらへ真っ直ぐ向かってくる。

どうやらこの部屋を目指しているらしい。
で、あれば…。

(…指令…)

不意に、重かった心がさらに冷たくなっていくのを感じる。
目から感情の光が消えていくのを感じる。

私はその梟を睨みつけるように、こちらへ飛んでくるのを待った。

……

……

…

(…“惨劇”の下手人の調査…)

それがジョゼフからの指令であった。

イザベラを介さず下された、ジョゼフからの直接命令。

どういふことかは分からないが、その指令書を読み込んでいく。

”惨劇の下手人を調査せよ”

”素性や正体までは分からなくてもいい、手がかりの一つも増えれば上々”

”こちらで掴んでいる特徴を併記しておくのでこれを手がかりに調査すべし”

曰く…

” 下手人は四人組”

” 一人は白衣の女”

” 一人は槍を持った男”

” 一頭は青い鱗に枝分かれした角を持つ蛇”

” 一人は体に刺青の入った15〜7歳くらいの少年”

それを読んだ時、タバサの心は凍りついた。

心当たりがあるどころの話ではなかったから。

しかもそれを自分に言ってくるという事は…

（ジョゼフは、シンが下手人であること、シンが私の使い魔であることを知っている…？）

仮にそうだとして、それを自分にほめかしてくる以上、何か意図があるはず。

殺せというのか、あるいは差し出せというのか。

どちらかは分からないが、しかし直接そう言ってこないのが気になる。

ジョゼフは、自分に対して絶対的な命令権を持っている。

母を人質に取られている以上、逆らうことができない。

状況は、一気に切羽詰ってしまった。

（ジョゼフには逆らえない。けどシンを売るわけにもいかない）

もつと言えば、わざと指令に失敗するということもできないのだ。

失敗すれば、それに対する罰として母に危害が加えられることも考えられる。

シンが下手人だと向こうが気づいている以上、嘘を報告しても同じ

結果に終わる。

逃げ道を完全に塞がれた状態で、ジョゼフは自分に『シンを売れ』
と言ってきているのだ。

「…どうすれば…いいの…？」

声が震えていることが分かる。

寒くもないのに体まで震えている。

泣き出したくなるような状況。

大切な人達が失われてしまうかも知れない恐怖。

「…私が、守るしかない」

震える自分を叱咤して、睨みつけるように顔を上げる。

タバサは何をするでもなく、沈思黙考を始めた。

大切な人を救う方法は無いか。

あらゆる可能性を細部まで検討する彼女の頭脳は、今、それまでの
人生で最も速く回転していた。

side out

side ジョゼフ

「…ミューズ、手筈は整えてあるか」

「ああ、既に指令は送つてある。

お前の姪は聡明な娘のようだからな、あの内容ならば此方の意図は察するだろう」

「お前の世界ではこれを『離間の計』と呼ぶのだったか。シャルロットはどう対応すると思う？」

「…さあな。私はその娘を伝聞でしか知らん。が、普通に考えれば人修羅を売るだろう。

メイジが生きていれば使い魔は替えが利くが、母はそうはいかん。いずれかを差し出さねばならんのだ…それが合理的な判断だろう」

ジョゼフの顔には面白がつている色が浮かんでいる。

一方、氷川は何も感じていないように無表情であった。

「人間を思い通りに操るのは簡単ではない。

しかし、追い詰めてやればやるほどそれは容易になる。

追い詰めるとは、つまり選択肢を減らしてやること。

あの娘は今、母を売るか使い魔を売るかの二択を迫られている。

人修羅が自分が売られたと気づいた時にどうするかは知らん。

が、どう転ぼうがやりやすくなる」

「ククッ…ああ、そうだな。

こうしておけば人修羅とやらの俺に対する憎悪は一層強くなるだろう。

これでいい…ああ、待ち遠しくてたまらぬわ！」

笑うジョゼフを見る氷川。

無表情にしか見えないその顔に微かに不快そうな色が浮かんでいる

のに気づける者はそう多くない。

（姪に無理な二択を押し付けて喜ぶ伯父など他に例があるまい……）

やはりこの男は、破綻している。

最も、その破綻者に付き従って年端もいかぬ少女を苦しめて何も感じない私も同様だが。

このような破綻者に支配される国。

魔法という力に溺れ、6000年続いた特権という毒に溺れた貴族達。

ブリミルの名の下に世の権力者達を洗脳する教皇庁。

それらに反旗を翻す力すら持てず地に伏せる平民たち。

この国もまた、破綻しているのだ。

（ガリア受胎：準備が必要かも知れぬ）

呵呵大笑するジョゼフの声をBGMに、氷川は沈黙考した。

s i d e o u t

第二十四話 離間（後書き）

ちょっと短いですね。申し訳ない。

では、また次回。

第二十五話 選択

side 人修羅

俺は、悩んだ。

悩んで、悩んで、悩み抜いた。

タバサに言われた言葉が棘のように心から抜けなかったからだ。

（噓。何故隠すの）

何故…。

それは、虐殺者の汚名をタバサにまで届かせないため。

しかし、それは欺瞞なのではないかという気持ちもあったのだ。

タバサの口ぶりから、十中八九俺が惨劇の下手人だと気づいている。気づいた上で、俺がそれで苦悩しているのを察した上で、俺に聞いてきた。

（彼女は、俺に正直に話して欲しかったのではないか）

あの時は焦っていてそこまで気が回らなかったが…

もし、逆の立場なら？

もしタバサが惨劇を引き起こしていて、それを必死になって隠されたら？

俺は責める気にはならないが、寂しくは感じるだろう。

それが、あんな境遇にあったタバサであれば尚更だ。

俺は、タバサから聞いた彼女の過去を思い出していた。

父を殺された。

母は心を壊された。

人形を娘と思い込み、実の娘を刺客と思い込んで、タバサは罵声を、物を、投げつけられた。

泣く気力すら湧かないままに修羅場に放り込まれ、訳も分からないまま命を賭け続けてきた。

誰も、何も、信じられないままに。

そして、彼女は俺を召喚した。

それは、彼女にとっての転機であり、運命の転換点。

そう思うのは、俺の自惚れだろうか。

そんなことを思いつつ、右手を眺める。

”イーヴァルディ”

俺には読めない字だが、ハルケギニアの御伽噺に出てくる勇者の名なのだそうだ。

（俺が勇者、か…悪魔の力を宿した俺が…）

正直、俺には重過ぎるルーン。

しかし、俺を勇者と呼び、助けて欲しいと頼ってくれたタバサを思えば、嬉しいものでもあった。

（俺は、タバサにとっての”勇者”たりうるのか）

”惨劇”を引き起こした張本人。

悪魔を従える悪魔。

人の形をした修羅。

とてもじゃないが”勇者”なんて柄じゃない。

俺は、タバサにとっての”勇者”たりえない…。

そこまで考え、ふとその言葉を反芻する。

「タバサにとっての、”勇者”…」

俺は、何か勘違いしていたのかも知れない。

”タバサにとっての勇者”と、”世間一般における勇者”。
その二つが、必ずしも同一とは限らないのではないか。

タバサのために己を鼓舞し、勇気を奮う。

その姿を以って、タバサの勇気を呼び起こす。

それができるなら、俺でも”タバサの勇者”たりえるのではないか。

（俺は、”君の勇者”になれたかい？）

タバサに、そう聞いてみよう。

勇気を奮って全てを話し、タバサの勇気を呼び起こせるか、やってみよう。

自分を見限るのは、それからでも遅くない。

「行こう…タバサのところへ」

顔が幾分か明るくなったことを自覚しながら、俺は踵を返した。

s i d e o u t

side タバサ

私は、悩んだ。

悩んで、悩んで、悩み抜いた。

無理な二択を迫られて、どちらも選べなかったから。

（シンとお母様と、どちらも失うことなんてできない）

どちらも私にとっては掛け替えのない存在。

シンは私を信じてくれないように感じるけれど、それでもやっぱり私の使い魔。

まだ短い付き合い。

けれど彼が信頼に足ることは充分分かってるし、彼自身にも好感を持っている。

お母様は私を忘れてしまっているけれど、それでもやっぱり私の母。罵声を浴びせられ、物を投げつけられ。

それでも私のたった一人の母で、私は母を誰より愛している。

どちらも、失うなんて考えられない存在。

シンか、母か。

どちらかを選べば、どちらかを失う。

どちらも失わない方法…一つだけあった。

私は、それに気づいてしまった。

リスクは、高い。

途方もなく大きい。

シンも母も失わずに済む代わりに、私は大きな物を失うことになる。
正直、怖い。

怖くて悲しくて、想像するだけで手が震えた。

けれど、それを犠牲にしても、私は二人を選ぶ。
シンにも、母にも、生きて笑っていて欲しいから。

そのためなら…何を失っても構わない。

私はそう決意した。

不思議と、決意を固めたせいか、手の震えが止まる。

私はふと微笑んで、自分に言い聞かせるように呟いた。

「行く…二人を救いに」

目に覚悟の光が宿るのを自覚しながら、私は踵を返した。

s i d e o u t

第二十五話 選択（後書き）

トイ・ストーリー3 見てきました、3Dメガネかけてぶつちやけアレなくていいなあ、2Dで見たかった。何か目が疲れる割にそんな凄く感じない。

第二十六話 搜索

side 人修羅

タバサに、全てを話そう。

そう決めた俺は、女子寮の廊下を足早に歩いていた。
時刻は既に夜。

静まり返った廊下が、壁に所々設置された燭台に照らし出されている。

まだ起きている者もいるようで、部屋から押し殺したような笑い声が聞こえてきている。

タバサの部屋の前までたどり着いた俺は、目を閉じて軽く氣息を整える。

ノックをして、ドアを開けた。

「…タバサ？ 俺だけど…あれ？」

部屋には、誰も居ない。

様子を見ると、ちよつと席を外しただけのようにも見える。
タイミングを外されて肩透かしを食らったような感覚。

「…朝まで待つか…」

いずれ帰って来るだろう。

そう思った俺は、氣を取り直して彼女を待つことにした。

…

……

………

「…遅い」

そのうち帰ってくるだろうと思って待つうちに、夜が明けてしまっていた。

まさか、タバサの身に何かあったのか？

そう思って、俺は友人たちに聞きこんでみることにした。

「…何よ朝っぱらから…タバサあ？

見てないわよ…サイトお、アンタ知ってる…？ …知らないって」

「…おはよう、シン…朝からどうしたんだい…？

タバサ？ いや、見ていないな…心当たりも無いが…いないのかい？」

ルイズもギーシュも知らないという。

キュルケなら何か知っているだろうか…。

「…ふわぁ…こんな朝早くにどうしたのよ、シン…夜這いするには遅すぎるわよ…？」

え、タバサ？ いないの？ いつから？」

眠そうな目で冗談を飛ばしてくるキュルケに事情を話して、何か知らないか尋ねる。

「昨日の夜から…ね。遠出の準備をした形跡は無いのに一晩戻ってこなかった、と」

「ああ…何か嫌な予感がしてな。タバサが行きそうな場所に心当たりは無いかな？」

「うーん…前からたまに二、三日部屋を開けることはあったわ。けど最近はそれも少なかったし、どこへ行ってるのかは私も知らないのよね。」

梟が届ける手紙を見て出かけていくようなんだけど。

一度、その手紙が来る時に居合わせたことがあったから覚えてるわ。

急に真剣な目つきになって、『急用ができた』って学院を出て行くの。

聞いても詳しいことを言おうとしないから私も聞かずに置いたんだけどね」

そこまで聞いた俺は、キュルケに礼を言ってタバサの部屋へ戻った。これ以上有益な情報は無さそうだったから。

…

部屋の窓から外を眺めて、俺は途方に暮れていた。

タバサを探そうにも、学院内にいないのは間違いない。

向かった先の手がかりが無い以上、探す当ても無いのだ。

セイリユウを使っていない以上馬か徒歩で出て行っただけ。

だが、時間経過を考えればもう結構な距離を稼いでいるだろう。しらみつぶしに探せる面積ではない。

「…考えていても仕方無いな」

俺は踵を返して、聞き込みを更に広げることにした。

…

……

……

学院で働くメイドや正門を守る守衛、厩舎の職員に聞き込んだ所、新たにいくつか分かったことがあった。

タバサは昨夜早いうちに、人目を避けるように学院を出て行ったらしい。

馬は使わず徒歩で、近くの林へと姿を消したそうだ。
守衛もメイドも、何か事情があることを察して声をかけたりはしなかったという。

まだそこにいるとは思えないが、何か手がかりが見つかるかも知れない。

俺は、その後を追うことにした。

…

……

誰もいない林。

まだ朝も早く閑散とした林。

鬱葱と呼ぶには明るすぎるが、一方で開放的と呼ぶには木々が茂りすぎている場所だった。

ひんやりした朝の空気が肌に心地よく、響く鳥の声が微笑ましい。だが、そんなものに和んでいる場合ではなかった。

「何だこいつは…ゴーレムか？」

不意に茂みの奥から現れた人形。

明らかに人工物で、かつ生きているはずもない無機物であることも確か。

ゴーレムかと思ったが、それにしても動きが精巧である。

こちらを襲ってくる雰囲気もなく、暫く様子を見ていたのだが…

『聞こえるかね、人修羅』

不意に、ゴーレムから聞き覚えのある声がある。

俺は、驚いていた。

ゴーレムが喋ったことにはない、俺を『人修羅』と呼んだからだ。その呼び名を知っているハルケギニア人は多くない。

一緒に旅をしたルイズ達でさえ知らないことなのだ。

「…何者だ」

『私の声を忘れたか？ 静寂しじくのコトワリを見事に否定してくれたではないか』

「ッ…氷川か！？ 何故貴様がここにいる！？」

このゴーレムは何だ！？隠れていないで姿を現したらどうだッ！
」

『私も君と同様、使い魔として呼び出されたのだよ…』

これはゴーレムではなくガーゴイル。魔法仕掛けの人形だ。
姿を現すことはできない。私は今ガリアにいるからな。ガーゴイルを介して声だけを届けている。

…が、そんなことはどうでもいい。

君は主を探しているのだろうか？あの蒼い髪の少女を』

律儀にもこちらの質問に全て答える氷川。

相変わらず伶俐だがどこかマイペースでいけ好かない男である。

「貴様：タバサをどこへやった！？」

『タバサ？シャルロット姫のことか、陳腐な偽名だな…』

さあ、どこにいるかな。

私には分からないが、ガリアへ来れば会えるような気がするぞ？
フフ…』

「ガリアの何処だ！？貴様、何を企んでいる！？」

ゴーレムを攻撃する態勢を整えて、俺はさらに聞く。

『ガリアのオルレアン邸。ラグドリアン湖のガリア側の湖畔に位置する屋敷だ。』

企みなど見え透いているだろう？君を招待するためだよ』

それだけ聞けば十分だ。

この程度の危険は幾度も経験しているのだから。

「いいだろう…すぐに向かつてやる。」

…言っておくが、タバサには絶対に手を出すな。
彼女の身に何かあったら、お前が恐れた俺の力は、どう暴走するか分からんぞ」

そっつい捨てて、俺はセイリユウを召喚して飛び乗った。

「行けッ！南のラグドリアン湖へ向かうんだ！」

事情を把握したのか、セイリユウは返事をする間も惜しんで全速力で飛んでくれた。

「…待ってろ、タバサ…！」

s i d e o u t

s i d e ミューズ

…相変わらず火の玉みたいな少年だ。

すぐに熱くなるところは変わっていないな。

ああいうタイプは扱いやすい。

しかし、人質を取るなどという陳腐な手を使う羽目になるとはな…
不本意だ。

とはいえ、効果が高いからこそよく使われるのだ。
よく使われるからこそ陳腐と呼ばれるようになる。

「簡単なものだ。

…シャルロット姫、君の騎士様はすぐに来るそうだよ」
ナイト

嘲笑を浮かべて見やった先には、猿轡を噛まされて拘束された蒼い髪
の少女。

その目には苦渋の色が濃く浮かんでいた。

s i d e o u t

第二十七話 潜入

この世に、時間ほど残酷なものがあろうか。

悪夢のような苦しみを味わう時も。

夢と見紛うような至福の時も。

常に、時計は無情に時を刻む。

決まった速さで、淡々と。

しかし、常に時間とは相容れない”何か”を望むのは人の性。

”どうか愛する人と共有する時が、永遠ならんことを”

”この悪夢のような時間が、一秒も早く終わりますように”

”運命の選択を間違えたあの時へ帰りたい”

”待ち遠しい未来図を早くこの目で見てみたい”

この世に溢れた”時”への願い。

”時”は、それを決して拒絶しない。

ただ、無視するだけである。

しかし、時の流れに”IF”^{もしも}を願うことができるのは、人だけである。

side タバサ

私は、ただひたすらに願った。
”来ないで”と。

シンがここへ来てしまえば、私の願いは全て水泡に帰してしまう。
手首にきつく結ばれた荒縄の痛みも、口を封じる猿轡の苦しさも、
今はどうでも良かった。

（シンが、ここへ来てしまう）

私は、母様もシンも失うわけにいかない。

二人を失った未来など、私にとっては地獄と同じ。

それを見ずに済むのなら、私はどんな代償も支払う。

そう、私の”命”でさえも。

それが私の選択。

私の命を代価に、二人の助命と今後の不干渉を願った。

勝ち目の薄い、賭けと呼ぶのもおかましい選択。

けれど、確実にどちらかを失うよりは余程いいはずだった。

そして、私は負けたのだ。

命を切り札にした私の願いは、しかし嘲笑で迎えられ、私はそのまま囚われてしまった。

氷川というこの男は、私の命を囗としてシンを誘き出した。
シンは今、此方へ向かっているらしい。

来てはならない。

事此処に至れば、私の願いはもう叶わない。

母様も、私自身も、既に敵の手の内。

この上シンまで敵の手に落とすわけにはいかないのだ。

思えば、私は逆上していたのかも知れない。

勝ち目の薄い賭けだとは分かっていても、それ以外無いと思ってしまった。

他にやりようは無かったのか。

私の選択は何をもたらしただただシンの足枷になってしまっただけではなにか。

私は自分の馬鹿さ加減を今更になって思い知っていた。

”お願い、来ないで。私を助けようなんて思ってはダメ。逃げて……！”

身動きも取れず、口も封じられ。

叫ぶことすら叶わぬその願いがシンへ届くことを、私はただ祈り続けた。

s i d e o u t

s i d e 人修羅

目を向けたその館は、奇妙な程に静まり返っていた。

時刻は夜。

向こう岸が見えないほど巨大な湖の側に、その館は静かに佇んでいた。

森から聞こえる、木々の囁き。

湖から聞こえる、水のせせらぎ。

月光に照らし出されたステージで奏でられる合奏。しかし、今の俺にそれを楽しむ余裕など無かった。

館の周りには猫の子一匹見当たらず、奇妙なほどに静まり返っている。

しかし、だからといって誰も居ないと思い込むほど馬鹿ではないつもりだった。

「エストマ 気配遮断魔法」

自分の気配を消し去る魔法。

その瞬間を目にした者がいれば、シンが急に消えたように見えただろう。

気配を遮断する不可視のシールドが張られた今の彼の存在に気づけるのは、彼以上の力を持った者だけである。

タバサは既に敵の手の内にある。

である以上、”誘引魔法”リベラムを併用した陽動を使うことはできない。騒ぎを起こした時点でタバサが害される可能性があるからだ。

そもそも、真っ向から行ってもタバサを盾にされればどうしようもない。

ならば、気配を消して忍び込み、奇襲をかけてタバサを解放する以外に手は無い。

魔法の効果が現れたことを確認した俺は、足音を立てないように館へ駆け寄る。

しかし、正面玄関のドアには手をかけない。

どこの世界に真正面から忍び込む馬鹿がいるだろうか。

陽動した上でならそれもアリだが、そうでないなら敵もここを一番ケアするのだから、ここから入る手は無い。

一階の窓はどれも締め切られている。

が、見れば二階には少しだけ開いた窓があった。

「…よっ」

近くの木の枝に飛び乗って、そこから壁へ飛び移る。

片手で掴める程度の取っ掛けがあれば、この程度の芸当は可能だ。窓の隙間を覗き込み、人の気配が無いことを確認した俺は、そっと窓を開いて体を滑り込ませた。

（…潜入は成功）

俺は、廊下の所々に置かれている遮蔽物に身を隠しつつ、各部屋の気配を探りながらタバサを探した。

…

…

…

微かに人の気配がしたその部屋。

しかし、その気配が今は消えている。

（…何かいる。俺の存在にも気づかれたと見るべきだな）

静かに、声を上げさせることなく拘束する必要がある。

俺はそっとドアに手をかけつつ、目に魔力を集めた。

だが、そこに声がかかる。

「…お入り下さい」

「ッ!？」

「敵ではありません。私はシャルロット様の執事、ペルスラン。貴方のことはシャルロット様から伺っています」

…余人に気取られないように抑えられたその声と内容からして、どうやら敵意は薄そうだ。

とはいえ、まだ信用はできない。

俺はそつと室内に踏み込んで、ドアを静かに閉めた。

部屋の中央に置かれたテーブル。

椅子に腰掛けて燭台の明かりを頼りに本を開いている初老の男が、そこにいた。

すっかり白髪に制圧された髪は綺麗に整えられ、左目の片眼鏡が蠟燭の明かりに煌いている。
モノクル

正装ではなく寝巻きであることだけが、今が勤務時間外であることを示していた。

「シャルロット様の使い魔、シン様ですね？」

「…そうだ」

「そう警戒なさらないください。事情は把握しております。…シャルロット様はご無事ですよ。」

手足と口を拘束されてはありますが、湖に面した部屋に…」

静かに語るその声には、何の色も見えない。

ただ、この状況を前に必死に感情を殺しているのだろうと、誰に教わるでもなく感じ取れた。

「…氷川もそこにいるのか？」

「あの男は夕刻、館を出ました。
ただし、見張りを残しています」

「…解せないな。奴はタバサを盾に俺を誘き出した。
なのに俺に手を出さずに去るとは…」

「…その見張りが手練れなのです。
おかげで、私も隙を伺っていましたが、手を出せませんでした。
…エルフです」

…静かに、しかし吐き捨てるように呟く彼。
主を人質に取られたのに何もできない自分を嘆く無念の色が見て取れた。

「俺はエルフを知らんが、それほどまでに強いのか」

「エルフの使う先住魔法は威力も凄まじいですが、何より厄介なのがその堅い守り。」

カウンター

”反射”と呼ばれる防壁は、魔法も物理攻撃も通しません。

その土地の精霊と契約して自然を操るのがエルフの魔法。

見知らぬ土地ではその真価を発揮できませんが、奴は既にこの地の精霊との契約を終えている。

あの男を下せるほどのメイジはおそらくハルケギニア中を探しても数人とおりますまい」

「…いい情報を貰った。これで対策が打てる」

薄っすらと笑ってそう答える俺を、彼は驚愕の目で見やった。

「…エルフの”^{カウンター}反射”を打ち破る手があると…!？」

「ああ、守りが堅いならその守りに穴を作って打ち崩すだけのことだ」

彼は、そう言い放って不敵に笑った。

s i d e o u t

第二十七話 潜入（後書き）

お盆休みが終わって、更新再開しました。

ちよつと間が開いたので勘が鈍ってないかちよつと心配です。

あと、前後の矛盾が起きていないかもちよつと心配です。

気づいても黙っててやってください（待て

ではまた次回。

第二十八話 切札

side 人修羅

息を潜めて、気配を探る。

どうあっても敵に気取られる訳にはいかないのだ。

突入して先手を打つ。

不意の一撃で、沈める。

ただし、それにも対応されてしまう可能性がある。

それを計算に入れてなお敵の上に行く必要があるのだ。

出来るだけ静かに、仲魔を召喚する。

口の前に人差し指を立てて、声を出さずに沈黙を命令。

その後、軽く指を動かして動き方を指示。

あらかじめ指話の符丁は決めてあるから、ある程度の指示はこれで可能。

あとはその場の状況でやるべきことは理解してくれる。

彼らも、俺の中から見ていたから事情は全て把握している。

指示に従い、音を立てずにその場を離れていく彼らを見送り、俺は睨むようにドアに目をやった。

右手に意識を集中し、力を集めて、収束。

(…さあ、タバサを返してもらおうか)

：

仲魔の準備が整うまでの数十秒を待ち、俺はドアを蹴破って中へ走り込む。

「貴様……」

長い耳に長い金髪の男が此方を睨んでいる。

俺の存在に気づいていたようだ。

タバサが奥の窓の下に転がされているのを確認。

男が何か言おうとするが、待ってやる義理などない。

「ジャツ！！」

右手の人差し指から、糸のように細い光の針が飛んだ。

本来はこの数百倍は大きい光弾になる。

万能属性、”至高の魔弾”。俺の切札である。

その特徴は、確実性。

ダメージを軽減させる手段はあっても、完全に防ぐ術は無い。

物理攻撃技の一種だが、”物理反射魔法”^{テトラカン}でもこの一撃は防げない。防ぐ術が無い、故に”万能”属性なのだ。

「無駄だ」

恐らくペルスランが指したエルフであろう男が言い放つが、そんなものに構う余裕は無い。

金属と金属がぶつかるような甲高い音が響く。

見れば、至高の魔弾は光の壁のようなものに止められていた。

互いに互いを押し合い、そして光弾は弾けた。

ダメだったか。
ならば次の手だ。

「今だッ！！！」

俺の咆哮に応えるように、窓ガラスが割れて二つの影が飛び込んでくる。

アマテラスが床に転がっているタバサに取り付き、抱え上げる。
それを守るように立ちはだかるクー・フリーンがエルフの男に槍を向けて構える。

「行け！」

アマテラスに、セイリユウに乗ってタバサを逃がせと命令。
それを遮るように、エルフの意思が世界に作用した。

「風よ…我が意に従え」

アマテラスとタバサの乗るセイリユウが飛び去ろうとしている所に、
強風が吹き荒れる。

男の妨害に舌打ちを一つくれて、俺は男に殴りかかる。

タイミングを同じくして、クー・フリーンも豪槍の一撃を繰り出した。

「無駄だと分からないか？」

嘲笑うような男の声に構わず、俺たちは何度も何度も光の壁に攻撃を仕掛け続ける。

俺は男に攻撃を仕掛けつつ、窓の外へと視線を送った。

…狙い通り、やはり外の強風は弱まっている。

少々ふらつきながらも無事にその場を離脱したセイリユウを見送り、俺は攻撃を一端中止する。

軽く男から距離を取って、見やった。

「タバサは無事に逃がした。後は…お前を始末するだけだ」

「成程、無駄と知りつつ攻撃してきたのは私の気を逸らすためか。中々良い連携だ。

しかし…このビダーシャルを始末するとは…大きく出たものだ。見ればどちらも蛮族ではないようだな、大きな力を感じる。しかし、大いなる意思の加護の下にある私には敵わぬ」

「ならばその加護とやらを消し去れば済む話だな。

ランダムイザ
…”抽出魔法”！」

ランダムイズ
”randomize”。「無作為に抽出する」の意。

本来は統計学の用語。

統計結果の妥当性を高めるためにデータを無作為に抽出する行為、その英語名である。

しかし、悪魔の魔法における無作為抽出の対象とは、「あらゆる力」。

敵が何であろうとも、どんな力を持っていようと、強制的に、例外なく、力を「抜き取る」。

ランダムイザ
故に、”randomizer”。

強者を強制的に弱者へと変貌させる魔法。

伝説の中にのみ存在する者達が掃いて捨てる程いるボルテクス界においてさえ、伝説の域にある。

つまり、伝説すらも陳腐化させるといふ”伝説”。俺の切札である。

ビダーシャルと名乗るこの男はエルフ。

ペルスランの話からすれば、その地の精霊と契約を交わして魔法を行使するものらしい。

精霊と呼ばれる存在はボルテクス界にも存在した。

すなわち火の「フレイミーズ」、水の「アクアンズ」、風の「エアロス」、土の「アーシーズ」。

力と言えば下の中から下の上程度。

上の上と呼べる存在の力すら易々と削り取る”リンドマイザ抽出魔法”に抗えるはずもないのだ。

「な…力が抜けていく!？」

いや…これはッ!

精霊との契約が…断ち切られている!？」

驚愕に目を剥くビダーシャル。

他人に精霊との契約を断ち切られるなど、初めての経験だろう。

当然だ、これはハルケギニアに存在しない魔法なのだから。

「貴様…何をした!？」

「何を?おかしなことを聞くんだな。

今お前が自分で言っただろう、『精霊との契約が断ち切られている』って。

それをやったに決まっているだろうが」

精霊との契約に限らず、人外の存在から力を借りる契約は、概ね似たようなものだ。

即ち、己が力を人外の存在に知らしめ、力を貸すに足ると思わせるのだ。

悪魔を仲魔にする契約もそれに該当する。

ビダーシャルの言う契約は、つまり精霊の隷属の一形態。

伝承の中には「神や精霊や妖怪が人に力を貸した」というエピソードもあるが、あれは契約ではない。
隷属ではないし、一度限りのもの。

人外の存在の”気まぐれ”によってごく稀に生じる状況の産物である。

その証拠に、人外の機嫌を損ねて最後には殺されたり不幸にされたりするというオチはありがちなのだ。

ともあれ、自分の力を知らしめて精霊を隷属させている以上、”自分の力”を抜き取ってやれば契約は破棄。
子供でも分かる理屈である。

「貴様：一体何：」

その言葉はしかし、最後まで口にされることは無かった。
彼の首は既に胴から離れていたのだ。

「何者：か。答えてやる理由はないな」

返り血を浴びないように距離を取って、崩れ落ちる首の無い体を見る。
やる。

一言呟いて、俺はクー・フリーンと共にその部屋を後にした。

s i d e o u t

第二十八話 切札（後書き）

また更新に少々間が開きました。申し訳ない。
ともあれ、無事に更新できて良かったです。

ビダーシャルさん、ご愁傷様。

あんまり見所作ってあげられなくてごめんね。

人修羅強すぎて、強敵を描けません。

己の力の無さが恨めしい。

では、また次回。

第二十九話 真意

side タバサ

セイリユウの背に乘せられた私は、暫く声を出すこともできなかった。

目立たぬよう、それでいてかなりのスピードで飛ぶセイリユウ。

私を後ろから抱きしめるように支える白衣の女は、警戒するように視線をあちこちに飛ばしている。

彼女は確か、アマテラス。シンの仲間だったはず。

白磁のようなきめ細かい肌をした手でそっと包むように私の口を押さえているその動作は、声を出すなという彼女の意思を言外に伝えていた。

恐怖と夜風に震えることを覚悟していた私だが、後頭部に感じる彼女のふくよかな胸から伝わる暖かさに、私は安堵した。

どこかに置き忘れてきたような母の温もりを思い出したのだ。

「……ここまで来れば大丈夫でしょう。」

セイリユウ、私たちをどこか目立たない場所に降ろしてください。私とタバサ様はそこで御主人様達を待ちます。貴方はお二人を迎えに行ってください。

もう決着はついているでしょうから」

「…承知」

低く答えたセイリユウは、近くの林に降下する。

アマテラスは私を抱きかかえたまま、セイリユウの背を降りる。

セイリユウはすぐさま舞い上がり、屋敷の方角へと飛び去っていった。

た。

それを見送ったアマテラスは、私の方へ向き直って、丁寧に頭を下げる。

「タバサ様、ご不自由をおかけ致しました」

「タバサでいい」

「そういう訳にも参りません。

貴方は御主人様の主。である以上、私にとっても主ですから」

ふわりとけぶるような微笑を湛えるその顔に、私は見惚れそうになった。

「…そう。助かった」

「お氣になさいませんよう。何処か、お体にご不調は御座いませんか？」

恩を着せようとするでもなく、心から私を労り、心配してくれている。

その様子に、私は涙が出そうになる。

それを振り切るように、ふるふると首を振ってみせると、彼女は安心したようにまた微笑を浮かべた。

（もう大丈夫ですよ、安心してください）

そう言いたげな彼女の笑顔は、確かに人の心を安らげるものであった。

「…シンは大丈夫？」

彼の力はよく知っている。

フーケを討伐したり、数万の軍勢を薙ぎ払ってみせたり（彼は必死に隠していたが）。

それでも、ビダーシャルはエルフである。

詳しくは知らないが、エルフの自治組織に所属する一員らしい。

である以上、その力はエルフの中でも上位に位置するはず。

心配はしていなかったが、気にはなっていた。

最も、私が一番恐れていたのは私が盾に取られてシンが思うように戦えず敵にやられるというケース。

シンはそれをよく理解し、まず私の救出を優先させた。

その手際は見事の一言。

任務で敵に囚われた人質を救出したことはあったけれど、全て一人でやってきた。

仲間がいるところも違うものかと、驚いたものだ。

「ご心配なさいませぬよう。

御主人様こそは最強の存在。

聖も邪も中庸も、およそボルテクス界に存在するあらゆる力を取り込んで捻じ伏せたのです。

その末に”混沌王”とまで呼ばれる高みへと至った御方。

神をすら従える程の力を持つあの方が負けるはずはありません。

誇りをすら滲ませるように言い放つ彼女の言葉には、反論を許さぬほどの説得力があった。

しかしまさか神を従えるとは。

私はなんという使い魔を召喚してしまったのかと、心中で苦笑を浮かべた。

しかし、彼の力を思えば、その通りなのかもしれないと思った。

「そう…ありがとう」

「ふふ…タバサ様が無事でよう御座いました。御主人様もきつとお慶びになりましょう。」

お礼の言葉は、御主人様に直接仰ってくださいな。

随分、迷っていらしたようですから…」

「迷う…？」

正直、迷っているシンなど想像もつかなかった。
常に冷静沈着で状況を誰よりもよく掴んでいる。
それでいて誰より強く、優しい。

けれど、とタバサは思う。

悪夢に魘されていたシン。

私に問い詰められて否定していたあの様子は、迷っていると言うに
相応しい。

あの姿を見た時、不謹慎ながら心配と同時にシンの人らしい弱さに
触れたことで心のうちに暖かい何かを感じたことも事実なのだ。
惨劇に関しての迷いだっただろう。

あの件の、一体何を…？

チラリとアマテラスを見やると、彼女はふわりと微笑うただけで何も
言おうとしない。

詳しいことは本人に聞くべきだと言いたげな様子。

私はそれにコクリと頷き、木の幹を背もたれにして座り込んでいる
アマテラスの横に腰を下ろした。

言葉を交わすでもなく、触れ合うでもなく、過ぎていく時間。それでも、夜空を見上げるのは全く同時だった。

side out

side 人修羅

「そうですか…シャルロット様は無事ですか。安心致しました。お礼を申し上げます。本当に…ありがとうございました」

ビダーシャルを下した後、特に警戒する必要も無くなった館。俺は一人ペルスランの部屋へ向かった。クー・フリーンは召喚を解除している。ペルスランに見られた時の説明が面倒だったからだ。

タバサの無事を伝えられたペルスランは、先ほどまでの無表情をどこかに置き忘れたかのような安堵を浮かべていた。その表情から滲み出る好々爺と呼ぶに相応しい人柄は、ずっとタバサを支えてきた年季を伺わせた。

「気にする必要はない。

俺はタバサの使い魔、主を守るのは当然のこと。

むしろ、彼女の誘拐を防げなかったことを悔いている」

本当に、俺は何と言う間抜けなのだ。

つまらないことでタバサとすれ違いを起こし、距離を取り。

そこを狙われ、彼女は敵の手中に落ちてしまった。

こんなことならば何があっても離れるべきじゃなかった。

しかし、ペルスランが口にした言葉は俺の認識をブチ壊した。

「いいえ……シャルロット様は誘拐されたものではありません。
自ら身を差し出したのです」

「な……ッ!? 一体何故そんなことを!？」

タバサが自ら身を差し出した？

一体何のために？

こんな話を聞かされたところで、タバサを助けたことを後悔などするわけがない。

彼女だつてそんなことを望んでいたはずがない。

そうせねばならぬ何かの理由があつたのだ。

「詳しくは私も存じ上げませんが……恐らくは、何かしらの脅迫を受けたのでしょう。」

もしかしたら奥方……シャルロット様の御母上に関係あるかも知れませぬ。

先日までこの館にいらつしゃった奥方は、ヒカワに連れられていききました」

「それだけ聞けば今は十分だ。

とりあえずタバサと合流してくる。

また何か頼るかも知れないが、その時は……頼む」

「はい……今は亡きシャルロット様の御父上、オルレアン公シャルル様に忠誠を誓う者達は、タバサ様のために力を尽くすでありましよう。」

その者達と、私は繋ぎを取っております。

王宮内の動きもある程度伝わってまいりますので、何かあればお知らせ致します。

ただ…御母上のこともございます。事を起こすなら、急がれた方が宜しいでしょう。

手が足りぬことがあればお知らせください」

「ありがとう、タバサに代わって礼を言う。
では…」

軽く頭を下げて、俺は館を出た。

彼女の真意を聞こう。

その上で、今度こそ問う。

こちらへ向けて飛んでくるセイリユウの影を見やって、俺は再度決意を固めた。

s i d e o u t

第二十九話 真意（後書き）

更新が遅れて申し訳ない。

いよいよ最終決戦に向けて話が進んできました。

如何に氷川に見所を作るか、如何にジョゼフを狂わせるか（笑）。
最終決戦をどうするかはまだ迷ってますが、必ず書きます。

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6410m/>

悪魔の勇者

2010年10月12日16時22分発行